

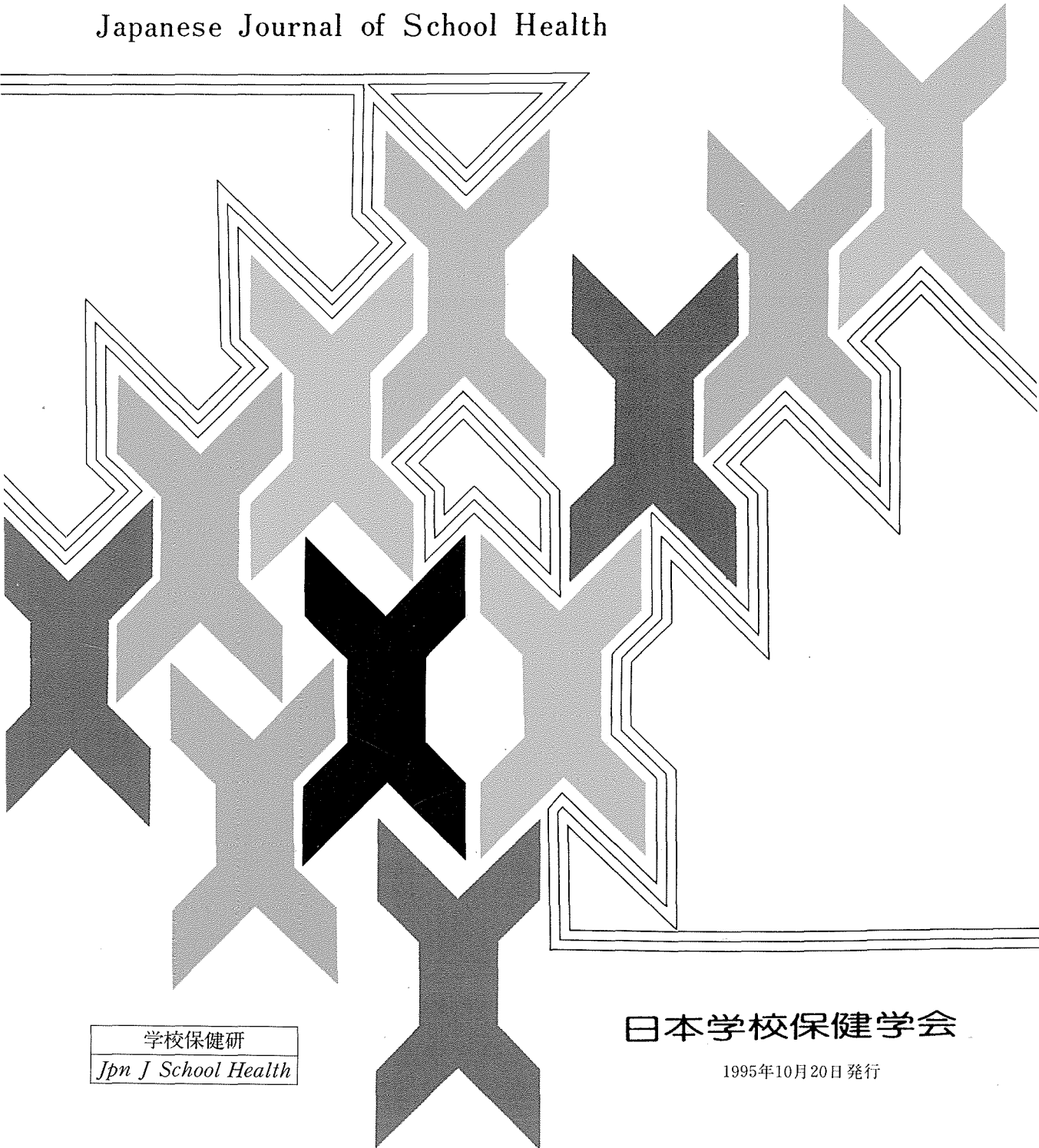
学校保健研究

ISSN 0386-9598

VOL.37 NO.4

1995

Japanese Journal of School Health



学校保健研
Jpn J School Health

日本学校保健学会

1995年10月20日発行

学校保健研究

第37巻 第4号

目 次

巻頭言

- 日暮 眞
留学で学んだこと 262

特 集

- 大震災と学校 -被災地からのレポート-
白瀧 貞昭
心のケアをめぐる 263
- 大橋 郁代
恐怖と無力感の中で 268
- 今出 悦子
個人的体験を通して見たもの 272
- 山口 晋
私の震災体験 学校管理職の立場からの報告 277
- 一北 三夫
緊急避難所としての学校 -17日から26日まで- 283
- 坂東 鐵二
驚愕と機能不能のライフラインの中で 289
- 村田 洋子
阪神大震災を経験して 298
- 明瀬 好子
震災後の子どもの心をうけとめて
-保健室からみた子どもたちと養護教諭の役割- 305
- 立石 光代
被災の経験から 312

原 著

- 大澤 清二, 季 成葉
中国人(漢族)青年の形態の変異(Variation)と生態学的相関(英文) 318

報 告

- 大河内由香, 田中 諭, 長谷川晶子, Eric Laverdure
外国語指導外国人講師の滞在中受療状況 -静岡県- 329

会 報

- 第42回日本学校保健学会のご案内(第4報) 339
- 第42回日本学校保健学会プログラム 343
- 常任理事会議事概要 369
- 〔お知らせ〕 ● 全国養護教諭教育研究会 第3回研究大会開催案内(第2報) 370
- 「国際学校保健」研究の集いのお知らせ 371
- 日本学術会議だよりNo.38 372
- 編集後記 374

留学で学んだこと

日 暮 眞

What I Have Learned in Toronto.

Makoto Higurashi

トロント小児病院に留学したのは1969年7月から1971年6月末までであったから、今から4半世紀前ということになる。その後再度に亘りトロントを訪問する機会があったが、その度毎に町の風景の変貌・発展振りに驚かされた。病院における治療法・研究の内容にも著しい進展ぶりがみられたのは当然である。私の留学時代には、トロントはインシュリンで有名なBantingのお膝元だけに糖尿病関係の多くの研究者、Transpositionの術式に彼自身の名が冠せられているMustard, CardiologistとしてボストンのNadasと共に名声を博していたKeith、遺伝のThompsonらの各部門には世界各国から多くの専門家が来ていたが、時代が移っても循環器・新生児・麻酔・免疫・内分泌・遺伝等の各部門は今でも多くの留学生を集めている。このように時代の変遷とともに周辺の状況は大きく変わりつつあるが、研究の基本的な進め方や仕事へのとり組み方に関しては余り変化しているとは思えない。それはいつの時代にも通じることだし、生き続けることと思えるからである。4半世紀前に私がトロントで学び、帰国後も常に反芻しつつある(現実に実行できない場合もあるのだが)仕事の進め方と仕事に対する姿勢について述べてみたい。

卒業し入局したての頃の私の仕事振りは、猪突盲進的傾向があった。目標を設定したらば、ある程度の吟味をした後に、仕事にとりかかるといった手法であった。仕事を進めてゆく過程で問題が生じたらば、そこで考え直して問題を処理してゆく、といった案配である。ところが私の師事したDr. Conenは、仕事をスタートさせる前に、研究の背景、オリジナリティーの有無検討、周辺状況(対象の入手条件・研究器材

の確保・研究助手の人的配当等)の検討、倫理的課題の有無等々あらゆる条件の検討を先づ試みる。そのためには時間を惜しむことなく、徹底的に討論させた。その吟味の仕方が余りにスローペースであるために、性急な私などはしばしばイライラさせられたものである。このように諸条件を十二分に検討したあとでスタートした仕事は、進行過程で頓挫することは少なく、容易に仕事がまとまる傾向があった。

つぎに、得られた成果を論文にまとめる段階で、またまた入念な作業が行われる。研究がまとまり論文を執筆・投稿するとき、先ず自分で書いた草稿について連名の共同研究者と数回に亘って討論を重ねる。次いで彼らにとっては自国語である英文の論文であるにも拘らず、十分に時間をかけて文章を練りに練ったあげく、その原稿の複写を数部作る。そして、その一部を病院組織の正式構成メンバーであるDept. of Medical Publicationへ、他の数部を論文内容の専門家である知人へ送付し、研究内容・文章・文法上の誤り・図表・写真等の点検を受け、それぞれのcommentに従って訂正すべき点を訂正する。その後、病院或いは研究所内のそれぞれの最高責任者の校閲を受けて投稿する。執筆開始から投稿に至るまで十分すぎる位に時間をかけて内容の吟味が行われるわけである。彼らにとって語学的に自由自在であるはずの自国語の英語の論文を研究内容のみならず、文章全体をあれ程までに慎重に吟味する態度をまざまざと見せつけられて、われわれ日本人にとって外国一流雑誌への日本からの投稿の壁の厚さを感じずにはいられなかった。

(東大名誉教授・東京家政大学児童学科教授)

■特集 大震災と学校—被災地からのレポート—(1)

心のケアをめぐる

白 瀧 貞 昭

神戸大学医学部精神神経科学教室

On Mental Health Care for School Children after the Hanshin-Awaji Great Earthquake

Sadaaki Shirataki

Department of Psychiatry and Neurology Kobe University School of Medicine

1月17日、夜も明けやらぬ早朝5時46分に我々を襲った大地震はほとんどすべての人にとってまさに晴天の霹靂のような出来事であった。特にこの阪神・淡路地方でこのような地震が起きようとは誰も予想だにできなかったことであり、誰もが大地震のための備えなどまったくと言ってよいほどしていなかった。さらに、悪いことに大地震が起こったのはほとんど真っ暗やみの中であった。当初はまったく何がどうなっているのかさえわからなかった。辺りが少し明るくなるにつれてただならぬことが起こっていることはつかめても、それでも何がどうなったかはどうもわからなかった。

大震災後、次第に時が経ち、建物の崩壊の規模、その下に押しつぶされて即死した人達の人数の多さなどが知らされるにつれて、大震災がかってないほどの大規模なものであることが明らかになっていった。その直後から生命、身体への影響が一段落すると、その後には心の面への影響が必ず生じてくるだろうと多くの人によって警告され出した。特に、子どもの心に対する影響、その結果として重大な「不安反応」(PTSD)が生じることが心配された。しかし、具体的にはどこにこのような重大な不安反応を示す子どもがいるのか、あるいは、予防的にそのような子どもを未然に防ぐにはどうすればよいのかなどは示すことの出来る人はいなかった。我々の病院にも、県立のこども病院にもこのようなこころの混乱で訪れた子ども達はほとんど

いなかった。本当にそのような子どもがいたのであろうか、それともたまたま我々の知る病院などを訪れなかっただけなのか。このような不安を多くの児童精神科医が持っていた。

実際には我々の近辺でPTSDの診断ができるような子ども達にはほとんど出会うことはできなかった。これは何も筆者だけに限られた経験ではなかった。日本児童青年精神医学会は大震災直後から特別委員会を作って、その対策を進めた。また、全国から児童青年精神科医が阪神・淡路地区に駆けつけてくれたが実際にはそれほど仕事がなかったことを多くの人から聞いた。

結論的に言えば、大震災後、心の問題を含めて種々の対応を迫られている問題の大部分は大震災によって初めてもたらされたというよりも、その前から実は対応を迫られているにも関わらず解決できずに残っていた問題であったのではないかと思われる。だから、被災した人達の中でも老人、障害者、経済的困窮者達は受けたダメージはかなり大きかったのであり、もっとも対応が急がれるのがこれらの人々に対するものであろう。

大震災直後から医療的ケアの面では最初は応急・救命的ケアが必要とされ、次いで倒壊家屋の下敷きなどになった人達が命は取り留めたものの、後になって内臓のダメージなどの影響に対する外科的、内科的ケアが必要となり、その後には心のダメージに対するケアが必要とされ

るという図式が指摘されていた。このような心的ダメージの一つとしてPTSDという言葉がマスコミの流行語のように取り上げられた。あたかもすべての人々にPTSDが起こるにちがいないと言わんばかりに。しかし、我々は児童精神医学の教科書から子どもの精神的な反応もそれほど単純に生じるのではないことを以前から知っていた。例えば、ある地域に重篤な飢餓が生じたとして、この飢餓によってすべての子どもが一律に影響を被るのではない。飢餓の前から脳障害とか、発達上の障害を持っていた子ども達はより深刻な被害を受けることを、そして、健康な発達を遂げていた子ども達はこの危機をなんら被害なく切る抜け得ることを。

I. 大震災後の重篤なこころの不安 (PTSD = 外傷後ストレス障害) はどのようにして生じるか

さて、ここで一般に大災害などが生じた後にヒトの心の中に発生するとされる「外傷後ストレス障害」(PTSD) がどのようなメカニズムであらわれるのか考えてみよう。その前に PTSD という概念について少し考えてみよう。アメリカ版精神障害分類 (DSM - III - R) には不安性障害のなかにこの PTSD という項目が入れられている。この障害はアメリカではベトナム戦争に参加し、帰還した元兵士などによく見られた精神症状として記載されたという。このような精神障害に対する保障を元兵士が求めた場合、ある一定の基準をもうけておくことが必要であるが、PTSD の概念はこのような目的で導入されたとアメリカの精神科医から聞いたことがある。概念規定を詳細に見てみると、成人でも子どもでも起こり得るような精神症状が並んでいるので、一見、この診断名を子どもにも当てはめてよいように思える。しかし、例えば、全症状が1 ヶ月間以上の持続という規定がそのまま子どもについても同様に当てはまるべきなのか、子どもではもう少し短期間の持続でもよいのではないかという疑問には正確な回答はないのである。筆者はこの機会に過去の文献で子どもへ

の PTSD の診断について調べてみたが、報告者によってかなり異なった適用がなされていることがわかった。子どもについての、PTSD (大人についての概念ではないかと筆者は思っているが) の具体的な症状の詳細な検討が必要であると感じた。今回の大地震後に多くの児童精神科医が PTSD の診断を下すことがほとんどなかった理由は実際に子どもの精神面でそれほど大きな不安が残らなかったのと、今まで言われていた PTSD 概念が本当に子どもについても妥当するの否かの真剣な検討が欠けていたことにもよると考えるのである。

すでに述べたように、大災害という原因が加わることによってすべてのこどもの心の中に重篤な不安反応が生じるという単純な図式ではないことは明らかであろう。大災害後のこどもの不安反応の出現には少し考えただけでも多くの変数が関与していそうである。こどもがどのような状況で (親と一緒にのときか、あるいは家の中でか、外でかなど) 大災害を体験し、その直後にはどのような介入を受けたか (親がすぐに不安を軽減するような働きかけを行ったか否かなど)、さらには、大災害体験以前にこどもは順調な精神発達を遂げていたのかどうかなども確実に変数の一つであろう。筆者はこの不安反応出現のメカニズムは図1に示すように表せるのではないかと考えてみた。まず、大災害体験以前のこどもの状態に依存した変数 - これは発達変数と環境変数の二つからなる個体変数という言葉で表現した - があり、次に災害変数 (場所によって異なる震度の大小、あるいはそれによって生じた家屋の全・半壊の有無など)、さらに大災害直後にこどもがどのような保護、介入を受けたかによって異なる介入変数の少なくとも三つの変数が関係していることを示している。大災害以前の子ども自身の精神発達が順調で、直後に両親からの保護的介入を受けることのできたこどもは仮に大災害そのものの重篤さがかなりのものであってもそれほど不安反応を示さないことがこの図式から理解できるし、実際に我々がこのたびの阪神・淡路大震災で経

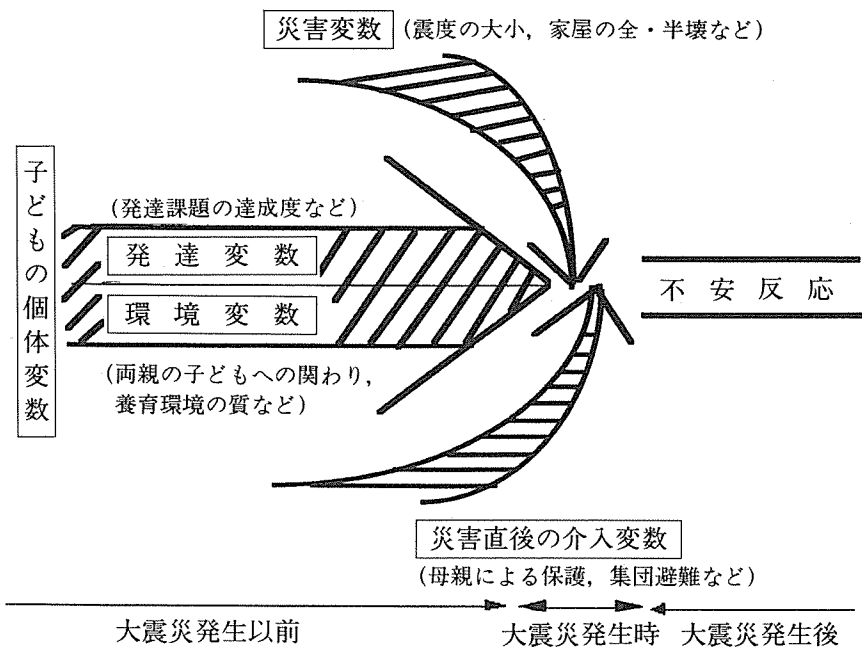


図1 子どもにおける大震災後の不安反応出現メカニズム

験したこともこの図式から導き出せることであった。こどもの発達についてよく言われることの一つは、発達の阻害要因を取り除くことが肝要であるということだが、無視してはいけないこととして、多くの発達阻害要因にも関わらず、案外、発達が阻害されないことがあるのは子ども自身の中に一種の抵抗力みたいなものがあって、このおかげで種々の困難を乗り切ることができるという事実である。

このように今回の日本における大震災の結果、子どもの心にそれほどの不安や大混乱が生じなかったのはなぜか、何か説明できる理由があるであろうか。それは、今回の大震災発生の時間がまだ夜も明けやらぬ真っ暗やみのなかであったことが関係しているのではないかと思う。暗さが実際以上の恐怖を人々にもたらしたことは事実であるが、子どもの場合、この恐怖を何よりも和らげてくれる親と一緒に大震災を体験したことが、この時間帯であったことの最大のメリットでないかと思うのである。また、集団避難所での共同の生活ということも、大人にとっ

て恐怖を共体験によって和らげることができるメリットを生んだと思うのである。この制度は日本に独特の、ユニークなものであると聞いている。ひょっとしたら、このことが今回の大地震のような災害をたいした精神混乱もなく日本人が切り抜けることができた原因かもしれないと筆者は考えている。

II. 大地震後の被災地・西宮市での生徒のこころの状態

前述したように、この度の大震災時に子どものこころに重大な混乱・不安が生じた訳では無さそうである。我々の外来で、今度、大震災後に大きな精神的動揺を来たした子どもを連れて親が受診しますからよろしくといわれてお会いしたケースはよく聞いてみると、大震災以前からあった夜尿が少し回数が増えているとか、大震災後の2～3週間、親から離れて寝ることのできない幼児のケースであるとかといった具合であった。そして、これらの症状はせいぜい続いても2～3週間であり、1ヵ月間を越えるこ

とはほとんどなかった。

今回の大震災の直後から、西宮市では子どもたちに必要な場合、迅速に心のケアをサービスできるように教育委員会学校保健課が各学校、養護教諭を通じてその必要性を調査した。そして、筆者も教育委員会から要請があれば、緊急に学校に赴いて関係教師と対策を討議する態勢を整えて待機していた。しかし、実際には震災後の数カ月間でもこのような要請があったのは全体でも数件であり、筆者が実際に学校に赴いたのは2回ほどであった。そして、そこで相談にのったケースは既に述べたように、大地震によって初めて精神的不安反応が生じたというよりも、それ以前からあった多少の不安傾向が増強したという程度のものであった。全壊した家屋の下敷きになり2日後にやっと救出された小学校5年生の児童は横にいた母親を即死の状態で見失い、自分も倒壊した瓦礫の長時間の圧迫のため四肢の一部を切断せねばならない重大な被害をこうむったが、それでも精神的にはほんの数週間の軽度の混乱で、後、自然に回復していった。おそらく、本児は震災後のPTSDをうんぬんするならば最もリスクの高かった子どもである。それでもPTSDと診断できるほどの状態に至らな

かったのは、本児にとって全面的に依存し、保護されることのできた父親がいたからである。

大震災後の混乱した状況のかなで、児童・生徒の心の問題を早く対処せねばという特に外部からの圧力はかなり強かった。しかし、対応が必要な児童をどうすれば見つけれられるのかさえこの混乱のなかでははっきりしなかった。西宮市では各学校の養護教諭が在籍児童生徒の安否を確認したり、精神的な問題を呈している児童生徒がいないか即座に把握し、教育委員会に報告があったと聞いている。しかし、これは例えば神戸市ではうまくいったと言えず、かなり時間が経った後でもなお児童生徒の実態が把握されていないのだということを知った。西宮市では震災のまえから教育委員会、精神保健推進協議会、各校における推進委員、養護教諭、精神科医を結ぶ連携ができていて、一応の機能を果たしていたことが上記のように震災後の児童生徒の精神状態の実態把握が迅速にできた理由ではないかと考えられる。

III. 西宮市での学校精神保健活動

さて、筆者はここ10年来、西宮市での学校精神保健活動に関わってきた。西宮市では市立の

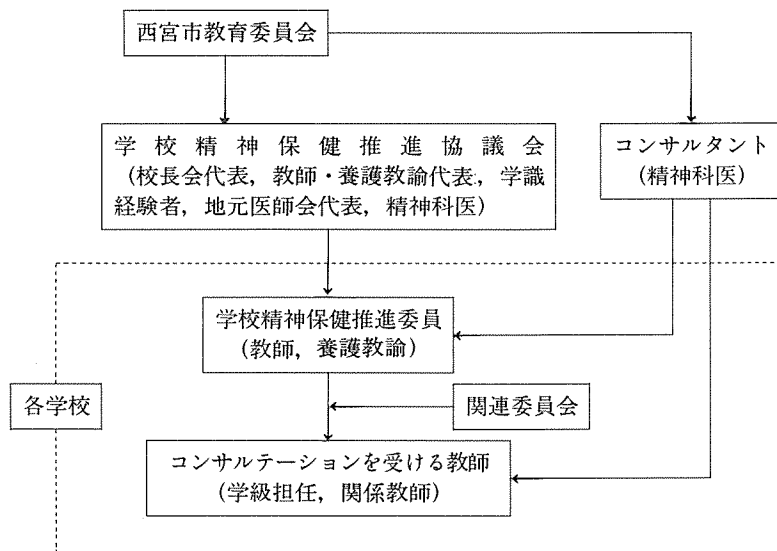


図2 西宮市学校精神保健活動とコンサルテーション制度

表1 平成4年度西宮市学校精神保健活動「コンサルテーション事業」の概要

1. 参加した精神科医（コンサルタント）数：12人

2. コンサルテーション回数

幼稚園	： 2回
小学校（42校）	： 36回
中学校（19校）	： 40回
高等学校（3校）	： 6回

3. コンサルテーションの内容

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
不登校	0	15	14	3
神経症性症状	0	13	1	1
発達障害	0	8	3	0
行動障害	0	6	0	0
家庭内問題	2	1	4	0

幼、小、中、高の全ての学校の子どもたちを対象にその精神保健を統合的に促進する活動を行っている。その中心は精神科医が各学校を担当し、学校に赴いてここで子どもの心の問題に対処しようという「コンサルテーション事業」である。図2にはこの西宮市における学校精神保健活動実施の機構図が示してある。日本では現在、学校精神保健の分野で多くの課題があることは承知のことであろうが、不登校、いじめ、神経症傾向などは学校精神保健の枠組みの中でも真剣に取り組む必要のあることがらである。いわば、これらの児童生徒の心の問題は今回の大震災のいかに関係なく以前から存在しており、その対応を迫られていたのである。

表1に平成4年度の西宮市学校精神保健活動の一環として行われたコンサルテーション事業のごく概略を示してある。昨年度はさらに事業は拡大され、合計およそ100回近くの学校でのコンサルテーションが行われている。もちろん、このコンサルテーション事業で扱われた児童生徒のこころの問題は不登校をはじめとして、すでに何らかの精神的問題としてあらわれているものである。精神保健の範疇で言えば、第二次、第三次予防に相当するものである。まだ、病気としては現れていない、潜在的なものとか、ご

く軽微なものはこのコンサルテーション事業ではまだ対処されていないことになる。この意味で、西宮市の学校精神保健の活動は不十分どころが多く残されていたと言わねばならない。

昨年末から西宮市学校精神保健推進協議会では精神保健の第一次予防をも含む広範な包括的精神保健の枠組みの具体的展開を議論していたところであった。この中には、近い将来の精神障害発生リスクを高く有する児童生徒への対応も含まれることになる。

この度の大震災の被災地からのレポートの中でこのような学校精神保健活動について紹介したのは、震災の前からあった西宮市学校精神保健活動の枠組みが突然生じた大震災後の学校の子どもたちの不安、ストレスを中心とする精神混乱にも十分対応できるという筆者の主張による。

おわりに

現在、震災後の対応をどうするのかという各方面からの要請が飛び交っているが、心の面についてのケア、特に児童生徒の精神的ケアをうんぬんするならば、大震災に関係なく児童生徒の心の中にある種々の精神的ストレス、不安に対処するような精神保健システムの構築こそが最も必要とされているものではなかろうか。

恐怖と無力感の中で

大橋 郁代

兵庫県教育委員会体育保健課

Passing in Fear and with a Feeling of Helplessness

Ikuyo Oohashi

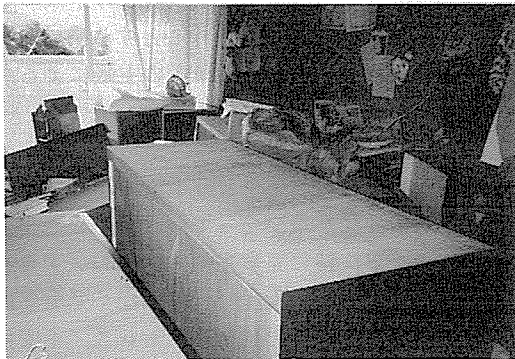
Educational Board of Hyogo Prefecture

1 はじめに

突然、阪神・淡路を襲った震度7の地震がどんなものであったのか。書物や映像では既に伝えられたとおりであるが、被災地における私的個人情報を先ず述べてみたい。教育行政に携わる身であるが、その前に1人の被災者としての体験談を読んで頂きたい。次に兵庫県の被害状況を報告し、震災時において学校教育が負うべき役割は何なのか、私の今後における課題解決の糸口を教えて頂けたら幸いです。

2 阪神・淡路大震災と私

ガッちゃん、ガッちゃん、ガッちゃん、自分自身がガラスケースの中において揺さぶられているような錯覚に陥り、何が何だか訳が判らないが、とんでも無いことが起こったのではないか



写真A 本箱とタンスが倒れた。この下に、子どもが寝ていました。

という恐怖で眠りからやり起こされた1月17日であった。

真暗闇の中、大声で我が子の名を叫んだ。返事がない。その一瞬、頭の中が真っ白になり意識を失ったような気がした。「どうしよう」「死んでしまっていたらどうしよう」とただおろおろするばかりで何もできない。気を取り直して早く助けなくてはとあせるが、暗闇で何も見えない。いつもの場所に置いたはずの、懐中電灯を探し求めたが、いつもの場所がいつもの場所で無くなってしまって、探す術もない。手探りで、無我夢中に子どもの部屋へたどり着き、再度、名を呼んだ。「動かれへん、助けて」「ここ、ここ」という声を聞いて安心したのも束の間、暗闇の中で手探りで触った箆笥を持ち上げて助けようとするが、ビクともしない。夫が助けに来てくれて、やっとの思いで家族4人が揃って、外に出た。とにかく安全な所まで逃げるのが精一杯であった。

避難する途中「助けて」という多くの叫び声を聞いたが、どこをどのようにしたらよいのかまるで判らない。後で気付いたが、玄関のドアが開かなかったらしい。親子がお互いに安否を確認出来なかったのは、ほんの僅かな時間であったと思うが、子どもは身動き出来ない状態で親の呼び声が聞こえなくなったので、親は死んだと思ったという大変な恐怖の時間であった。

以後、1か月程は、親子が団子のようにくっつきまわって生活をしていないと、不安で仕方

がない毎日であった。

電気や通信網が絶たれ、頼るのは車のラジオと携帯ラジオの情報のみであった。

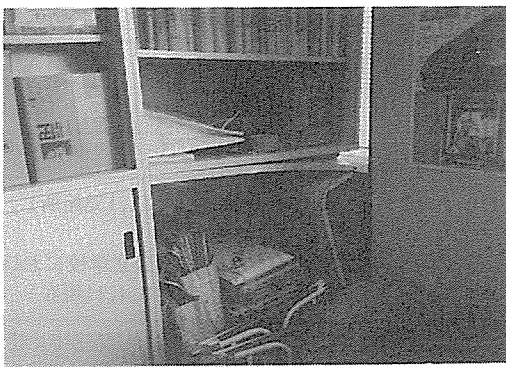
その日は、夜が明けるまで茫然としていて、気が付くと午前9時ごろであった。取りあえず職場に電話を入れなければと自宅に戻って何度もかけるが、かからない。仕方なく連絡することをあきらめた。当日は近くの幼稚園に避難した。その後、私は、交通手段が絶たれていることを理由に、1週間程出勤しなかった。2日目から、ライフラインが正常な場所に避難した。

この1週間の間に、災害の大きさを実感し、命があったことが不思議であると思うばかりで仕事への意欲等まるで失っていた。

公務員としての使命感等まるでなかった。

後日、被害のひどかった地域の学校訪問をした時に、校長先生から聞いた話では、先生方がわが身のかたはさておき、まずは自分の勤務校に駆けつけられたことを知り、子どもたちを思う教師の神髄を見た気がした。それに、引換えわが身を恥じたものだ。

震災後、1週間程して電車やバスと徒歩で3～4時間かけて、伊丹の自宅から神戸市中央区にある県庁まで通勤をした。新神戸駅から、県庁まで平常であれば徒歩20分程度のところが40分



写真B 県教委・体育保健課内一南窓側のロッカーはこんなに歪んでしまいました。

位かかる。それも、日によって、通行出来る道が異なる上に、ちぎれた電線が垂れ下がり倒れかかったビルの間の、隆起や陥没した道路を歩

くことは危険で困難を要した。やっとの思いで県庁に到着すると、きょうも無事に着くことができたとほっとしたものである。

しかし、やっとの思いで出勤しても、壊れて歪んだ建物の中で、余震に襲われながらの勤務はとても平常心ではできない状態であった。

夕方5時になると、辺りは真っ暗闇で、ネオンの消えた街はゴーストタウンと化するのである。震災による停電のため、外灯はつかないの

で人々は、ただ黙々と下を向いて家路を急ぐのである。開通している電車は、リュックを背負ったひとたちで超満員、ホームは長蛇の列であった。庁内のライフラインであるが、水は井戸水がポンプアップされていて、水洗トイレは平常どおりの、利用が可能であったけれども、飲料水は1階の道路にある水道の蛇口までペットボトルを持って男性職員が汲みに降りて確保されていた。弁当と水筒を持参する日が続いた。3～4時間の通勤道中はトイレに行かなくても良いように、水分制限をした。

平常な勤務ができるようになったのは、新年度になってからであった。

職員間でも被害の程度は、一律ではないので被害が少なかった人は、仕事の負担が重かったと思う。学校が再開されていないことと、自分自身が生活に追われていることで、学校保健の立場で、いま考えなければならぬことが何であるのか考えることができなかった。

通勤の道中あちこちに、花が置かれ線香が手向けられていた。毎日こんな中を通勤している訳であるが、そういった光景を見るとつい涙が溢れてしまうのである。

新聞記事を読みながら涙、テレビが報じる震災放送を見ては涙の日々であった。

このような、環境下に我が身を置き、何をなすべきだったのか考えてみたい。

3 阪神・淡路大震災による兵庫県被害状況

災害救助法指定市町数は10市10町。

震源地は淡路であるが、県庁所在地である神戸市を中心に、阪神地区といわれる都市が大被

害を受けた。平成7年4月24日現在、死者は5480名、家屋被害200,162棟(表1、表2)である。ピーク時の避難者人数は316,678名とされている。(1月23日現在)

また、公立学校園の園児・児童生徒の死者は295人であり、公立学校園において、父母、保護者・家族を失った児童生徒数は表3のとおりである。

学校の建物の被害は表4のとおりである。

4 緊急避難場所としての学校の活用状況

震災後の新年度を迎えた4月24日の避難箇所及び避難者人数は表5のとおりである。

公立学校の避難所は、全避難所の35%であり受け入れている人数は、全体の60%であった。

表1 兵庫県内の被災状況(H.7.4.24)

人的被害			家屋被害	
死者	負傷者	行方不明	焼失家屋	倒壊家屋
5,480名	34,900名	2名	7,456棟	192,706棟

※災害救助法指定市町数 10市10町

表2 兵庫県内公立学校・園幼児児童生徒等の死亡者数(単位:人)

校種	小学校	中学校	高等学校	盲聾養護学校	幼稚園	児童生徒合計	教職員
人数	162	81	41	3	8	295	15

表3 兵庫県公立学校における父母保護者を失った児童生徒数(H.7.4.13)(単位:人)

校種	父母	父又は母	家族	保護者
幼稚園	0	4	11	0
小学校	11	106	255	17
中学校	11	74	216	14
高等学校	16	60	※124	20
盲聾養護学校	0	1	1	1
合計	38	245	607	52

※高等学校 家族欄 一部未調査

学校が避難所として活用されていることのために、授業に影響があったのは表6のとおりである。

5 救護所として活用の保健室の実態

兵庫県では平成6年12月末に小学校と中学校における保健室の実態について色々な方面から調査を実施していた。

表4 兵庫県内被災学校数(被災した学校数/学校総数) 単位:校

	全 県		公 立	
	数	割合	数	割合
小学校	510/863	60%	501/849	59%
中学校	252/403	62%	229/361	63%
高等学校	201/229	87%	163/177	92%
盲聾養護学校	31/41	76%	31/41	76%
幼稚園	351/845	41%	171/581	30%
計	1345/2381	56%	1095/2009	55%

表5 緊急避難所としての学校の活用状況-避難箇所及び避難者人数-(H.7.4.24)

	避難箇所数		避難者数	
	箇所数	割合	人数	割合
公立学校	県立学校	8箇所	2,168人	
	市町立学校	208箇所	26,303人	
	小計	216箇所	28,471人	
その他(公立学校以外)	403箇所		19,024人	
合計	619箇所		47,495人	
公立学校の受け入れ割合	35%		60%	

[ピーク時]1月23日現在 316,678名(1,153箇所)

表6 阪神・淡路大震災の被災地の公立学校における授業への影響について(H.7.4.11現在)

	平常の授業が実施困難な学校(他校借用・短縮授業)	体育・特別教室利用の授業等に影響がある学校
小学校	7校	89校
中学校	1校	33校
高等学校	8校	10校
合計	16校	132校

その調査結果から、保健室の位置についてみると、管理棟にある学校が73%、教室棟にある学校が17%である。保健室の広さについてみると、1教室以上というものが53%、1教室以下というものが47%である。設備面では、ガスがないところが22%、水道がないところが2%ある。暖房器具の設置は98%、冷房器具の設置は56%である。緊急連絡用外線電話の設置率は24%である。休養のためのベッドの数は1,000人規模の学校で5台というものが約半数、1,000人に1台という学校が7%ある。男女別とか、個人のプライバシーが守れるような間仕切りやカーテンがない学校が31%ある。消毒器具の設置状況であるが、煮沸または乾熱用器具を設置していない学校が17%ある。

また、児童生徒用の保健関係消耗品の1年間の購入予算額であるが、1人につき400円以下という学校が85%をしめている。1,000人規模の学校で年間400,000円以下ということになる。半数位の学校が年間50,000~200,000円と回答している。

このたびの震災では、保健室が避難所の救護室になったところが多かった。しかし、上記の実態から見ても判るように、物質的には、何の備えもできていない。

また、学校に医薬品等を備蓄する計画が持ち上がっているところもあるようだが、誰がどのように保管、管理していくのか。

6 養護教諭の役割

このたびの震災時に避難所となった学校で、校長先生が停電によりマイクが使用できない中で、最初に大声を張り上げて叫んで回られたのが「お医者さんはいらっしゃいませんか、看護婦さんはいらっしゃいませんか」ということだったそうです。学校に遺体が運ばれ、重症の患者が運ばれてきたということです。

このような震災が学校の授業中におこったとき、医者や看護婦の役目を、校長先生や地域の人たちは養護教諭に求めないだろうか。

養護教諭に対する文部省の見解は、養護教諭は養護教諭の免許状をもっておればよい訳であっ

て看護婦免許は課せていないということであり、教育現場では、教育の場に医療行為を持ち込むなどという指導がされている現状とのギャップをどのようにうめたらよいのか。

7 まとめ

防災、危機管理といった会議が県であるいは国でもたれている。

今後も、学校が避難所としての機能をもたされるのであれば、学校保健という観点から色々検討をしていかなければならない。

また、現行の保健室の実態であれば、とても救護所の機能は果たせない。また、現在の養護教諭に救護所の要員としての役目は課せられない。

今後どのような方向づけがされようとしているのか判らないが、日本全国、いつ、どこで災害が起きても、全員が共通理解の基で速やかに対応できるよう心掛けたいと思う。

失われた多くの尊い命を、無駄にはしないとと思う。



押し潰された教室の内部
(提供：市立西宮高等学校)

■特集 大震災と学校—被災地からのレポート—(3)

個人的体験を通して見たもの

今出悦子

西宮市教育委員会学校保健課

What I Found by Personal Experience of the Great Earthquake

Etsuko Imade

Educational Board of Nishinomiya City

1. その日

1995年1月17日未明、「ドンッ」とものすごい衝撃と同時に息ができないほどの圧力を全身に感じて目が覚めた。「何なのよ、これは!」と思わず声に出しながらベッドの上で半身を起こした。真暗で何も見えない。下半身が重い。ベッドの横の本棚に詰め込み、積み上げている本が一挙に崩れ落ちてきたのかと思った。が、手に触れてきたのはギザギザの大きなコンクリートの塊だった。ミシッ、ミシッと建物の軋む音がする。後ろに手をのぼしてみると壁がない。隣家との境の壁がない。手がすうっと入ってしまう。足を片方ずつ引き抜いて(引き抜くことができた)体をのぼして窓の位置を確かめた。窓がなかった。手に曲がった鉄骨が触れた。ベッドは廊下側の窓と平行に隣家との境壁にくっつけて置いていた筈だ。

方向がわからなくなった。隣家の人の名を後ろを向いて呼び、横を向いては大声で呼んでみた。返事は返ってこなかった。かすかにガスの臭いがしてきていた。寒かった。

さっき目が覚めたときは5時過ぎだったが、あれから、また、眠っていたのだろうか。いま何時ごろなのだろう。わからなかった。手を上に伸ばすと天井に触れた。

どのくらいの時が経ったのか、真っ暗な中に同じ集合住宅4階に住む妹と中学校3年生の姪の私を呼ぶ声が聞こえた。大声で応えているのに探

し回っている。やっとな姪が私の声を聞きつけたらしく泣き声で母親に知らせているのが伝わってくる。小学校6年生と小学校3年生の妹の子どもたちの私を呼ぶ泣き声と外の慌ただしい物音が聞こえてきた。何処かが燃えているらしいと思うまもなく、喉から鼻から煙が入り咳が出、目にしみた。はじめて「たすけて」と叫んだ。

正午近く、私は猛火に包まれる直前に救出され救急車で運ばれた。机を片方に寄せた教室の床に毛布や薄い布団にくるまった人達が横たわっていた。その教室は次々に運び込まれる人達で、すぐいっぱいになり、次の教室があわただしく伝えられた。もう幾つ目かの教室らしい。私の左横に寝ている女の人の枕元で、頭に包帯をし、足を骨折したという男性が大きな声で倒壊した家の話をしている。右横には大腿骨骨折で運び込まれた若い男性が血の気のない顔をゆがめて唸っていた。「ガーゼもない」という会話が耳に入ってくる。医師らしい人に「こんなにまだ温かいのに、なんとかしてえな、息子と孫を助けてえな、先生、お願いや」と繰り返し、繰り返して訴えているおばあさんがいる。まだ上の孫が埋まったまま見つからないと泣きながら訴えている。救急車の中で、とりあえずと左腕と左耳の火傷部にガーゼを当ててもらったが、とても診察や処置を申し出れるような雰囲気ではない。

私が運び込まれた時には、もう、医薬品や衛生器材はほとんどないようであった。

起き上がって手伝いたいと思った。救出後寝着もハサミで切り取られ裸同然に毛布を巻き付け、怪我人の中に混じって横たわっている自分が情けなかった。

夕方、迎えにきた妹夫婦の車で居住地の避難所になっている芦屋市立小槌幼稚園へ行く前に、妹が持ってきてくれた衣服を着、妹の靴を借りてトイレに行った。ひどく汚れていた。躊躇していると、誰かがバケツの濁った水を流してくれた。避難所に行く車の中で、救護所になっていたこの学校が、芦屋市立精道小学校だと聞かされた。

私と同様に一人暮らしだった隣家2軒の人は亡くなった。その一人は神戸市立学校の教師だった。

2. その後の1週間

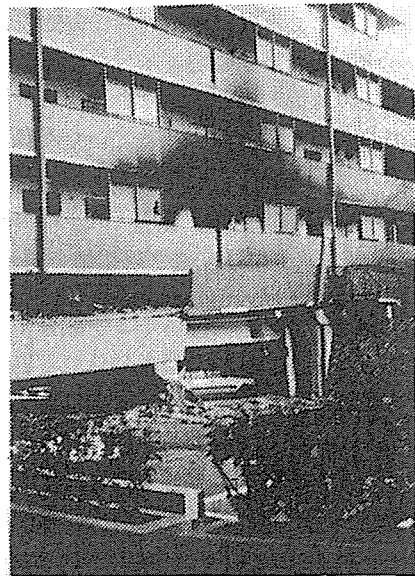
地震から3日目の夜、避難所中に響き渡るような声で私の名を呼び、友人が迎えに来てくれた。私は3日目の夕方まで消息不明であったらしい。知人が連絡してくれた筈だが、混乱状態の役所では無事な職員のことなどその場で忘れ去られたのだろう。前任校の先生2人が崩壊し延焼した私の住居を訪ね、「これはダメだと思ったが念のために」避難所に探しに来てくれて職場に通知してくれたのだった。

集合住宅1階の私の住居は、下のピロティ部の柱が折れ、上6階分の重量を受けかねて1/2に押しつぶされていた。妹は、ドア上部から下がつぶれ開口部のないコンクリートの中から私を救出することは、ほとんど不可能だと思っていたらしい。それに隣家から出火し、たとえてこれでも大怪我か大火傷の状態を覚悟していたと言う。電話が通じなかったこともあるが、私の依頼にもかかわらず妹家族は私の側を離れず、私の職場に連絡することなど念頭にないようだった。私の体が「どうもない」筈がないという。地震の翌日、心配する妹夫婦に連れられて行った病院はあちこちに亀裂があり、中は薄暗く怪我人でごったがえしていた。床にも手洗いやトイレにも通れる所には、こびりついた大小の血溜

まりの跡があった。階段の下の空きスペースにも毛布にくるまった人が蒼白な顔で横たわっていた。声高にしゃべる人は誰もいない。長い時間待った。前夜遅く、妹の知人の知人という人がアロエを2枚に割いて火傷した左腕に張り付け、ガーゼと包帯で包んでくれていたのが有り難かった。病院で1日分の痛み止めをもらい、その後はいただいたアロエを朝晩取り替えた。

西宮市の友人宅には、私、妹、妹の子ども3人がお世話になり、妹の夫は芦屋市の避難所に残った。妹はコープの食品部門職員のため地震翌日から呼び出しがかり私の病院受診後出勤していた。神戸西部にある私学勤務の友人も片道3時間以上かけて出勤し始めた。私たちを避難所まで迎えにきてくれた友人のご主人は、職場に泊り込んで帰宅されない。私にも友人宅に迎えられた20日夕方には、職場の同僚より、問題が山積しているとの連絡が入っていた。

友人宅の近くのスーパーが開業し始め、私は借りたお金で、とりあえず着るものや化粧品を買い、1週間後の1月23日から職場に出かけた。買い物にも職場の近くへも妹の子ども3人がついてきていた。子どもたちにとっては友人宅は見知らぬ人の家である。また、私が救出される



崩れたマンション、やがて炎に包まれた(後日撮影)

一部始終を泣きながら見つめていた子どもたちの気持ちを考え、最初の週は、職場で働く時間を午前中、午後2時まで、3時まで、4時までというようにさせてもらった。暖房もなく、騒然とした職場の雰囲気の中で、こうした個人的な配慮を受けるのは有り難く、また、つらかった。しかし、友人宅で過ごした半月余の日々は、私や妹、とりわけ妹の子どもたちにとって、震災後の心のケアという点でかけがえのないものを与えられた日々だったと思う。

3. 職場では

西宮市では1月21日10時半現在、避難所192カ所。そのうち市立学校園は小学校42校中35校、中学校19校中14校、幼稚園22園中4園、高校3校中1校、養護学校1校の55校園。死者1056人、全壊家屋11641戸、半壊家屋5431戸、行方不明者50人、避難者数33863人と報告されている。

被害の少なかった北地区と南地区の一部を除いて市街地のほとんど全ての学校が避難所となっていた。高校3校のうち1校は校舎が大きく崩れ、1校は遺体安置所である。

教育委員会の会議室にも避難者が入っていた。

出勤後すぐに取り組んだことは避難所になっている学校園の衛生問題とインフルエンザ流行に備えての対策だった。市庁舎の6、7、8階の損壊がひどく、そこに入っていた部課はちりちりに分散していたが、なんとか環境衛生課の担当係長と連絡をとることができた。遺体管理関係のしごとを追われているとのことだったが、各学校には、今週中に、とりあえず、クレゾール2~3本と台つき洗面器1コを配布する。一方で、消毒班は保健所、業者関係にも協力してもらい避難所になっているところは優先的に消毒に回るとのこと。しかし、私が救護所、避難所で見ってきた状態ではとてもそんな程度では追いつかないと思い、環境衛生課の予算で消毒剤を購入し補充してもらうことを依頼した。また希望する学校側で消毒してもらうために噴霧器5台と別途消毒剤を学校保健課に貸与してもら

うことにし、学校での消毒については、学校薬剤師会に指導をお願いした。

インフルエンザに関しては、医師会から学校医や医療機関の稼働状態を聞き、健康管理課と連絡をとり一覧表を入手して対策本部に報告した。薬品・衛生器材等の配布、補充は健康管理課が行っているとのことであった。環境衛生課も健康管理課も、私が連絡の取れた担当者たちは、一面識もない人たちだったが話もはやく仕事もはやかかった。

教育委員会では、各課、係が分担して避難所になっている学校園に応援に行っていた。私は1週間出遅れたため課内に残って連絡調整にあたった。

4. 学校再開

1月30日、阪神間の学校再開が決まり被害甚大の一部学校を除いて子どもたちが登校した。妹の子どもたちも友人宅から芦屋市の自分の学校に行った。中学校3年生の姪のクラスでは和歌山や京都から登校してきた生徒もいたという。姪は亡くなった級友の話をして泣いた。甥たちのクラスでも半数近くが欠席していたようであったが、6年生の甥には算数と国語のドリル各3ページの宿題が出されていた。教科書やかばんなどは取り出せていなかったもので、甥は宿題に戸惑い、そんな子どもの姿に大人たちはあわてた。毎日の食べる事、アパート探し、それに自分たちの職場(仕事)の問題に追われ、目の前の子どもの学校再開への準備をすっかり抜かっていたからだ。

私は西宮市内に、妹家族は尼崎にそれぞれ親友にアパートを見つけてもらい、2月5日に引越した。

私の職場では、学校再開と同時に子どもたちの被災状況についての調査を各課・係で開始した。合同で実施できるものもあったが、各方面からの短期日内報告要請に応えるため、文書と同時に学校園への電話による聞き取り確認調査を繰り返した。学事課は在籍(家族の状況も含め)と教科書等の必要な状態の子について、学

校教育課生徒指導係は指導上特別な配慮を要すると思われる子について、私の所属する学校保健課は事故報告をまとめた。

西宮市では、小学生35人、中学生20人、幼稚園児1人の尊い命が奪われていた。また、12人が重症を負い入院していた。

一方、震災数日後から「心のケア」について、養護教諭や教師対象に講演しようという申し出や、チーム又は単独で学校現場に入り教師や子どもの相談活動をしたい、あるいは、主婦だがカウンセリングの経験があるのでさせてほしい等の要望を間接的に（仲介人を通して）何度も受けた。「心のケア」に関しては、学校再開後、周囲の声はますます大きくなり「どうするつもりか」「はやく手を打て」「何をしてるんだ」との質問、要望が相次ぎ、窓口となった学校保健課は資料づくりや応接に追われた。

西宮市教育委員会では、昭和62年度から学校精神保健推進協議会を設置し精神保健コンサルテーション事業を実施しており、平成7年度の現在、15名の児童青年精神科医に市立学校園のケース・コンサルテーションを依頼している。震災後も早い段階で、各学校園および15名の先生方には危機コンサルテーションの実施について連絡・依頼し、急を要するケースについては、コンサルタントである精神科医に、交通機関寸断の中を万難を排して該当の学校まで出向いていただきコンサルテーションを実施した。これまでの継続の上に立って、今後も長期的、継続的に学校医同様の関わりをしてくれる専門家の存在が既にある、あわてることはない状態だと説明しても新聞やテレビの取材も含め、周辺の声は高くなる一方であった。

2月21日（火）に県教委が遺体安置所になった西宮市立高校のホールを会場にして、校長対象の「心のケア」研修会を開催した。講師は前記15名の精神科医のうちのひとりであるA教授である。開催要項は数日前にFAXで私の手元に届き、それを増し刷りして学校に流したが、「今、校長が研修会などに出かけておられる状態かどう

かわからないのか」等の抗議があり、出席者名簿（責任出席）の提出は、外された。

西宮市教委も総合教育センター研修課が3月1日にB教授を講師に依頼して「心のケア」研修会を開催した。B教授のグループは、いま、研修課が依頼する形で、西宮市の小学校2校、中学校1校に入り半年～1年間にわたって研究されている。

県教委の学校巡回相談、来所・電話相談が2月22日～3月24日にかけて実施される通知も学校に流した。

災害を受けた子どもたちの心の理解とケアに関するパンフレット、書籍等が県教委を通して、あるいは、個人の寄贈という形で市教委に届き、それらについても、逐次、学校園に発送した。

同じ冊子が日を違えて別のルートで送られてきたのもあった。また、震災とは無関係の著書を学校宛の送付文をつけて送ってきた大学教授もおられた。防塵マスクも数箇所から届いた。

2月に入って水道、ガスの復旧工事が急ピッチで進められ、工事完了済みの連絡をうけた学校園から水質検査を学校薬剤師会に依頼した。学校給食開始との関係もあったが、遠方から応援に駆け付けてくれた給水車引き上げの問題があり、検査を急がされた。学校薬剤師会のメンバーは、副会長お一人の他は全員被災されていたが、市教委の依頼に快く応え動いてくださった。薬剤師会事務局の破損検査器具については、学校保健課の予算で充当した。

平成6年度予算で3月までにすべき仕事、新学年の定期健康診断関係その他の事業計画・準備等本務をこなしつつ、間断なく入ってくる震災関係の仕事のため、帰宅時間は遅くなる一方であった。

5. まとめに代えて

私は、この震災で、救護所、避難所、救急病院、疎開（友人宅）、仮住居（アパート）、そして、6月末現在から全壊認定の賃貸マンションへと転々として過ごしてきた。仮設住宅は、妹家族のところは

出入りして体験した。倒壊したマンションはまだ解体されず無残な姿を曝しており、再建は何年先になるか分からない状態で、被災者としては大体フルコースを味わったのではないかと思う。そこで、災害地の公務員と被災者の両面から体験し見てきたことを長々と記してみた。

今、災害時の学校の役割、保健室や養護教諭の役割について「いかにあるべきか」が論じられている。学校は地域に点在し、災害時の避難所に指定されているところが多い。住民は平素からそのことを知っており、今回の地震発生でも学校に多くの人が押し寄せた。西宮市では、当日、7時5分に「災害対策本部」を設置し、教育委員会では、総務部に本部を置いた。学校では、校長、教頭、出勤教職員で避難者に対応した。一部学校では、教職員の到着が間に合わず、市民が学校の鍵を壊し教室や体育館に避難したケースもあった。

予期しない災害発生の大混乱の中で、自らも被災しながら、被災住民に頼られる立場に立たざるを得なかったのが学校教職員や市役所職員である。私の行った救護所や避難所が機能していた中心に学校教職員の存在があった。教職員たちは、幾日も泊り込んで避難者の世話をしながら、片方で子どもたちの安否を確認する作業、校舎の被害状況の点検、散乱する備品の整理などに従事した。

健康相談に避難所を巡回していた保健婦に出会った時「養護の先生が避難している人の状態を实によく摺んでおられるのに頭が下がった」と聞いた。養護教諭もまた、自分の役割をしっかり果たしていたのだと思う。

防災計画の見直しが各地で行われていると言われる。先日、私の職場に非常用飲料水として浄化したプール水の水質検査依頼があった。いろいろな検討、試みが進んでいる。

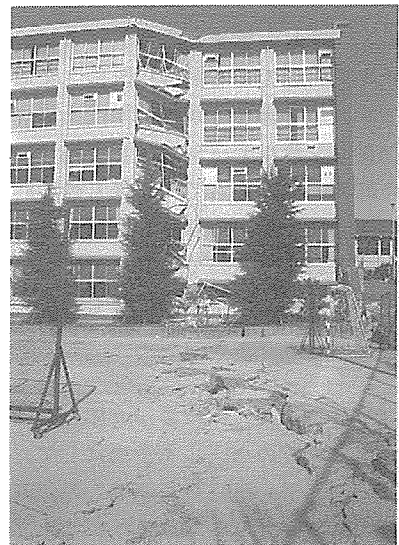
防災のハード面については各市町村単位で考えられ、ライフラインの確保や応援体制等は全国規模で検討されていくものと思われるが、個人的体験の中で痛感したことは、被災者援助の

核となるのは、やはり、人だということである。

自然災害はどのような形で発生するか分からない。私は、今回の被災で人と人の関係の有り難さを身にしみて感じた。奇跡的に救出され、住居・家財のすべてを失ってPTSDの症状が出るひとりと言われながら、いまだに元気だし、今後も症状がでるとは思えないのは、遠近のたくさんの人たちの温かさが「心のケア」をしてくれたからだと確信している。

被災者としては、「心のケア」の大合唱については、むしろ、不安の増大を招きかねないと感じた。

また、何かあると役所の対応の遅さ、堅さがマスコミに取り上げられるが、それもまた、担当者によるところが大きい。マニュアルのないところで即断即決、臨機応変を要求される場合、その担当者の仕事に対する日常の考え方、姿勢が出る。養護教諭の場合も、災害時の動きはその人の日常の動きに連動していたようである。そういう意味で、災害時の役割が特別にあるのではなく、質的には平常時の姿が反映されたものとなると思われる。



運動場の亀裂と損壊した校舎
(提供：市立西宮高等学校)

■特集 大震災と学校-被災地からのレポート-(4)

私の震災体験 学校管理職の立場からの報告

山口 晋

芦屋市立宮川小学校長

My Earthquake Disaster's Experience -Elementary School Principal's Report-

Susumu Yamaguchi

Miyagawa Elementary School In Asiya

はじめに

本校は、神戸市と西宮市に挟まれた「可愛い町」芦屋市の南東部に属し、小学校区としては市内で2番目に被害が大きかった。

7町のうち1町が5割以上家屋が倒壊し、他町も3割近く家屋が倒壊した。本校児童も3名犠牲になった。本市西部は、神戸同様激震地の一角を占める。

阪神・淡路大震災から既に9か月が過ぎようとしている。「宮川小避難所」は、1月17日に避難者約650人、食事等に対応の必要な地域の人達約1000人を合わせ、1600人余りのお世話をする形でスタートした。そして、4か月間の活動を経て、5月21日(日)にその役目を終えた。

学校としては、メイン校舎の柱に亀裂が走り、3階建て約30教室分のその校舎を取り壊した。

また、避難所に使用しているため空き教室が1教室となり、他校を借りて2月2日より3月17日まで1か月半学習をした。

その間に、運動場の3/4にプレハブ校舎が北海道の富良野の大工さんの手で建てられた。

一方、給食室が使えなかったため、4月末まで他校に調理師さんが行き、調理をしたものを運んでくるといった手間のかかることも続けた。

今回の大震災では、保健関係以外にもたくさ

んの事に対応し、その1つ1つからも学ぶことが多かった。ただここでは、できるだけ保健関係の事に焦点をしばりながら報告していきたい。

大震災直後の精神状態

…恐怖感より夢見心地

県指定研究会当日だったこともあり、既に地震2時間前から目が覚めていた。

サワサワサワの微震、そして横揺れ、この時は「逃げだそうか、じっとするのが安全か」迷った。その後の振じれ揺れ、もうこの時はマンションが潰れるような恐怖感に襲われた。「どうにでもなれ」…死を覚悟した。最後の下から突き上げるドン2発で地震は終わった。

私の住む、神戸市の一番東端、東灘区森南町は8割方家が倒れ、目の前の芦屋市清水町は9



割方町が破壊されていた。

地震後の行動はすべて夢見心地だった。「何か悪い夢を見ているのでは…」そんな気持ちで走っていた。妻の実家すぐ横の高速道路倒壊現場では、「猿の惑星」のラストシーンが重なった。想像できないことが起きていたからである。

その日の午前中のすべての見たもの・自分の行為が「夢の中の出来事」に思え、現実のものとして実感できていなかった。その一つには、地震の後1時間、まったくパトカー、消防車、救急車のサイレンが聞かれず、火事現場の横を通り抜ける際もみんなが呆然と見ているだけだったからかもしれない。

避難者にとっての保健室の機能 …改善が必要

6時40分学校着。警備員さんが家が傾いたにもかかわらず、6時20分に奥さんと一緒に来て、体育館を初め、すべてのドアを開けてくれていた。

玄関から職員室前の水槽が10数個すべて割れて、廊下に散乱している。校長室も中のものが動いて「開かずの間」になっている。

7時前で、体育館は8割がた避難者で埋まっていた。

校舎の破損状況を調べて、すぐ運動場に出た。顔見知りで、地域の役員をしている人達人数と面識のない地域の人数人が集まってくれた。

暫くして、怪我人が運ばれてきた。保健室を運動場側から開け、怪我人を運び込んだ。打撲者、骨折者が中心のため、ドア1つ分の広さは運び込みにくい。10人程でいっぱいになった。

運び込み役のみで、看護する人がいない。体育館に走ってもらい、看護資格のある人を探した。2人の人（私大付属の養護の先生と看護婦さん）が見つかった。

骨折した人のための添え木がない。代用に園芸用の名札をこわして使用した。避難所用として常備すべきものの1つである。

包帯も少ない。薬は、ヒビテン程度で役に立たない。生き埋めで引き摺り出された人の手や

顔を洗う水もない(水道の復旧には2か月かかった)。何もできないまま一人の少女か亡くなった。

益々、怪我人が増えてくる。車で芦屋市民病院搬送を考えた。車で避難してきていた人達は、初め怪我人を乗せるのを嫌がった。汚れるからである。しかし、状況は、生死にかかわる状態になってきていることがだれにもわかった。暫くすると進んで協力してくれるようになった。

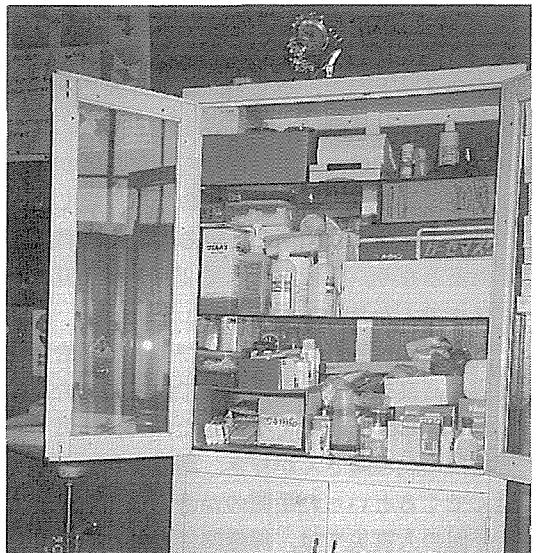
車は、ワゴン車に限定せざるを得なかった。全身打撲の人や足を骨折した人は普通車に乗れなかったからである。

担架がない、ほとんど怪我人は畳で運んできた。畳は、重く、しなるため、大変運びにくい。担架の設置場所も、学校以外に各町の自治会長さん宅などにも設置すべきだと感じた。

市役所の遺体の搬出は早かった …遺族の心を思う

14体と保健室で亡くなった幼女の1体を加え、15遺体を教室に安置した。暫くして、線香立てを所望され、慌ただしさを増す状況の中で、すべてを旨くやっつけていけるのか不安になった。

芦屋市役所の遺体安置所への移動は早かった。午前11時には1回目の車が到着した。他所では、数日間そのままになり、数教室が避難所で賑やかな雰囲気その隣の教室で、遺族が消沈して



すわっている光景も見られた。

ただ、その後の焼き場の問題でどの市も対応に苦慮し、遠く大阪以東、加古川以西に遺族がその場を探すことになった（ガスの復旧は遅く、2か月半かかった。共同溝の中を通すなり、ジョイントを工夫するなりして早期復旧するよう改善が必要である）。

初期のパニックにどう備えたか …保健室の頑張

1月17日は緊張の余り、ほとんどトラブルがなかった。できたばかりの寄せ集めの世話人会で、「全員が気がたっているからできるだけ丁寧に、もめたら校長が対応する」と申し合わせた。避難者でない地域の人々の身勝手さが暫く続いた。

震災の夜からの1週間は大変だった。熱を出す人、咳のひどい人、保健室の3つのベッドではもちろん足りず、床に毛布を敷いて寝てもらった。看病側は看護資格のある2人以上に2人の女性が、仮眠だけの状態で頑張り通した。

風邪で高熱の人が増え、1週間後に第2救護室（保健室）を設けた。

巡回医師に点滴をうって貰い、看護資格のある2人が点滴後にはずすという事を繰り返した。

私は家族と共に72日間、避難所で生活し、避難者兼責任者であった。朝は6時から本部テント前に立ち、8時からは学校、夕方から夜中まで避難所本部に詰めることを続けた。初めの2週間は、職員室の床に職員と仮眠状態で寝ていた。…そんな事も避難所内に伝わり、一層の協力関係が芽生えてきた。

食事の問題…衛生状態に気を配る

1月17日の夜は、それはそれは小さなおにぎり1個だった。人々は寒空の中、夕刻6時から3時間、長蛇の列を作って待っていた。

2日目から交通事情が一層悪くなり、市に届く物資もいつ届くか分からない状態になった。避難所関係の人達のルートで食べ物が入ることもあった。

ここで、注意したのが集団食中毒である。衛

生状態の悪い中で、病人だけは出すまいと世話人達とも確認しあった。

初めの頃は、被災地以外の地域の人達が公民館などに集まって作ったおにぎりが多く、「少しでも暖かなおにぎりを」との思いと裏腹に、水蒸気が籠り、御飯が黄変しているものがありました。これは、日がたつに連れて改善されていった。ある夜中など、避難所関係の人ルートの惣菜が、小型トラック一杯届いた。調べてみると正味期限の切れた物もあり、結局2/3を捨てるようなこともあった。

食事の総ては、配る前に抽出で匂いを嗅ぎ、下側の色を見た。場合によっては、試食して味の変化を調べた。

1月下旬のような厳冬期でもこの状態なので、天変地異が他の季節に起こったらどうなるのかと不安である。電気の確保（耐震、耐風の送電）水道の確保（耐震の給水）が特に必要と考える。

1週間がたち、避難者の出勤が始まった。朝食は8時過ぎにならないと市の車は来ない。食事をずらし、朝7時、昼12時、夜5時を食事時間として固定し、出勤に間に合わせるとともに、イライラの解消に努めた。

トイレ問題をどう解決したか…井戸水で

どの避難所も2日目からトイレ問題で大変困った。ある避難所は、運動場に穴を掘ってトイレにした。ある避難所は、女性は倒れた家の間に入って用を足した。ある避難所は、新聞紙を下に敷き、用を足した後新聞紙ごとビニル袋に入れるようにした…などなど大変苦労した。

宮川小避難所も2日目朝は便器の上にもまで汚物が盛り上がっていた。流そうにも溢れ出してしまふ。

私は躊躇なく隣の人に、手を入れたビニル袋をガムテープで止めてもらい、便器の汚物を手ですくって別の袋にいれ始めた。初め、皆は驚異の目で見ていたが、「校長だけさせては…」と思ったのか、次々とし始めた。10分たらずで総ての便器はきれいになった。

その時、プール用の井戸を使うことを考えて

泳ぐ日待ち遠しい

プールの水、震災時は生活用水



震災時、貴重な水源だったプール。きれいに掃除して、泳ぎに備える

宮川小学校

6年元気組

水の季節。芦屋市立宮川小学校では水泳授業の開始を前にした週末、六年生た

が多い。同小は幸い、配管の補修工事が間に合った。復興工事のほこりで、いつもより汚れがひどい。震災のあかをブラシでこし落としながら、一組の宇宿加奈さんは「あの時、プールが大活躍したなあ」。

母と中一の姉の三人で、家から洗濯物を抱えて通ったころを思い出した。

震災で水道がストップ、プールの水は大事な生活用水になった。校庭にある井戸が水源だったからだ。ポンプでくみ上げた水のプールサイドの注ぎ口に、

住民の列ができた。プラスチックタンクにためて持ち帰る人。加奈さんらのようにバケツや大きなたらいを持って、洗濯に来る人。寒い時期。井戸水とはいえ、冷たかった。「ゴム手袋もなかったから、つらかったよ」。同級生の男子が

通りがかった時には「なんだか恥ずかしくて」思わず背中を向けた。そばにいたおばあさんらの水運びを手伝ったこともある。「ありがとう」の言葉に、ちよっぴり気分が晴れた。同級生の金子宗太郎君も三百坪離れた自宅から水を

くみに来た。「おふろにためた水がなくなりかけて、どうしようかと思った。置かっただけで井戸があつてよかったなあ」

水は尽きなかった。井戸の底をのぞき込むと、六甲山系からの伏流水がこんこんとわいていた。

掃除を終えたプールに、青々とした水が満ちた。夏の日差しが水面で光る。まだちよっとビビとかが残っているけど、大体元にもどけたぞ」と宗太郎君。加奈さんも「地震のすぐ後は、夏のプール授業のことなんて考えもできなかった。だから、泳ぐ日がよけいに待ち遠しい」。水しぶきと歓声がはじけるのは、もうすぐだ。

役に立った井戸水のプール 読売新聞「宮川小学校・6年元気組」より

いた。電気だけは震災の夜から復旧していた。小プールに水を入れ、台車にペールかんを積んで水を運んでくる。トイレ前にもたくさんのペールかんを置き、バケツも用意した。

この水入れも3日ほど朝から夜中までしてい

るうちに、誰となくしてくれるようになり、工事に入ってきた業者に揚水ポンプを借りることができ、トイレ近くまでホースで水が運べるようになった。「匂いのしない、清潔なトイレ」と水道が復旧するまでの2か月間大変喜ばれた。

集団の心の問題…小さなファミリーづくり

避難所のほとんどが体育館であり、プライバシーを守ることから、ダンボール製の「ついたて」を各避難所に配ることになった。

毎晩開いていた代表者会で「希望枚数」を尋ねたところ、「0」であった。

震災後10日過ぎに中校舎が危険校舎になったため、当初避難所になっていた体育館の避難者に、本校の教室と向かいの幼稚園の保育室に移ってもらった。ここで、「小さなファミリー」が生まれた。

脳梗塞で倒れたことのある82才のお婆さんがトイレに行く時、トイレ前まで同じ部屋の青年が後ろから支えるようにして行くのである。

共同で生活する姿があちらこちらで見られるようになり、寂しい思い、辛い思いをしていた人達が、支えができ若返ったように潑刺とした明るい雰囲気が漂い出した。

避難所に「明るい雰囲気」が漂い出すと、全てがその方向を目指すようになった。2月7日から助けてもらった藤枝市・別府市の市役所の人達もこの渦の中に入り、3月15日からの学生ボランティアもよりその流れを強めてくれた。学生ボランティアが故郷のように思い、何度も来てくれた…「ただいま」といいながら。



避難所には高齢者、しかも一人暮らしの人が少なくなかった。その多くは、体調十分ではなかった。2週間目頃からボランティアの看護婦

さんが日中に常駐してもらえるようになり、安心した。しかし、上記のお婆さんだけは、助言により養老院に行ってもらうことにした。

児童・教師・避難者・避難所世話人のメンタルケアについて

子ども達の心の問題も大変心配した。2月2日から学校再開で出会い始めた子ども達は、震災と他校を借りての授業再開と言う事も重なって精神的緊張がみられた。全員大変明るくて、同時に「良い子」になってしまった。

一方、家が倒れたり、危険になったりして、他所に居を求めた子ども達・約300人（全校生550人）のことが心配だった。

担任が中心になり、最低2回電話で様子を確認した。芦屋に残った人のことを考えると恵まれ過ぎていると、御飯のおかわりを躊躇い、お風呂に入る回数も減らしたりするようなこともあると報告を受けた。

また、私を含め、初めから掛りきりになってくれている教師の何人か、また避難所世話人代表に精神的な高揚がみられ、疲れと共にイライラする状態、文章を書く時などに集中できない状態がみられた。私ともう一人の教師は休みが取れず、夏季休業日に入ってようやく高揚状態が治まったといった状態である。

近くの避難所で自殺者がでたこともあり、仮設住宅で歯抜けになった部屋の統合を繰り返した。できる限りファミリーごと移動してもらった。カラオケ大会・花見などの楽しみも加えた。

8月5日の避難所第一回同窓会では、来れない人へのアンテナも張りめぐらせている。

6月より、本校に大学助教授のスクールカウンセラーが赴任（週1日）。児童・教職員・保護者に対するカウンセラーと研修を始めている。

終わりに

神戸・阪神地域は、台風・大雨にはかなりの備えをしていた。しかし、地震対策は0に等しかった。お世話になった縁で、静岡県藤枝市に2度訪問する機会があった。その地震への備え

を見た時、もし神戸・阪神・淡路がこの状態であれば犠牲者の数は1/10ほどであったろうと悔やまれた。

一方、避難所としての「体育館」の機能は、「ただの大きな箱」に過ぎない。通風・暖房・電気容量・プライバシーの問題など様々残っている。赤ん坊は3日と居れなかった。

同様に、保健室は、まったく避難者用にはなっていない。避難者用の保健関係用品の備蓄も課題である。

また、電気1日、水道2か月、ガス2か月半に見られるごとく、電気以外の復旧は余りに遅い。特に水の問題は、生活全体に影響した。

この様なことを教訓に、「学校中心に井戸を」「備蓄をし、2日間は頑張れる避難所づくり」

の2点を提唱し続けている。



避難所・カラオケ大会

山盛りのごちそうを前に話もはずむボランティアと宮川小の児童たち

避難所は「人生の学び舎」

宮川小学校 6年元氣組

別れ会
は、今夢の實現!

大きな家族…お別れ会

野原たつぶりの雑感を作った時、避難住民の主婦に「ごんおおいし雑煮、初めてです」と頭を下げられた。精一杯の気持ちを吐き出してもうたあたりがたまたま、岡村さんの方が困住まいを正す思いだった。

お別れ会場に並んだサンドイツ、空揚げ、サラダ……岡村さんの最後の心尽くしの料理の側で、約五十人の笑顔がはじけた。つらい出来事と思いつつも、学び舎を去るという一歩に開く予定も。

書に見舞われた人々へ手を差し伸べなかった自分が恥ずかしくなった。

元店西田山敏江さん(左)は勤め先が神戸市であり、地域とは疎遠だった。「それが都合だてで思っていた。だが密と働き、輪になつて食事をして、走り回る子供の姿に心を和ませた今は違う。「大きな家族ができて、いい財産になりました」

近くの主婦岡村華子さんは毎朝五時半、長靴で炊き出しに通つた。

野原たつぶりの雑感を作った時、避難住民の主婦に「ごんおおいし雑煮、初めてです」と頭を下げられた。精一杯の気持ちを吐き出してもうたあたりがたまたま、岡村さんの方が困住まいを正す思いだった。

お別れ会場に並んだサンドイツ、空揚げ、サラダ……岡村さんの最後の心尽くしの料理の側で、約五十人の笑顔がはじけた。つらい出来事と思いつつも、学び舎を去るという一歩に開く予定も。

宮川小学校の避難所が、避難住民が広まったのも、避難住民が「ヒゲのおちゃん、煙草が千台余りのパンクを修理したから、避難所本部長に挨拶した五人の六年生の家族が三人の落着き先のテント前を駆け抜ける一人小田起弘君は、復興に力を注ぎたいと元会社員八尾雄三、を伸ばしていた世話役になる姿に惜しむ。との別れを惜しむ。

余園から五百人余りのボランティアが駆けつけた学校が平時の姿に近づく。四か月前、子供たちの交流があった。一輪車遊び

■特集 大震災と学校—被災地からのレポート—(5)

緊急避難所としての学校

—17日から26日まで—

— 北 三 夫

神戸市立湊中学校長

School as an Emergency Refuge from Jan. 17 to Jan. 26

Mitsuo Ichikita

Minato Junior High School, Kobe City

はじめに

1月17日、5:46 突然の兵庫南部大地震が、はじめの発表は震度6の激震、その後被害の状況から震度7に訂正された。とてつもない大きな地震であると同時に、神戸市民は関東が危険区域であり、神戸は絶対安全であると信じていたのです。いや市民ばかりではなく行政も安全神話の上に行われ、危機管理のマニュアルも持たない行政マンは完全に指令塔を失い、阪神淡路大震災に対する初動の遅さと共にすべてに後手、後手になり避難住民やボランティアに、又は、現場の責任者に要望されてからの対応となり欲求不満がますます増幅されたのではないのでしょうか。

一中学校の校長として1月17日からの10日間、避難所の運営責任者としての記録を報告し、そこから大災害に対するマニュアル作りの一助になれば幸いです。

記 録

● 1月17日

運動不足と体重調整のため1年程前から早朝ウォーキングを始めていたのです。その日もAM 5:30ごろ目が覚めて準備をしようかなと思ってた時でした。ゴオーと地下鉄の走って来るような音に続いてドーンと地面が縦に揺れ、そして

ユサユサと建物全体が揺れました。ガチャン、ガチャン、ガサガサ、とガラスの割れる音、ドサドサと本棚から本が落ちる音が部屋中に響き渡りました。

揺れが収まって懐中電灯を探し、ラジオをつけてから、食器棚から落ちたガラス食器を片付けるのに約1時間程かかり、全ての交通機関が止まってしまったことを確認、次男と共に車で職場に向かったのです。交通渋滞が激しくて2時間30分程かかって学校に到着しました。

9:30 避難者が保健室、会議室、理科室と運動場に車約50台、およそ150名、職員5名で対応していた。生徒の利用度の少ない教室から開放、多目的教室(70)、二階会議室(35)、進路指導室(20)、第2美術室(35)と誘導。

10:30 校区内を巡視、倒壊する家屋、塀、門そして壁が落ち、呆然と立っている人、瓦を除こうと努力している人達に中学生の安否をたずね、情報を集め、死傷者のいないことを確認帰校する。

15:30 増え続ける避難者に体育館天井落下のため普通教室開放を決断、一教室35名ずつ入っていただく。救援物資が届かないので、米と水の確保を決意、保護者の米屋さんから50kg、水は平野市場から井戸水を、使える道具をフル活動で確保、幸い電気が使用できるので炊き出しを始める。

同時に電気湯沸器4台を廊下に出し、お湯を提供する。(これが好評だった)

23:00 避難者500名を越える。西の空が真赤に染まり、私は50年前の3月17日神戸大空襲を思い出していると黒い雪がちらちらと舞う寒い寒い夜を迎えた第一日目でした。

●1月18日

昨日は緊張と余震が続き寒さも忘れていたが寒さ厳しく、灯油ストーブをだすが4台しかなく、倒壊を免れた避難者の家屋から持ち出し11台確保、各部屋に1台ずつ、灯油も近所のスタンドから入手する。米の補充も40kg。

今日から職員だけでは手が足りないので避難住民に役割を分担し協力を依頼。

①井戸水の確保 ②炊き出し ③トイレの水汲み……プールからトイレ前の大きなバケツに運ぶ ④電気湯沸しの水の補充 ⑤ゴミの整理と焚火の番 ⑥部屋割(部屋別名簿)とにぎりめしの配布

※第一日目、にぎりめしを配るとき、並んで渡すと大きな行列が出来、大混乱、数が揃い次第部屋別に配布、人数の確認と、避難者名簿が部屋別に整理出来、混乱を防ぐことが出来た。

●1月19日

待望の救援物資届く、午前2時ごろ、第一陣として600個のおにぎり、三木市から、第二陣として又、600個のおにぎり、これで電気炊飯器の蒸気が止まり、少し余裕が出来たので、学校再開の可能性を調査。学年総務、生徒指導で手分け、個人調査を実施、約80名(20%)の生徒が校区から避難、連絡方法などを探る。

冷めたおにぎりのため電子レンジを調理室前に設置、老人、病人のためにおじやを作る心の余裕も少し出来るようになった。

●1月20日

1月23日からの全員登校を決意、全校生徒に連絡、そこで今後のことの指示を出すことにする。

◎1月23日の登校に際しての確認事項

1. 生徒利用教室 3年…南校舎
1・2年…本館三階1～4組

2. 生徒の健康、家庭の状況調査、確認

- 調査表作成(被害状況など)
- 三年、個別懇談会の日程について
- 一、二年は自主学習の予定とプリント
- 26日以降の登校について など

おにぎりも残るようになり救援物資も毛布、灯油、果物など豊かになり日本の経済力を心強く感じた。

●1月21日

上水道が出る。ライフラインも残るのはガスだけとなり避難住民も100名ほど退去。

平野自治会、湊中学校、平野小学校のPTAのメンバーが炊き出しの相談に来校、長期間夜食に温かい汁物を出すことに決定。平野商店街で街頭募金、平野市場から物資の援助など、地域の方々と相談。炊事場としてテント2張り設置、プロパンガスとコンロも有志が準備、初日はカス汁と決定する。

○避難者が400名となったので教室移動を依頼、本館三階6教室、保健室、会議室の確保に努力する。

●1月22日

(学)学校活動再開のために 会議室、保健室の確保

- 会議室 避難者の自治活動やいろいろな会議を行う
- 保健室 医療救援隊の活動や学校の保健室としての機能確保

※学校と避難所との共存

学校教育活動と避難住民との共存を図るための必要な条件をチェックする

1. 学校教育活動

- 教室の確保 南校舎4教室
本館三階6教室
- 運動場 南側1/3を確保
集会や遊び場
- 特別教室 保健室 図書室その他

2. 避難所

- 避難住民の居室の整理(荷物置き場を準備)
- 炊き出し場所の整理
- テントを2張り、長机10台

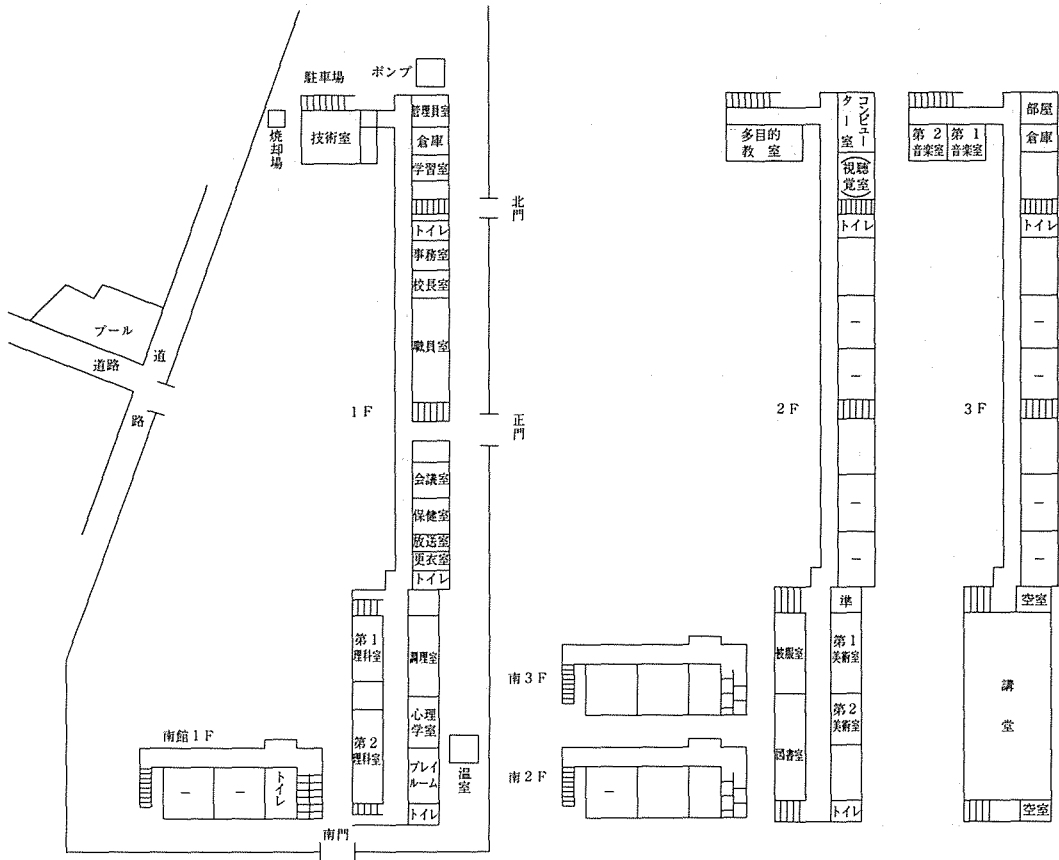


図1 神戸市立湊中学校教室配置図 (平成4年4月当時)

3. 共用する場所

トイレ5カ所

保健室 会議室

生徒が活動する場所と避難住民の行動半径が重ならないように工夫する。

※保健室 会議室の移動完了

(避)支援活動

宗教団体や市県外からの諸団体が炊き出しの救援活動申し出があり、昼食のための炊き出しを歓迎。又、ボランティアの申し出も何ができるかを尋ね、看護婦、ソーシャルワーカー、カウンセラーなど、特技を持っておられる方は大歓迎する。力仕事の方は中学生が参加協力する態勢になっているので近隣の小学校を紹介する。

23日からの学校再開の話が伝わり避難住民から出なければならぬのかと、不安の声が耳に入る。「行くところができるまでいて下さい。しかし学校長としては一日も早く行くところを見付けて欲しい」と本心で対話をする。

● 1月23日

(学)10:00 生徒登校 387/426 (91%出席)

3年 24日25日進路相談 26日から自主登校で3時間授業

1, 2年 1日おきに自主登校, 午前3時間授業

※生徒は本館三階(1, 2年), 南館(3年)だけとする。特別教室は利用しない。

(避)避難住民

退所者多く350名となる

- 車椅子老人 適寿病院 入院
- 痴呆性老人 八十島病院 入院

巡回医師団が活動，平野小学校に24時間待機。老人，障害者の看護がこれからの課題となる。

● 1月24日

(学) 3年進路相談 図書室

1年本館三階で自主学习

※学習室を開放 ボランティア活動に参加した生徒達の控室兼学習室，避難所にいる中高生の学習室として

(避) 避難住民の組織化 自立への第一歩

各室より代表1名で室長会議……26日より避難所生活の規律・秩序を守る。

救援物資の配布と施設，設備の整備

※救援物資もますます豊かになる，バナナ，レタス等も届き，にぎりめしも残るようになる。

● 1月25日

(学) 3年 進路相談 図書室

2年 本館三階で自主授業

※学習室，3年女子学習室で自主学习，ボランティア活動の待機時間を有効活用

(避) 心臓病の老人 三菱病院に入院

2歳の幼女夜間に恐怖のため大声で泣く。小児用，老人用おしめ届く。

● 1月26日

(学) 3年 南校舎を使って自主学习 50分×3時間

1年 本館三階で自主学习

※出席状況良好

(避) 室長会議初日

☆目的

- 連絡がいきわたる (情報の伝達)
- 出来ることに参加する (自立する出発点)
- 要望をまとめる (必要な用件を知り解決する努力を試みる)
- 約束を守る (避難所の秩序を保つ)
- 避難者数の確認 (状況把握)

☆約束の内容

1) トイレ，廊下などの掃除当番を確認

2) 炊き出しへの協力

3) 全体に必要な物資 (トイレットペーパー，灯油など) は要望するが，個人的要求は自分で解決する

上記のように具体的に話し合うことが出来る。

※乳幼児高熱のため真生乳児院に入院
痴呆性老人ディホーム夢野に入所

学校としての立場

《避難所運営》

① 緊急避難所として最低限必要なもの

1) 飲料水，緊急食料品の備蓄

2) 通信機器，発電機，冷暖房などの施設，設備

3) 会議室，多目的ホールなど余裕のある教室空間

② 学校教育活動の復活に努力

1) 必要教室の確保

2) 特別教室の整備

3) 運動場の確保

4) 生徒の登校路・安全確認

5) 学習活動が出来る

特別教室が利用出来る

部活動が出来る (正常化?)

③ 職員の勤務態勢

可能な限り支援活動に参加する

(初動・緊急避難)

↓

グループ (組織化) で交代で支援活動に参加する (避難所)

↓

職員全体で，計画的に支援活動を行う。
(避難所生活の長期化)

④ 近隣との関係

1) 地域との交流を日常的に行う

2) 開かれた学校としての運営を行う

3) 地域からの信頼関係を維持しておく

《授業再開に向けて》

① 1月20日 学校教育活動の準備をする

- 学校再開にむけての確認事項（前出）
- 1月23日～25日まで
- ② 2月1日 授業再開にむけての検討
 - 授業再開に向けて（案）
 - 1) 基本的姿勢
 - 2月6日（月）より学校教育活動を再開するに当たり、次の二点に留意し、変則的対応ではあるが授業を再開していく
 - 避難住民の生活を守る（長期化）
 - 学校機能を維持すると共に生徒の安全を確保する
 - 2) 学校再開について
 - 授業に利用する教室
 - 3年 南校舎
 - 1, 2年 本館2～3階の8教室（1月30日に避難住民の協力で確保）
 - 授業について（当面の見込）
 - 40分授業×4時間（教科、内容は学年で対応）、交通機関の状況を配慮する。授業割り当て、避難住民担当職員については学年で配慮する。
 - 3年職員は授業と進路指導に当たる。
 - 3) 職員の勤務について
 - 大震災当時、多数の職員が学校に駆け付け、緊急避難に対応してくれたことに感謝。
 - 2週間が経過、ある程度落ち着きを取り戻したことを確認。
 - 防災指令3号発令中である現在、一部職員の負担にならぬよう、組織的な学校運営及び避難所運営をしていく。
 - ア. 宿泊勤務は原則として全員で輪番制を実施していく。
 - イ. 常識的に考え、災害による職免は2週間以内と考える。
 - ウ. 当面は勤務時間について、宿泊職員のことも考え弾力的に運営する。但し、連絡は密にすること。
 - 4) 避難住民への対応
 - 長期化に向けて、学校の再開について説明して理解を求める。
- ア. 開放教室 できるだけ北校舎と本館北側にまとめる。（避難住民エリア）
 - 北校舎 3階 第1, 2音楽室
 - 2階 多目的教室
 - 1階 技術室（物資保管）
- イ. 炊き出し用テントの移動（北校舎南側に並べる）
 - 手洗場、水道は北側を利用。洗濯機も2台移動し、北側に干す。
 - 電子レンジを本館2階に設置する。
- ウ. 運動場を駐車場として利用する場合、利用許可証を発行する。
 - 夜間の校門は南門だけとする。
 - 2月6日～3月5日まで学年で対応する午前4時間の変則授業を実施。
- ③ 3月6日より午後の授業再開
 - 3月3日ごろよりガス復旧が始まり、小学校も給食の準備を始めたとのこと、各家庭で弁当の準備が出来ると判断、3月6日（月）より午後の授業を再開することにする。45分×6時間、時間割りも正常に戻す。（卒業式は天井の破れた体育館で実施、避難住民から卒業生全員に花束を頂く）
- ④ 4月8日より新学期
 - 正規の教育課程で新学期を迎える
 - 前年度の欠時授業は今年度の授業で、内容の精選と集中力、授業時数の確保（授業をカットしない）で補う。
 - 4月10日始業式・11日入学式を実施。

避難住民

《避難住民の行動》

- 避難後1週間 無我夢中 大変協力的、運命共同体の感じ
- 避難後1ヶ月 欲求不満が蓄積
飲酒と喧嘩
放火といたずらが発生
- 避難後3ヶ月 自立を目指して努力
仮設住宅のより好みをしない人、近隣に住居を求める人、遠方に仕事を住居を求める人などが退

所、避難所の環境整備に積極的に参加、努力する

避難後6ヶ月 行政に対して不満が大きくなって来る、被害者意識が増幅される。

大震災で駆け込んできた避難住民も、初めの一週間は余震もあり緊張した空気の中で、無我夢中で過ごしました。お互いに協力を惜しまず、許しあう日々でしたが、余震も少なくなり、救援物資も豊かになって来ると少しずつ精神的に変化が認められました。

避難住民といっても、人様々です。完全に倒壊した人、全焼した人、余震が怖いので駆け込んで来た人、行く宛のある人、親戚が迎えにきても残る人、自力で住む家を探せる人、人生模様そのものです。私はいろいろな人達と話あうこと、聞き役になることしかできなかったが、笑顔でいつも対応していました。

一ヶ月も経つと個人的に我がままも出て、物資を求めることもあったが、学校や支援活動には感謝の気持ちを心から表していた。三ヶ月にもなれば被害者意識が強くなり行政の対応に不満をぶつけるようになってきたそれでも学校や支援活動に対しては感謝の言葉を忘れていない。六ヶ月も経過すれば人数も少なくなり、取り残された焦りから、避難所運営に対しても非難の声を出し、“生徒が変な目でみる”“世間は冷たい、学校から追い出そうとしている”など周辺にバリエーを築き、自分達の立場を守る姿勢となってきた。

これらからも、緊急避難への対応は、そのことのみで専念して一週間が限度で、行政は一週間ぐらいで災害に対応できるマニュアルを準備して置くことを望みます。また避難所の生活も

学校教育活動と共存するには、一ヶ月から三ヶ月が限度です。この度の六ヶ月は、災害時の寒さが食中毒を防いでくれたが、6月7月の暑さにはいろいろな苦勞と努力を要したものです。

終わりに

- 生徒達の被害調査で、全・半壊の家庭が40%
 - 1月17日、停電しなかったこと、1月21日に上水道が普及したこと。
 - 避難して来た人が700名、学校を避難所として利用した人が550名と少なかったこと。
 - 全校生徒・保護者・教職員に身体的被害のなかったこと。
 - 一部損壊で校舎が何とか使用できたこと。
- など数えればキリがないほど、幸運に恵まれた湊中学校でもこの有り様です。校区の80%以上の家が焼失した学校、避難住民が2,000名を越えた学校、また校舎が全壊、テントを張って運動場で授業をした学校もありました。このような状況で我々教職員は精一杯の努力と、誠意を持って対応しました。そしてその時、学校でできる最良の方法を考え実行してきました。地域からの大きな支援と協力を得て何とかこの苦境を乗り越えました。

お陰で退所される人々から一言校長にお礼をと土・日に荷物を運んでも、月曜日の朝挨拶をされてから退所されました。

8月1日、避難住民は16名(7世帯)残っておられます。がこれからは学校教育活動の正常化へ全力投球です。

ケース・バイ・ケースです。それぞれ異なった実態であり、状況下にあったことをご理解されたうえで、一中学校の体験をお読みいただければ幸いです。

■特集 大震災と学校 -被災地からのレポート-(6)

驚愕と機能不能のライフラインの中で

坂 東 鐵 二

西宮市立浜脇中学校 学校長

Living in Shock with Disrupted Utilities

Tetsuji Bando

Hamawaki Junior High School, Nishinomiya City

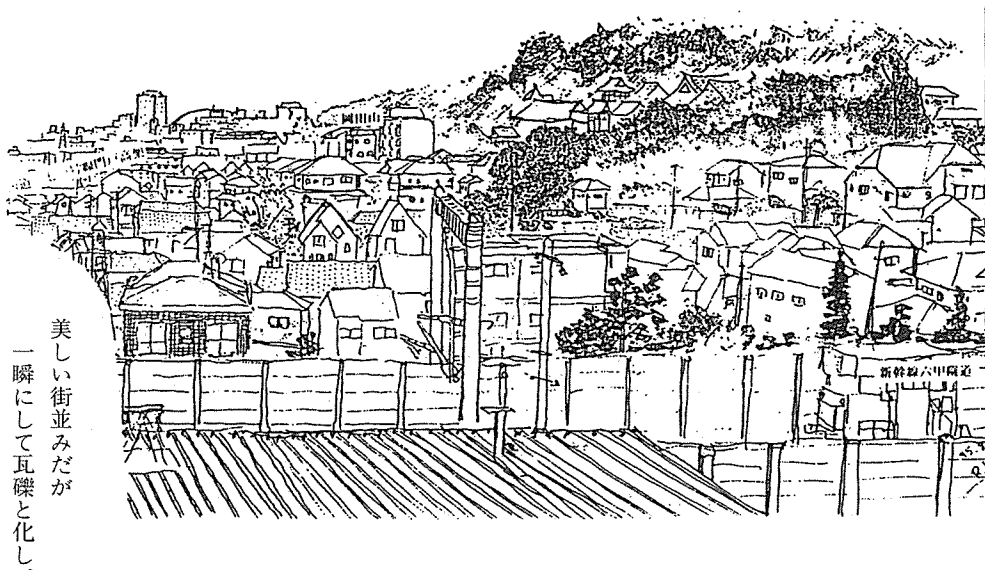
はじめに

「地震・雷・火事・親父」という言葉がある。いつの時代から言われた言葉か判らないが広辞苑で調べると「普段人々が恐れているものをその順に並べて言った慣用語である」と解説されている。実に簡単に書かれてあるが、「そんな簡単なものではないですよ」と大きな声を出して言いたい気持ちである。

6月上旬、昔、大変世話になった、和歌山県立医科大学教授の武田真太郎先生から突然電話があり、被災地の学校に勤務する者としてのレ

ポートを執筆するよう依頼を受けた。当初は、突然でもあり、戸惑いもあったが、日頃のご無沙汰もあり受ける返事をしたものの、レポートとしてまとめるとなると、当時のことを思い出せない事もあったり、また、語りたくない悲しい出来事が眼前に戻ってきたり、なかなか筆が進まなかったのが現状である。その所をお許し願いながら、被災者の一人として、避難者の世話をする一人として、また、遺体安置所管理者として、さらに、学校管理者としての立場等で体験した事柄を思い出すが儘に綴って見ることにした。

美しい街並みだが
一瞬にして瓦礫と化し、
今は更地となった



ドーン、その瞬間から、災害対策、安全対策、緊急対策、救済対策など今までの国の色々な体制の見直しや国と地方自治体の関連や連携、又、その在り方について、国民が挙って真摯な姿勢で見直しが始まったと言っても過言ではなからう。

それとは逆に、今回の災害において、特に際立った動きを見せたのは、若者の物の考え方や行動であった。「このなときゃーみんなですけあわなきゃー」と言って進んでボランティア活動に積極的に参加し原動力となった。災害の現地で昼夜問わず、全国から集まった者同士が仲良く、そして、規律正しく整然として、仕事を分担しての大活躍は見事であり、被災者や被災地の人々に元気と希望・活力を与えてくれたことは、安心と頼もしさを感じさせてくれた。

1・17・5・46 その瞬間

私は、中年の体力づくりと称して、以前から早朝5時30分出発の散歩を毎朝の習慣としていた。自宅と散歩コースの位置関係は自宅から東側の新県道を南へ約7分半折り返しは(国道171号線門戸陸橋付近)自宅の西側の有馬街道を北へ約8分半で自宅の真裏に達するコース。さらに、北へ進み有馬街道と新県道との交点(新幹線六甲隧道入口付近)で折り返し新県道を南へ自宅に帰るコースが、日課である。

つまり、今回の大地震を散歩中に遭遇したということである。

前述の通り前半を折り返し、新県道(六米道路)の中央を歩行、丁度自宅の裏にさしかかったとき、左側(西側)に位置する岡田山の方向が夕焼けのように真っ赤に光ったと同時に地面下で「ゴウオー」という何とも言えない、今まで聴いた事のない音が近づき、足元で激しくぶつかり、私の体が宙に舞った、確かに道路の左側(西側)側溝が真下に見え失神。何秒後か分からないが気が付いたとき、道路上で四つん這いの格好であり、右足の脛を何かで強打し出血していたが無我夢中で自宅へ戻った。

又、家の中での状態は(5時すぎ起床しベッ

ドの上でテレビを見ていた状態…長女談)、はじめに西から東への少しの揺れを感じた直後大きな揺れと同時に「ドーン」と下から突き上げられ、テレビが宙に浮き叩きつけられた。その一瞬の出来事に戸惑うだけの対応であったと当時の恐怖を話している。

後の報道で家具が倒れて、その下敷きになったという報道が多くあったが、家具が宙に浮き上がり、その後、横揺れに合わせて、家具の重量でそのまま叩きつけられた為、被害・被災が更に大きくなったのではないかと思っている。勿論、置物、家具などで全ての物が宙に舞い当り構わず散乱し壊れ、家の中は、足の踏み場もなく、手の着けようのない状態になった。

為すが儘の対応

停電のため、車のエンジンを始動させてライトで家を照らし乍ら、取り敢えず倒れた家具だけをその場に起こし、散歩をしている服装の儘学校に駆け付けた。外見では学校の建物には大きな被害がないことが伺えた。しかし…

2~3か月経った後に、緊急対策や危機管理が適切であったか等ということが議論されることになるが、正直、当時は為すが儘の対応しかできなかったのが現状であったように思う。

西宮市には、風水害時の対応として水防指令という災害時の体制が整備されている。しかし今回の地震災害で、特に、電気、ガス、水道、電話などライフラインがことごとく寸断され、さらに、全ての交通機関・道路が遮断された中では殆ど機能しないし、助けを求めることも出来ない現状であった。

このような中での対応には、自ずから限界があるものだ。

たとえば、午前中、市からの指示で行なった避難者数の調査では数名の避難者であったが、昼食を搬入したときは何処から避難してきたのか分からない儘、すでに300名を越える人数に膨れ上がり、その分の昼食の追加対応が出来なかったこと、また、亡くなられた方々の遺体の搬入を何処の体育館という指令ではなく、ただ「体

育館」というだけの指令で運び込まれてきたことなど市や学校の指令も為すが儘、また、公共施設などもパニック状態になった。

生きていてくれ

午前7時過ぎに登校、ガスの元栓閉鎖作業、理科室薬品庫確認作業、そして、事務室・職員室・校長室・用務員室など、どの部屋を見ても物が落ち、壊れ、机、戸棚、置物全てが部屋一杯に散乱状態で手の着けようがなく、出勤していた数名の職員は、百キロを越える重量のある金庫が物を飛び越えているなど予想を遙かに越えた現状に、只、茫然としているだけであった。しかし、時間が経つにつれて、被災を被った筈の多くの先生方や職員が、次から次へと駆けつけてくれた。この時ほど、仲間意識と感謝の気持ちと力強さを感じたことは、今までになかった。

そして、こんな話をした。——今、大変な事態が発生し、西宮は緊急事態にある。それは、家屋の全半壊・死者がでているかも知れない・ガス・水道・電話・道路は通行不能状態にあるという情報である。この急場に対応するために、今後、為すが儘の指示を出すので皆さん方は、安全には十分に気をつけて行動してほしい。——

そして、第一声は、「今日は学校を臨時休業とする。」であった。

----- 今でこそ笑い話にもならないが -----

当日は、一大決断であった。それは、西宮市では、気象庁から暴風、大雨、洪水警報が発令しているときは自動的に臨時休業となる措置を取っているがそれ以外はなかったからである。

緊急対応組織を次のようにする。

- (a) 外部連絡とマスコミ対策…教頭
- (b) 教職員の安否確認作業…教頭、教務
- (c) 生徒の安否確認作業及び通学路等危険箇所把握作業…学年担任及び各学級担任、学籍担当者
- (d) 校内被害状況把握作業…副担任

(e) 避難所・救護・救援作業…生徒指導部・養護教諭

出勤している教職員で以上の組織と自分の任務分担を確認し、8時ごろから(c)の先生方が校区地図と生徒名簿を持って、いよいよ校区へ散って行ったが、内心“皆んな無事で元気でいてくれよ”と祈るような気持ちで送り出した。一方校内では避難者の場所のこと、食事のこと、便所のこと、飲み水はどうするのか、等等、また、教職員の食事は？考えて整理し対応するなどという状態では決して無かった。時が、一時間位経過したとき、二つの大きな出来事があった。

その一つは、「西校舎がおかしいですよ」という報告であった。(二階建一部三階建校舎7教室)「どうしたんや」「二階部分から下へ約11センチ位西に傾いているような気がする」という事だった。「役所へ電話せにや」「えらいこっちゃー授業できんがな…」

----- その内元に戻るだろう -----

その後、市の施設課の調査を文部省の調査で傾斜が確認され使用禁止となった。しかし、傾斜して隙間が出来た所に毎日煙草の箱を入れて測定していた警備員さんが、この頃、煙草の箱が隙間に入らなくなったようですよ、という報告を受けた。ええ…元に戻ったんかもしれんなー

----- 現在使用している -----

二つ目は、〇〇町のA生徒の家が倒壊しているが、A生徒の姿がない。「なにー」…一番心配していた事が現実になったのか…「もう一度人数を増やして現地にいってくれ」「死ぬなよ無事でいてくれよ」と祈る気持ちで再度送り出したが…バレー部の人気者で元気な生徒だったのに…その後、二度同じ事があった。

----- 冥福を祈り、何が何でも卒業証書は授与する -----

・来年はレギュラーを目指していた元気な子・お淑やかで、芯の強い子・物静かで中々の紳士だった子 安らかに…
この瞬間、何が何でも二人の三年生の子達には卒業証書を授与すると決意。

----- 先日、初盆の供養にいってきた -----

地震発生から僅か数時間の間に、この大きな二つの出来事でこの大きさと恐さに胸を締め付けられた。以後、低空で飛ぶヘリコプターのドドドーというエンジン音に怯えたり、余震で震えあがったり驚愕の日々が続いた。

地域の被害状況

当初は、避難者の対応、遺体安置所の対応、給水の手伝いなどきりきり舞いであった。テレビの報道は激震地で被害の甚大であった所は詳しく放映していた。しかし、学校を預かるものとしては我が学校の校区内はどうなっているんだという事が一番知りたいし、それがなかなか掴めなかったので苛々する日が続いた。

PTAの愛護委員長の方から、以前から計画をしていた部会を開催したものかどうかという相談を受けた。愛護委員は校区内の各町から選出されている事を思い出し、渡りに舟とばかりに、状況の把握と一石二鳥と思い即座に開催しようと返事をした。

会は、状況を把握しようということから、各町毎に現状の報告から会を始めた。驚くことばかりが次から次へと話され、聴くも涙、語るも涙の話が続いた。学校の再開の目途が建たない状況の中だっただけに、さらに、再開できないのではないかという不安が高まった。

5人、10人、20人…と話が進むにつれて、皆んなが、「何でこんなに違うのや」という声でた。はじめに出たのは、揺れ方が全然違う事であった。ある人は、あれっと思った瞬間いきなり右に左に物凄く揺れて一横揺れ一もう駄目だと思いきや本当に恐かった(家屋半壊の方)と言い、また、ある人は、ガタガタと上下に揺れ次の瞬間ゴォーン、ゴォーンと一縦て揺れ一下に叩きつけられるようだった。と恐る恐る話してくれた(家屋は建っているが全壊の方)。更に、家屋の倒壊状況も全く違っていった。右に左に波が薺が如く大きな揺れが繰り返され、そのうちに捻れるようにして倒壊した家。また、ゴォーンという音と同時に瞬時に倒壊してしまった家屋。

しかし、同じ校区の中にもタンスの上に置いていた人形がケースごと落ちた、という程度の方もいた。

家の構造と場所によってこれほどまで被害状況が違っているとは思ってもよらなかった。これも後によく言われた活断層の仕業かと誰を憎むことも出来ず……

町によっては、壊滅状態の所もあった。が、既に、親戚・知人を尋ね一時避難をしている方は、その数、生徒数で約40パーセントを越えていた。

2時間余りの情報交換後は、今日のこの会合を開催して良かった、何となく元気が出てきた。街の状況がよくわかった。皆が力を合わせて頑張ろう、生徒らも元気をださなきゃ、などの声を後にしながら散会した。

被害は広範のようであるが、今後の対応は、一軒一軒、また、一人一人の状況に応じた対応が不可欠であると思った。励ましたり、見舞う事も相手の事情をよく知った上でしなければと心に堅く決めた。

概ねという言葉

条令・規則などという言葉は、役所では絶対的な言葉であり、例外をつくることは、秩序を乱し、混乱を招き、その中で、損をするもの、また、得をするものが出てくる。その結果、パニック状態に陥るであろう。〇〇町の被害は概ね…である。この言葉は絶対に通用しない言葉になるだろうと思った。被災者、被災地を物心両面共大切にしなければと誓った。

学校再開への道

「校長先生、住むところ一時変わるけど“必ず返ってくるからな”追い出さんといてな。」

住み慣れた我が家を追われ、なりふり構わず生きることを最優先した生活をしなければならなくなった人々への励ましの声とは一体どんな言葉が良いのか戸惑った。うっかりと声を掛ければ、実は主人が…子供が…或いは祖父が…祖

母がという返事が返ってくる。

----- 義務教育で-----

規則では居住地に変更が生じた時点で転校である。…先生見捨てんといてな一わかった…どんな事してでも返って来いよ…待っているからな一

本校で就学したいという希望を持ってくれて有難う。何処に行こうが、わが校の生徒だ。学校長として校区外通学を全て認めると判断をした。三年生の亡くなった生徒の卒業証書も、来年度の学級編成も全て現状（1月16日現在生徒数）で行なうと進退賭けて言い切った。

----- 一大決心であった-----

(1) 学校再開への緊急課題

結果的には、第一段階として全市の状況が可成正確に把握するまでということ的前提に…

- (a) 第一次判断として、17～18日は臨時休業となる。
- (b) 第二次判断として、19～21日まで臨時休業となる。

この時期に、仮転出とか一時転出ということで、友人・知人・親戚などを頼って全国各地へ転校した者、また、2時間以上掛けなければ登校できない者など4割以上の生徒が大変なハンディを背負ってしまう事になった。そして、今まで余り縁の無かった地で仮転入したという知らせや、学校の友人たちや先生方も親切にしてくれるという便りを聞かされホッとした時期であった。義務教育は市町村が設置者であり、市町村によっては仮転入はだめ、本転入の手続きをしなさい、と言われ涙ぐんでいる生徒もあれば…仮転入で結構です、と言ってくれる市町村と色々であった。

西宮においては、42校小学校、19校中学校各それぞれの学校においても、その被害の状況が違い、生徒や保護者の間から“学校は何時まで休みにするつもりか”という声が高まった時期でもあった。

しかし、被害の実態が刻々と明らかになるに従い全市的立場に立った判断をしなければなら

なかった教育委員会としては誠に苦しい立場に立たされた時期であったと思う。

----- 諸費用は？-----

転入生徒の諸費用は当初余り必要としなかったが、月が2月になってからは生徒の転出先の殆どの市町村から本転出の手続きをするよう生徒や保護者に指示してきた。

当初から予想されていたことであるが、仮転入している生徒に掛かる諸費用を就学奨励金で賄わなければならなくなった為に不可欠の手続きである……

----- 何の為の仮転入かと思ったが…背に腹は変えられず-----

この間、被害の実態調査が続く中で予想を遙かに越えた事として、倒壊した家屋から救出されたが、既に死亡していたという悲慘が次から次にと続いた。

当初予定されていた遺体安置所が、不足し急遽、学校の会議室・武道館・体育館をも利用しなければならなくなったこと、市斎場が都市ガスの復旧が遅れて使用不可能の状態であること、納棺に必要である医師による死亡診断書発行、検視証明書、埋葬許可書発行手続きの遅滞、あわせて、僧侶不在及び棺が間に合わなかったこと等の状況から、また、救援物資置場、給水場設置、校舎の安全性再点検などから学校の再開を、さらに、遅らせざるを得ない事となった。

半数以上の学校がこれらの事に関係してるという結果から、市独自の判断で1月28日まで休校という特別処置が講じられた。

一方、学校では、近隣校や関係機関との連絡調整及び校区内の情報収拾と避難者への対応、そして、学校再開に向けて、普通教室・特別教室の片付け、電話・家庭訪問による生徒の安否の確認、欠落分の教材作成作業等が休む間もなく連日のように続けられた。

教職員の中には、半日もかけて出勤し、午後から翌日の午前中勤務し帰宅するという先生、船で8時間もかけて通勤する先生など教職員の方々の通勤は困難を極めていた。

30日の学校再開日までは、毎日10名～15名の先生方が泊込み、300名を越える避難者の人達に、

材料が無い中でそれなりに工夫を凝らし少しでも暖かいものをと食事づくりに精を出す者、お年寄りの話し相手をするもの、また、トイレ掃除に一生懸命の者、などなど日増しに避難者との仲が家族的へと変貌していった。

終学活……

皆さん今晚は、今日一日元気に暮らしましたか…

毎日午後9時から約30分、避難者の方々と学校関係者との集会を実施した。まず、先生方の紹介に始まり、今日の楽しかった事を話し、兎角頑張ろう…など元気づけを中心の話しをした。避難者からもあれはこうしてくれ、とか、これは有り難かった、などの話があった。これも学校再開への取り組みであると考えていた。登校してくる生徒たちと仲良く共生するためである。学校関係者が何を考えているかが避難者にとって大変な興味であり、内容によっては、恐さも感じた、後で言っていた。また、学校も避難者は、学校再開に対してどんな感情を持っているかを知りたかった。

---お休みなさい…消灯 避難所閉鎖まで続いた---

雨中であったが、58の遺体が市の関係者や避難者、学校関係者の見送りを受け、出棺が無事に終わった。いよいよ来週からは元気な生徒たちが学校に戻ってくるといことで先生方もいっぴくに無く元気な様子であった。

「制服が無くなった人は私服でも良い。何を着てきても良い。兎に角学校に来てほしい。」先生方の強い強い願いである。

(2) 学校再開

その日の朝、「あっ…あの子が元気にきたぞー」…「あの子も来た。」次から次へと登校してくる生徒の姿を見て、先生方の涙が止まらなかった事を覚えている。

各教室に入った生徒たちは、何もなかったかのように、何時もの笑いや楽しげな話し声が聞こえてきた。中には、今朝5時に家を出たという奈良県から登校した生徒もいた。本当によく来てくれたと褒めてやりたいと言っていた先生

がいた。

全校集会から学校を再開した。はじめに、亡くなった3名の人達に対して、全員で黙禱を捧げ、冥福を祈り、あなた達の死を無駄にしないと誓った。

そして、「本校には、300名を越える人達が今、体育館で避難生活をしている。今後の学校生活はこの方々を第一義として、学校運営をしたい。」このことは、何を意味するかを自分で考え、行動をしてほしい。つまり、この難局に自分は人として、強く生きること・正しく生きることとは何か、を実践してほしい。という事を話して、復旧・復興への出発とした。

以後の学校生活の復旧・復興への目安として次の様な調査を自宅生活者・避難所生活者・知人、友人宅生活者・親戚宅生活者別に繰り返し実施し実態の把握に努めた。

(a) 家族や家屋の状態の実態調査

- ア (1)亡くなった方がいるか。
(2)ケガのした人が、入院している
通院している
(3)皆んな元気である。
- イ (1)完全全壊で住めない状態である。
(2)全壊であるが住める状態である。
(3)半壊で住んでいるが補修が必要。
(4)半壊で住んでいて補修の必要ない。
(5)部分壊で住んでいるが補修必要。
(6)部分壊住んでいるが補修必要ない。

(b) 生活の実態調査

- ア (1)水道が出るか。
(2)ガスは出るか。
(3)電気は来ているか。
(4)電話が通じているか。
- イ (1)日々の買い出しは何処でしているか。
・何時もの所でできる。
・往復で何時間かかるか。…
- (2)風呂はどうしているか。
(3)洗濯はどうしているか。
- ウ (1)学用品は揃っているか。
・不足の物は何か。

(2)衣服類は揃っているか。

- ・不足の物は何か。

エ (1)通学は徒歩か。

(2)通学に電車・バスを利用している。

(3)送り迎えをしてもらっている。

(4)通学に必要な時間は

- ・40分以内 徒歩、電バ、車、
- ・1時間以内 徒歩、電バ、車、
- ・2時間以内 徒歩、電バ、車、
- ・3時間以上 徒歩、電バ、車、

以上の事柄について、調査は、2日に1回行い続けた。大変な作業量であったが、生活のこと、家族のこと、生徒のこと、地域のこと、家屋の補修のことなど日々変貌していく様が克明に掌握することができた。また、市行政に対する願い、学校への願いなども同時に把握することができた。

調査から得た生活実態の資料を参考にし、午前中4時間の授業から簡易給食を挟み5時間授業へ、さらに、クラブ活動の実施へと徐々に活動の範囲を通常の学校活動へと移行措置を講じていった。生徒達は、元気にその移行に対応をし、学校に活気を取り戻すのには心配する程時間が掛からなかった。

勿論、避難者と生活を共にしながらの事である。

時期が学年末と重なったことで新たな心配事もあった。それは、生徒たちの学籍関係の対応である。仮転出生徒、或いは、一時転出生徒の住民票の扱いのこと、次年度在籍を希望する学校のこと、さらに、現住所が校区外になっている生徒のこと、など、1月16日現在と3月時点では、その生徒人数に大きな隔たりが生じていた。

全ての生徒はわが校の生徒である、と言い切る人。また、仮であれ、一時であれ、転出した生徒は転出先校の生徒であると言い切る人。この人数の扱い次第で、学級数や教員定数に直接関係するだけに苦悩する日々が幾日も続いた。

後に、全ての生徒数は、仮、一時転出に関わること無く、双方で生徒数とカウントしてよい、

という措置が講じられた。同時に教員定数もこれに準ずる。これぞ被災した人達への人間的温かみのある措置と大歓迎であった。一件落着胸を撫で下ろした出来事であった。

形の上では、徐々に回復し賑やかな学校生活が戻って来た。しかし、10日間の授業の欠落、クラブ活動、委員会活動などの学校活動が停止したハンディーは生徒の心に大きな空洞をつくった。さらに、心理的動揺、物質的の喪失など計り知れないものがある。これらは、今後の学校経営の緊急且つ重要課題となった。

救援物資は誰の物

ライフラインも次第に復旧し物資の流通も良くなってきたころ、

はじめて、避難者と学校(ボランティア物資管理係)が対立した。口論というか喧嘩が始まった。

“いつまでも指示されたり、管理されるのはもう沢山や”

“救援物資は俺達の為に送られて来たんやろ俺達にくれんかいなー”

“無計画には渡すわけにはいかん”

“でも、物資の管理統制をする気はない”

その後、ボランティアの人達と避難者で夜を徹して話し合った。

生活に必要な物資で食物に関する全ての物は調理を担当している人の計画を最優先し、個人には配給をしないことで合意した。その他衣類などについては、適宜公開し必要な人が利用することとした。希望が重なったときは、その度に話し合いにより分配を決めるということで合意をした。

やり方を誤れば、物資を強奪される事も考えられた。それは、避難所への出入りは必ずしも避難者ばかりとは限らなかったからである。結局、避難者を守るための取り決めでもあった。

避難者と共に

17日午前中には7名だった避難者が昼過ぎには300名を越える人数に膨れ上がった。さらに、夜になって、付近のマンションが危険な状態に

なったという事と、ニテコ池決壊の恐れが出てきたという事で退避命令が出され、その住民が避難してこられ、結局、避難者は最大時421名となった。

これからは、皆んなが仲良く力を合わせ苦楽を共にする事になった。惨めで、辛い生活を強いられるが、一週間を一つの区切りとして、何かを仕上げるという目標を持って、快適な生活を目指した。その後の生活の実態を振り返ってみると、

(a) ~29日頃まで、避難者421名~220名に減少

- ・救援物資が届かず、特に、食料品の確保が困難な時期であった。この時期の後半から少しずつ物資の搬入が増えてきた。物資の奪い合いも不思議ではなかった。
- ・皆んなは、余震に怯え、周りのちょっとした音に敏感になり、また、熟睡が出来ないため苛々が最高潮に達した。殆どの人は黙して語ろうとはしなかった。話し掛けても無反応であった。

(b) ~2月中旬頃まで、避難者220名~39世帯88名に減少

- ・大量の救援物資が届くようになり、安定した食料品が充足できた。睡眠不足と除湿、防音のために、各人にベッドを支給した。さらに、断熱シート・ボードなども支給する。
- ・食事が楽しみであるという人が増える。子供たちに、笑いや話し声など明るさが出てきた。また、行動範囲も広がってきた。ベッドの支給で睡眠不足が解消された。このころから、残った者で自分たちの事は自分たちの手でやろうという自立の心が芽生えてきた。

----- 仮設住宅何処に建てるの -----

この時期、仮設住宅の建設用地の確保が話題であった。さらに、避難所では避難者の運動不足やストレスなど健康管理のことが話題になった。

このころ、西宮市立中学校の体育担当者

が集い、日頃の活躍の労を労い、同僚の安否の確認、さらに、この時期、体育人として何かが出来ないだろうか。また、今後、学校内に仮設住宅建設の話が必ず出てくるだろうが、その対応については、慎重且つ高度な判断を進言できるようにしてほしい、という事などを楽しく話をし避難者が調理してくれた夕食を頂き、散会した。

----- 頑張ろう、体育人 -----

このころ、復旧・復興に何か役立ちたいという意志が集約され、体育教師が4~5人が一つのグループを組んで各避難所を廻り、健康増進とストレス解消を目指した簡単な体操指導の巡回指導を始めた。

ディリーストレッチ体操を中心にプログラムを組み、20分~25分位かけて行なった。「少し肩が軽くなった」とか「気持ち良くなった」などと評価を得た。(学文中学校の湯本先生、平木中学校の森岡先生らが推進役を努めて実施してくれた。)

(c) ~3月上旬頃まで、避難者39世帯88名~11世帯28名に減少

- ・「負けてたまるか村」樹立、テレビの取材を受け放映され話題になった。退所した人からの便りを紹介し、楽しみにしてもらったり、自分も早く自立できたらという励みになればと…期待。このころから外出する人が増える。風呂、買い出し、家の片付け、など、頑張る姿が増える。
- ・団結力、助け合うこと、分かち合うことなどが行動として現われ出した。すっかり元気を取り戻し復旧・復興への気力が出来つつある。会話が建設的内容へと変化していく様子が伺える。いつも寝ている人がいなくなった。

(d) ~3月下旬頃まで、避難者は11世帯22名に減少

- ・体育館に娯楽用具を置く、卓球台1台、来客用コーナーを作る。プールに洗濯場所を作り生活の自立を促す。

・精神的に随分と安定してきた。会話の内容からも復旧・復興への意志がはっきりと伺えるようになった。訪問者に多くの人溜りが出来、楽しい話を交わすようになった。

…もう大丈夫だ…

避難者と共に過ごした74日間の生活と苦悩した事の思い出の一部であり、これは、避難者の自立心を育んだ貴重な体験である。

この間、避難者の人々から多くの事を学び、得た事は、何物にも替えがたい生涯の宝物である。

おわりに

苦楽を共にした避難者との思い出を胸に秘め4月新しい学校に転勤した。

新しく赴任した学校は、西宮でも激震地であり、震災の被害が大きい学校であった。

格技室には、30数名の避難者が生活していた。新たな出会いから、私の前任校の経験を生かし、避難者と共に課題解決に向かって出発した。

6月3日、仮設住宅などの、諸問題が解決され、無事円満に閉所式を行なった。避難者の人々は、新たなる希望に向かって、力強く学校を後にした。

先代の学校長以下諸先生方の前向きな取り組みに感謝したい。

今回の阪神・淡路大地震の被害状況の甚大さを鑑み、全国各地の自治体では、挙って、防災対策・危機管理などの見直しを積極的に行い、「大災害に強い都市づくり」を目指している。

激震地である阪神・淡路の現地には、当然のように全国各地から、現地視察や当時の様子や体験を聞きたいと言う事で来阪者が今も続いている。

矢継ぎ早に、ソフト面では、ハード面ではと聞かれたが、私には答える術もなく分からないとしか答えられなかった。それは、余りにも、突然であり、而も無防備な中での出来事であったからである。

只、今、言えることは、人々が自然の摂理を識らな過ぎた事と、自然への畏敬の念が希薄すぎた事だ。

生徒たちにこんな事を話した。

昔から、生活が教育をするとよく言われる。今回の災害は、誠にもって不幸な出来事であったが、逆に、そこから学ぶ事も多くあった。それは、人の生きざまの事であり、心の持ち様の事であると思う。

今、生ある者の務めとして、

——挫けそうな気持ちに鞭打つこと…

それは耐えぬく力と強さを育てる——

——弛みそうな心に鞭打つこと…

それは耐えぬく力と正しさを育てる——

そして、平成7年を復旧・復興の年と位置付けて、みんなは、「強さ、正しさを求めた生き方をしてほしい。」という私の願いを話した。

犠牲となられた方々のご冥福を祈りつつ筆を置く。



崩壊した校舎の側面
(提供：市立西宮高等学校)

■特集 「大震災と学校 -被災地からのレポート」-(7)

阪神大震災を経験して

村田 洋子

芦屋市立精道小学校 養護教諭

Learning by Experience from the Hanshin-Awaji Great Earthquake

Yoko Murata

Seido Elementary School, Ashiya City

1月17日の大地震で本校児童8名もの尊い生命を奪われました。まず、この地震で亡くなられた多くの方々、地震後に様々な理由で亡くなられた方々の、御冥福をお祈りしたいと思います。

6月中旬、勤務校に「学校保健研究」の編集部からお電話があり、養護教諭として経験したことを書いてもらえないかと言われました。そのとき、今現在、心身の疲れがピークで、とてもおひきうけできないと申し上げました。心のケアがあればほど叫ばれておりましたが、あの時、私自身がまいってしまい、やめられるものならやめたい、と仕事をして初めて、心底思っていたのです。それに、この震災で経験したことは、その学校によってちがっており養護教諭としても、かなりちがっていたようですので、お引き受けすることをかなり迷いましたが、私個人の経験談として、書かせて頂こうと、思っています。

私自身は、尼崎市に住んでおり、地震がおきた時、飼っているネコに起こされ、エサをやって、5時40分、もう少し寝たいなあ、など思っていたところ、ドーンと下からのへんな音とともに激しく揺れ出したのです。幸いケガもなく、ホッとしましたが、部屋の中は、どこから手をつけたらいいのかわからない状態でしばらく呆然としてしまいました。

しばらく停電していましたが、午前中にはTVも見ることができました。学校には、何回電話

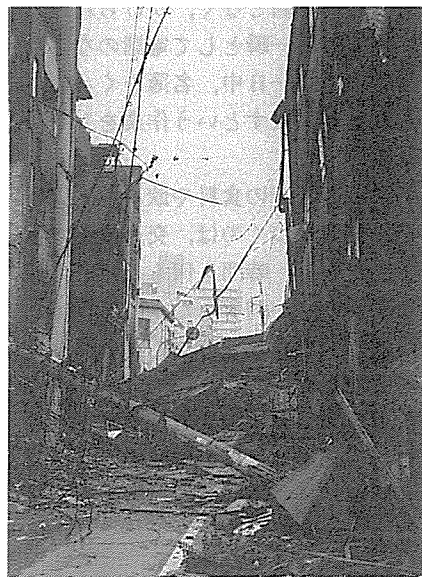
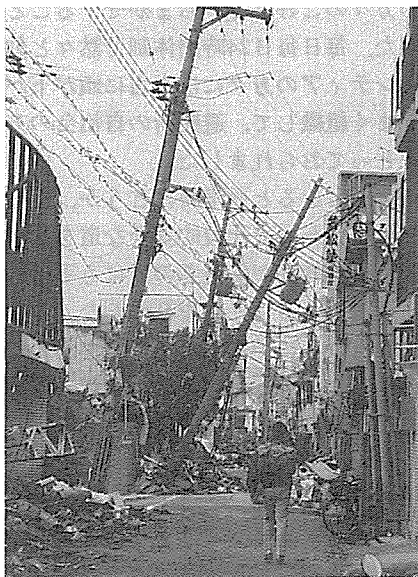
してもつながらず、あきらめてしまいました。一日中、TVを見て、神戸のあまりのひどさにくろたえ、芦屋は一体どうなっているんだろうとやきもきしながら、時間をすごしました。二日目も、えんえんと燃え続ける神戸の街や、地震でこわれたビル、百貨店、病院、高速道路、駅、線路など次々とつつしだされるのをまんじりともせず見ていました。幸い、同じ尼崎に住む同じ学校の先生に電話ができ、電車も阪急は西宮北口までは走っているというので、三日目、19日に2人で、芦屋まで歩いて行くことにしました。西宮北口駅では、背中に大きなリュックをせおった人々であふれてました。芦屋、神戸へ向かう人と逆に避難して行く人と、どちらもすごい人数でした。歩いて行くうちに被害がだんだんひどく、道路にまでこわれた家屋が倒れ、ガラスは散乱し、頭の中はだんだん真白。二時間近くかかって学校にたどりついた時、学校には多くの方々が避難されており、1年2組の教室が救護所になっており、ケガをされた多くの方がおられました。校長先生から、職員や子どもたちのようすをききましたたが、子どもたちが、8人、なくなったということを耳にした時、もうすでに感情を自分で感じる回路は切れていました。職員も何人か来ており、お互いの無事を喜びました。「生きてた?」というのが、第一声でした。職員も神戸、芦屋に住んでいる人がほとんどで、みな受けた被害も大きく、ほんとうに大変な状態でした。救護所に、保健室にあ

る薬品等を全て渡し、消防署員の方と話をしていると、突然の揺れ、思わずしがみついています。本校は芦屋の中心地にあり阪神芦屋駅、市役所のすぐそばです。芦屋のお医者さんたちがすぐ動かれ、精道小学校内に救護所ができ、しばらくすると大阪や京都から、二泊三日のローテーションで、医師、看護婦の方が来てくださいました。学校が再開されてからも、本校児童も大変お世話になりました。保健室にはケガをされた方や高齢の方がたくさん入っておられました。すでに、いくつかの教室が遺体安置所になっておりました。

子どもたちのうち、8人がなくなっただけということでしたが、一人確認が取れていないので家を見て来てほしい、と言われ、学校まで一緒に来たK先生と、行きました。今回の大地震で、市内で被害の大きかったのは、精道小学校区です。芦屋市の中心、古き良き芦屋といわれるこの地域が、本当にひどく、家屋の倒壊もすさまじいものがありました。家を見に行くことになった、この子どもは、6年生で保健委員

でした。まだわかっていないのなら、どうか、生きていてほしいと思ひながら、電柱が倒れ電線がたれ下がっているところをくぐり、家屋の倒壊のあまりのむごたらしさにおびえ、“今もまた地震が来たら、ここにいたら私たちは死んじゃうねえ”“どうか、地震が来ませんように”と祈りながら、やっと子どもの家を見つけることができました。壊れた家がほとんどで、元の形をとどめていませんから、こっちな、どっちなとオロオロし、そばにいた近所の方に、“〇〇さんがどうしているか、ご存知ありませんか”生き埋めになった方の救助にこられている自衛隊の方にも尋ねましたが、結局、わからずじまいで、学校まで戻りました。校長先生が、さっき、潮見中へ遺体が運ばれたそうだと聞かされました。本当に悲しい時には涙も出ない、と言いますが、感情を感じる回路が切れて、人間は、守られる、というのを経験しました。

職員もこの時点で、学校に来れる人は少なく、大変だったのですが、何が何だかわからないままに、時がすぎ、夜になって、私たち2人はまた歩いて、家に戻りました。歩いている間も目



神戸も芦屋も西宮も、いずれも路地は瓦礫の山、倒れた電柱で歩くのも困難であった。
(提供：河井 繁氏)

に入る風景は、壊れた建物ばかり。夙川で電車の線路がおちているそばも通り、マンションがくの字に倒れているのを見て歩きました。尼崎まで戻ってくると、電車は走っているし、お店も全部ではないにしてもあいています。まさに天国と地獄です。

食べ物もない、水もない、トイレも流れなくなった、寒くて寒くてしかたない。ただ、生命が助かり、生きている、という状態。

家に戻ってからは、激しい頭痛が続きました。やっと、感覚が戻ったようでした。

しばらくの間、K先生と私は西宮北口から歩いて通勤しました。自転車にしようかと、考えましたが、道路にとびちっているガラスで、すぐパンクすること、車にはねられていた自転車の人を見た、など他の先生方に言われ、時間はかかるけど、と歩きました。

学校には千人以上の方々が避難されておりましたが、簡単な名簿しかありませんでした。それを3、4部コピーしてつくり、電話での「〇〇さんはいますか」に、お答えしなければなりません。学校には、2台しか電話がなく、かけられた方も何十回となく、かけられたと思えますが受ける方は一瞬として電話のならない時はなく、暗い中、一日中、名簿をくって、その人がおられるか、探すという作業をしなければなりません。

そのうちに救援物資の食料や飲み水も届きはじめました。物資がつくのは、交通機関がマヒしてありましたから、時間も何もなく、渋滞の中、やっとトラックが到着した、という感じでした。まだまだ職員の数も少なく重い荷物を運ぶのは、大変でした。

次第に、ボランティアの方も、来て下さり、山のようにあるしなければならぬことをして頂き大いに助かりました。ちょっとあいた時に、どこからですか、とか、学生さんですか、など話をすることもありましたが、直後に来て下さった高校生の男の子は、東京からで、一週間ほどおられました。すごく感激しました。多くの

方が、きょうは休みなので手伝わせて下さい、と来て下さったり、食料品や衣類をもって来て下さいました。

給水所、仮設トイレなども運動場に設置され、電話も増設されました。名簿も町別に作り直されました。様々な物資が運びこまれ、大きな箱や屋根にかけの山のようなシートなどで職員室は荒れはてた物置のようでした。

23日には、職員が全員そろい、改めて子どもたちが、どこに避難しているか、家の様子はどうかの確認で、校区を一日中駆け回っていました。また避難所としての係分担も新たに決めて、ボランティアの方たちとも連携して動こうと、すべきことの整理が行なわれました。運動場には、自衛隊の仮設風呂もできていました。

2月2日から芦屋市の小・中学校は再開すると決まりました。誰もが、こんな状態で一体どうやって?!と、とまどいました。芦屋市内でも比較的被害の少なかった地域もあり早くなったのではないかと思います。学校再開となると教師は、避難所としての仕事はできませんから、長期滞在のつもりで来て下さったボランティアの方々のご好意で、おまかせすることになりました。毎日毎日24時間体制で黙々と動かされたボランティアの方々には本当に頭が下がりました。うまく組織して、避難所の自治会の方とも連絡をとっておられました。

再開となると通学路はどうか、担当の教師が校区をまわって比較的安全な道を通学路とし、登下校時教師が保護者の方にも手伝って頂き、送り迎えすることになりました。

2月2日に子どもたちの顔を見た時は本当にうれしかった。保健室には避難の方がおられてまだ保健室として機能できませんでした。給食もなく午前中で下校ですし、運動場は仮設のお風呂と駐車場で全く遊ぶこともできませんでした。来室者はそう多くありませんでしたが、風邪がはやっており熱のある子を休ませることができず小会議室で寝させて、かわいそうなことをしたと思います。部屋をかわって頂くこと

は、非常に気を遣いました。教室や体育館で、それぞれ自分の居場所を見つけておられる方に、学校再開のためとは言え、強く言うことはできませんでした。

一週間ほどして、保健室におられる方の人数が4人で家族だったので、避難者の自治会の方を通じて、半分に区切って、使えるようになりました。子どもたちが喜んだのはいうまでもありません。でも、区切ってはいても、話される声もするし、ラジオもつけておられるし、子どもが寝ている時は、寝られるかしらと気をもみ、子どもたちが保健室に来て、元気よくしゃべったり騒いだりすると、また、迷惑かなあと、子どもたちにも静かにしてね、と頼んだりしていました。

だんだんと避難者の数も減り、保健室におられた方も、他の教室に移って下さいました。保健室の備品も、かなりこわれたり、どこかへ行ったりしていましたが、それでも、そうじをして、元の保健室に戻った時はホッとしました。

子どもたちの状況は本当に様々でした。私も送り迎えをする中で、子どもや保護者の方からいろいろな話を聞いておりました。学校に来た子どもは、2月2日には約半分の251人（在籍560人）、仮転出した子も多く、おちつけば帰るとい子、仮転出先の学校にはどうしても行きたくないの、とりあえず帰ってきた子、家が全壊で帰りたくても帰れない子、様々です。もちろん今いるのが、自宅か、避難所か、親戚の家か、…なども様々。

だから、子どもたちと話をする時には、さりげなく、今どこにいるのか、とか家族はどうしているのか、など聞くことが不可欠でした。

夜眠れなくて、病院で薬もらって飲んでるけど眠れないという6年のAちゃん。自宅というのにどうしてかな、と思っていると、家が全壊の親戚の方と一緒にとのこと。気をつかってるんだなあ、とハーブティをあげて“これ、よく眠れるハーブがはいってるからね”と言ったら、次の日、“よく寝れた！”

“おなかが痛いの”と毎日やってくる子どもも何人かいました。ずっと体育館に避難していて、大勢の中でプライバシーもなく暮らしていて、疲れが出ているんでしょうね、ゆっくり寝ていいからね”とベッドに寝かせると、ぐっすり眠っていました。プライバシーのない生活を強いられ、おうちの方も疲れ、子どもたちとの対応も、ゆったりできなかつたり、子どもたちも甘えたり、わがまま言ったりできなかつたり。おうちの方ともよく話をして、ほんとうにいつまで続くんやろうねえ、しんどいねえ、と言いながら、時々隠れてでも、ヨシヨシしてあげてね、と頼んだりしていました。親戚の家、社宅、と1回2回と住む場所がかわっていく中で、アトピーがひどくなってしまった子も何人かいます。学校に来にくくなったり、教室に行きにくくなったりして、何人かが保健室ですごしていました。遊び場もなく、狭い所であばれてケガをした子も何人もいて、ひどい時は校内の救護所へ診て頂きによく行きました。毎日腹痛を訴えてくる元気なT君も診て頂き、看護婦さんやお医者さんにいっぱい話をしていました。

K君は1年生で、お父さんがK君をかばってなくなりました。お母さんもケガをされ長く入院されていました。ある日、K君と同じアパートのK君のちょうど上の階に住んでいたMちゃんが、1日だけ遊びに三田市から来てくれました。あまり、地震のことを口にしなかったK君がMちゃんに一生懸命、「あの時こわかったなあ」。…Mちゃんは「うちの家がK君の上になかったら、K君のお父さん死ななかつたかもしれないね」。そばできいていて、ほんとうにびっくりしました。学校では元気そうにしているけれど、子どもたちの心は、必死でがんばっているのこえようとしている、と感じました。

家でも、もちろん不自由な生活、学校でも元のようにはいかない中、私は子どもたちという話をしましたが、ぐちっているのを、聞いたことはありません。水くみや、いろんな片付け、そうじ、家での大へんだったことを話してくれます。子どもたちの持っているすばらしさ

に何回も感動しました。

3月20日の卒業式はテントでありました。ボランティアの方々が、古い廊下をピカピカに磨き上げて下さり、子どもたちは、その日だけは元の6年生の各教室から、運動場のテントへその廊下を通して入って行きました。本当にすばらしい卒業式でした。

ボランティアの方々は終業式の翌日までいて下さいました。2か月近くも来て下さって、私たち職員も感激してしまいました。なかなかゆっくり話す時間はありませんでしたが、長期にわたる中、寝泊りはほとんど事務室で、ほんとに風邪で高熱を出された時だけ、保健室で休まれたぐらいです。最後に昼食会をもちましたが、皆さん自分が学んだことが多かった、と話されましたが、無償であれだけの仕事をされた方々に、出会えてほんとうに良かった、うれしかったと思います。27日、事務室を覗くと、しーんとしていて寂しく思いました。

3月31日で救護所も閉鎖され、春休みは教室の移動で机・椅子の移動、そうじで、おわっていました。重～い物資を持ってばかりで腰を痛めてしまい、正直、もう重いものは持ちたくない！とっていました。

職員の多くが、それぞれの家も全壊、半壊や交通機関が不通で何時間もかかって通勤していた、ということで、もうヘトヘトでした。気力でなんとかここまでやってきた、というのが正直なところだと思います。ちょっとした余震や震動にもすぐに「あっ！地震」とおびえることも多く、敏感になっていました。

それでも時は過ぎ、4月になり春がやってきました。4月7日の入学式もテントでありました。児童は100人以上も減り、450人ぐらい。

登下校の送り迎えは4月13日からなくなりました。解体作業が続く中、危険な所ばかりでハラハラのしどおしでした。周囲の景色もすっかり変わり、更地になったところも多く、ここは前は何だったのかなあと、歩いていてわからな

くなることもあります。

教室に行きにくかった子どもたちも、3月にはいって徐々に戻れるようになっていましたが、4月になって戻って来た子や、クラスがえなどで、やはり、教室に行きにくい子が何人かおり、毎日保健室へ来るようになりました。学校再開の前にカウンセラーの先生に話をきき、子どもたちへの配慮や対応の仕方など相談しておりましたので、引き続き、相談しながら、学校として職員が十分理解して、対応していきました。

しかし、ご存知のように一学期は健康診断があり、大変忙しい時です。中でも毎日保健室にやってきた子どもは、かなり情緒不安定になっており、泣いたり、叫んだりのパニック状態が続きました。学校の方としては、子どもたちの今の状態をそのまま受け入れようとしてきたのですが、保護者の方が、「どうして教室にいけないのか」とかなり子どもたちに話をされたようです。避難所から、通学してきており、保護者の方も、家のことなどで大変忙しくしておられ、「今まではちゃんとしてきた子なのに、教室に行けないことが理解できない」と困っておられました。担任の先生と、保護者の方と私と三人で話をし、カウンセラーの先生にも相談していることも伝え、長い目で見てほしい、とお願いしました。

4月、5月は、大変でしたが、次第におちつきはじめ、6月になると、他の先生方からもずいぶん顔つきがかわってきたね、と言われるようになりました。教室に戻った子もいます。子どもたちが落ち着き始めた頃、私は激しい頭痛に悩まされるようになりました。保健室へ来る子どもたちへの対応はもちろん私一人ではなく、障害児学級担当の先生が、時間をつくっては一緒にみて下さいました。大変敏感な子どもたちですから、気がつくといつもこちらを気に遣っていたようです。校内でも会議の時に、子どもたちの様子、カウンセラーからの助言、親の気持ち、担任との話し合いなど、みんなに知ってもらうように努めました。しかし、私も長期になるにつれ、一番辛いのは当の子どもたちとってはいても、その子どもを受け入れる器量がな

いのではないかと、養護教諭としてむいていないのではないかと、子どもの我がままががまんできない、と思い始め、逃げれるものなら逃げたい。そう思うようになっていました。保健室登校を経験した友人に相談すると、子どもの様子はほとんど同じパターンのものでした。6月20日にPTAの会で地震後の学校の様子を話すことになり、私も出席する内の一人でしたが、二時間程の会がすんで、もうぐったりでした。地震という言葉をきくだけでもうただ悲しく、おちこんでしまっていました。電車の中でもよく理由もなく、その景色を目にするだけで涙が勝手に流れました。

カウンセラーの先生に何回目かの相談にいった時、私自身が、もうこういう状態です、と話をしました。いろいろ聞いて下さり、「そんだけしてたら誰でもそうなるよ」と言ってもらって、少しホッとしました。お医者様を紹介してもらって薬を飲み、時々休んで、なんとか一学期を終えることができました。

7月20日の夕方、保護者の方にカウンセラーの先生と会って頂き、そのパイプ役をすることで、一学期の仕事を終えました。カウンセラーの先生が“一週間学校離れたら元気になるんだけど”と言われましたが本当に休みにはいり一週間ほどで元気になりました。学校では気がはっていたのですが、周りの先生方は私がそんなに落ち込んでいるとは、と、びっくりされました。でも他にも、体調をこわした先生が何人かおられました。無理もないと思います。実際、本当に心やさしい教職員ばかりで、何とか助けて頂きました。私が出張の時など子どもは事務室ですごした、ということもありました。夏休みの間に、子どもたちがゆっくり安心して親と過ごし、少しでも心が癒されるといいなあと思っています。こうして書くことで、私自身の気持ちもずいぶん落ち着いたように思います。この機会を頂き、感謝しています。ありがとうございました。

資料 阪神大震災と学校の対応

芦屋市立精道小学校

1月17日(火) 5:46 M7.2

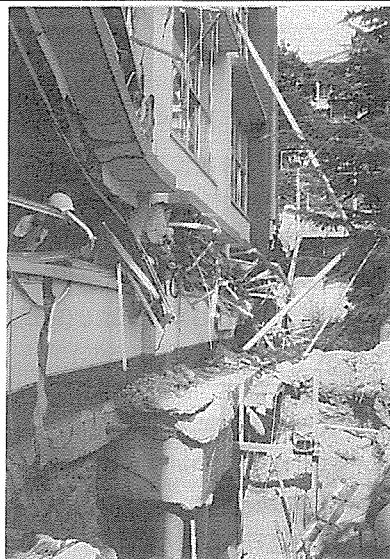
本校の施設・設備等被害比較的軽微
 救護所・遺体安置所・避難所となる
 避難者数 当初1000 最高時 1330
 校区内被害状況
 死者 153 うち本校児童8(市民380)
 家屋全半壊 1874/2777 (67.5%)
 電気 一部可
 水道・ガス 全面断
 電話 ほとんどかからず
 交通機関 麻痺状態
 道路 通行止め多数
 通行可も消防車・救急車・パトカー・緊急輸送車等であふれる

臨時休校

- 施設安全確認・避難所設営
- 児童・保護者・教職員等の安否確認
- 児童の住所変更・転校等の対応
- 避難者・訪問者・電話・対策本部等の対応
- 避難用物資の本部への発注・運搬・配布
- 施設・設備・備品等の被害調査
- マスコミとの対応
- ボランティアへの指示
 - 教員24時間体制
 - ▽ 給水所設置
 - ▽ 電話増設
 - ▽ 仮設トイレ 設置20 24日
 - ▽ 電灯線増設
 - ▽ 自衛隊仮設風呂 設置 2 26日

- ▽貝原兵庫県知事・土井衆院議長来校
- 1月25日(木) 臨時校長会 状況報告・今後の対応等について
- 通学路安全点検
 - 教室確保のため避難者代表と協議・調整
- 1月30日(月) 臨時校長会 学校再開について
臨時PTA役員会
- 学校再開について, 児童・保護者への連絡
- 1月31日(火)
- ▽常駐ボランティア発足
- ▽天皇・皇后両陛下来校
- 仮・本転出確認
 - 児童用救援物資仕分け・配布 礼状
 - 仮転受け入れ校への通知
 - 各種見舞い・激励への礼状
 - 避難者宛郵便物配布
- 2月2日(木) 学校再開
10:00~12:00 出席251/560
(全校一斉集団登下校 教師・保護者誘導)
- 2月6日(月) 9:00~12:00
- 2月7日(火) ▽本校避難者自治会発足
- 教科書学用品等被害調査・再配布
 - 避難者自治会に出席・連絡調整
- 2月14日(火) 9:00~14:30 (簡易給食開始)
- 震災扶助事務
 - 児童数報告(学級編制に係る)
- 3月13日(月) 完全給食開始
- 児童転出先出席日数調査・確認
- 3月15日(水) 本校追悼式(テント)
- 給食費返金事務
- 3月20日(月) 第122回卒業式(テント)
- 2遺影を含め93名全員出席
- 3月25日(土) 終業式 雨天
教室にて学年毎(通知票略記)
- 教室確保のための調整
- 3月31日(金) ▽救護所閉鎖
- 教室配置替え・机椅子移動
 - 環境整備・清掃 PTAも参加
- 4月7日(金) 始業式(テント)
- 転出入事務

- 4月10日(月) 入学式(テント)
- | | |
|-----------------|------|
| 児童数(平成6年5月1日現在) | 567名 |
| 平成7年5月22日現在 | 456名 |
- | | | | |
|-----------|---|-------|----|
| うち校区外 113 | } | 仮設住宅 | 77 |
| | | 市内他校区 | 13 |
| | | 市外 | 23 |
- 4月13日(木) 通常登校にもどす
(教師の誘導なし)
- 4月17日(月) 全校一斉下校を打ち切り40分授業
で時間割通りとする
- 4月26日(水) ▽仮設風呂撤収
- 震災扶助事務(追加分)全224/456
- 5月9日(火) 始業時刻8:45とする
- 5月16日(火) ▽本校内避難者0となる
- 環境整備・清掃(児童・職員)
- 5月21日(日) 運動場整地始まる
- 6月1日(木) 始業時刻8:30とし平常教育活動にもどす
- 学校徴収金調整事務
 - 一部教室再配置替え・机椅子移動
- 6月19日(月) プール補修完了
- 6月20日(火) 文部省等被害状況確認のため来校



損壊した校舎の基礎部分
(提供:市立西宮高等学校)

■特集 大震災と学校—被災地からのレポート—(8)

震災後の子どもの心をうけとめて —保健室からみた子どもたちと養護教諭の役割—

明瀬 好子

神戸市立鷹匠中学校養護教諭

Caring for Children's Psychological Stress of the Great Hanshin - Awaji Earthquake —The Leading Role of School Nurses—

Yoshiko Akase

Takasho Junior High School, Kobe City

1 はじめに

戦後50年といわれるこの年に震災がおきた。神戸の平和な市民生活は崩壊してしまった。

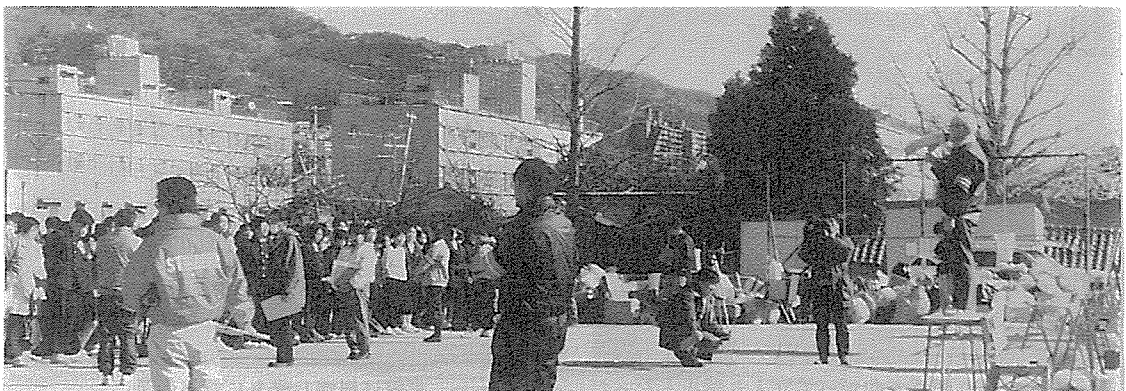
ライフラインの機能停止、生活支障などあいまって、無力感におちいることも、しばしばあった。現在も、学校に避難している世帯がかなりある。大きな被災にあった本校は、仮設校舎(プレハブ)で学んでいる。ここでは、保健室からみた子どもたちの現状と、養護教諭の役割にもふれてみた。さらに、健康教育についても考えてみたいと思っている。

(1)神戸の街は

文明の利器を突然失った都会人は、震災直後、安全地帯を求め、昼夜の区別なく歩き続けた。車椅子に老人を、幼い子の手を引き、行くあてをさがしている様相を、私は避難していた自家用車の中から見た。また、異人館、酒蔵、美術館などの文化財の被災も大きく、街の様変わりとはたえようもない。

(2)子どもたちのこと(経過)

本校の平成6年度の在籍801名、家屋倒壊などの被災生徒は334名、東京から沖縄に至る仮転出生176名、転入2名と当初の変動は大きい。1月下旬2回の安全確認の登校(40%)、2月上旬には2部式授業(50%)の出席という日もあって、



被災後のはじめての登校 私服登校生がいる 1月23日

心が痛んだ。

生徒の中には、幼児がえり、失禁、書痙、不登校、罪悪感におびえるなど学習に落ち着けないなどの健康上の問題もみられた。市からの巡回相談などの施策の活用も行った。

3月23日には、全校生徒（1・2年）を対象に、アンケート調査（表1，表2）を行った。同時に教職員にもアンケート調査（表3）を実施した。3月25日には、他校にて部活を再開した。春期休業中は担任の家庭訪問（避難所）が行われた。アンケート結果から、親・子・教師の連携が求められたことも理由の一つになった。4月5日、仮設校舎の完成、4月8日、通常の授業が再開された。健康診断なども実施可能であった。

5月～6月には1・2・3年、学年ごとに、宿泊野外活動（2泊3日）が行われた。自然と、美しい街並は心を癒してくれた。当時の3年生は、入試・卒業と混乱の中でも、人々に支えられて、言動していた姿は、いじらしいものがあった。入学式は大テントの中で行われた。

2 被災初期から復旧・復興・復活へ

震災発生の日、私も瓦礫から脱出することができた。自転車にて、凸凹した地面、裂けた道路、路上に倒壊した家の間を縫って、普段の3倍の時間をかけて、学校に着いた。

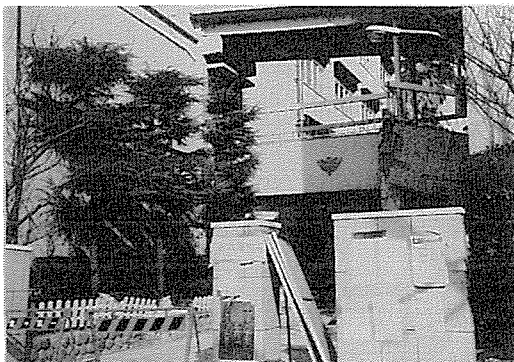
保健室には3名の老人が横たわり避難されて

いた。散乱した書類、倒れた戸棚、割れたガラス、信じがたいほどメチャクチャの保健室、でもベッドだけは、残っていたらしい。

廊下では、頭部から血を流している男性の応急処置を行った。保健室の在庫薬品も全て放出した。水のない救急処置は困難を伴った。近隣の医療機関も倒壊していた。

数日後には救護所を設置、救急医療の医師や看護婦が常駐されたので、体調をくずした避難者の利用が多かった。流感の心配もあり、うがい薬も各所に用意された。生徒の内科的・外科的疾患も処置がうけられ幸運であった。発熱や、道路条件がわるく転倒による裂傷が特徴的であった。この医療団の常駐は、ほんとうに、安心感を与えてくれた。一方、生徒は、親を助け、水くみや、運動場での救援の炊き出しに列を作る日々が続いた。

やがて、人々は、避難所から、ぼつぼつと仮設住宅に移動が始った。大被害をうけた本校は、仮設校舎に運動場を取られてしまった生徒は、相当期間、身体活動を抑制され不満が高まった。細長く残った運動場を交替で活用したりした。市の体育施設にて終日球技を行った日もあった。途中からどしゃ降りの雨になったが、誰も中止の声をかけにくかったことを覚えている。まるで水球をしているようだった。平常時の健康管理、指導のマニュアルはここでは通用しなくなっていた。このように災害という異変が、様々な



鉄筋の柱、渡り廊下も曲がって立ち入り禁止となった学校正門



東館は崩壊し直ちに解体作業

創意工夫を、教育活動の在り方に求めるようになった。



外側より4階建てを鉄支柱がささえている

3 個別の健康教育

(1) 保健室の機能

2月上旬、2部式授業の始まる日、教師は、子どもたちの保健室が必要との想いから、資料教材室を二分し、いち早く新しい保健室をつくり、養護教諭の意欲を引き出してくれた。このことを後でふりかえってみると医療の場となった保健室を子どもたちが利用しているケース・職員室の片隅や廊下の一部分を間仕切りしたケースとくらべて、心のケアを行っていく上で有効であった。被災者である養護教諭自身の支えにもなった。一定の場（保健室）と、一定した人（養護教諭）の存在は、生活上の不安が多かった生徒にとっては、心の居場所・心の避難所となったと思う。

保健室には、ぬいぐるみ人形を置いたり、BGM（童謡）を流したりした。

緑（花）も多く置くようにした。温かい雰囲気

気づくりを試みた。

保健室運営についても、一時的に、指導のねらいを低くした対応をとった。普段よりも退行（幼児がえり）した状態でも、自分をみとめてもらうことにより、勇気をもつことができ、主体性をとりもどすことができることを願った。

(2) 相談事例から

生徒は、一般に興奮気味で、明るさを装っているかに見受けられた。その一方、心の異変を感じさせる生徒も少ない。そのいくつかの事例をとりあげてみると

- ①幼児がえりを示し、べたつき、側にいてほしい、幼い遊び、ひきこもろうとする（中1女子）
- ②何も話そうとせず（飼犬を失って）罪悪感におびえる（中3女子）
- ③強い緊張と不安から、失禁をくりかえしてしまう（中1男子）
- ④転校、不登校、再転入をくりかえす（中2女子）

これらの際立った例には、急な解決を迫らず、生徒に添い、話をきき、受けとめる姿勢をとった。ゆったりと接するように心がけた。特に、生徒の個性やペースを尊重した。生徒のつらい感情や、自らの心の中との対話を見守った。時間を経て、生徒は、安心し、自分がみとめられていると察すると、話し出した。自分のことが整理でき自立をはじめたようである。このような対応が、信頼関係をつくった。

(3) 大都市直下型（震度7）22秒間の凄まじいエネルギーが子どもの心に映したもの

- ①瓦礫の下から、女の人の呼び声が大きな泣き声にかわった。その声が、今も耳をはなれない。
- ②父と駆けつけた祖父母の住む家の1階は、姿なく、助けようがなかった。
- ③愛犬が瓦礫の下に…なき声はじきに消えた。
- ④逃げる途中、女の人に下敷きになった幼児を助けてといわれて。
- ⑤何事もなかった平凡な生活は、幸せて平和だった。

- ⑥父母（家）の手伝いをした。親のすごさに気付いた。
 ⑦親友を失い、無気力感におそわれた。
 ⑧嘆く母、機嫌の悪い父。自分の将来に不安がある。
 ⑨土蔵におされ勉強部屋に生き埋めされた青年の手握り座り続けた母を登下校時にみて。
 ⑩この町はもとのようになるの。
 (4) 瓦礫の街の中で
 ①「もう何もなくなったねえ」「もう何も要らな

表1 中学生（男）に対する健康調査（WHO：GHQ26）の結果

	A		B		C		D	
	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年
1. 気分や健康状態は	19	13	75	63	6	19		5
2. 疲労回復剤(ドリンク・ビタミン剤)を飲みたいと思う	50	50	38	25	6	13	6	12
3. 元気無く、疲れを感じたことは		19	44	38	44	19	12	19
4. 病気だと感じたことは	19	19	56	38	12	25	13	18
5. 頭痛がしたことは	19	38	38	5	44	44		13
6. 頭が重いように感じたことは	44	44	19	5	31	38		13
7. 体がほてったり、寒気がしたことは	44	44	19	38	31	5		26
8. 心配事があって、よく眠れないことは	31	50	38	19	31	5		25
9. 夜中に目を覚ますことは	31	31	12	38	44		13	31
10. いつもより忙しく活動的な生活を送ることが	6	31	44	56	38		12	13
11. いつもより何かするのに余計に時間がかかることが	25	50	38	38	31	5	6	7
12. いつもより全てがうまく行っていると感じることは	13	12	25	44	50	38	12	6
13. 毎日している仕事は	6	13	75	81	12		7	6
14. いつもより自分のしていることに生きがいを感じることは	12	5	75	25	6	56	7	5
15. いつもより容易にものごとを決めることが	12	12	81	81	7	5		2
16. いつもストレス(緊張感)を感じたことは	25	25	50	31	19	19	6	25
17. いつもより日常生活を楽しく送ることが	25	19	56	75	12		7	6
18. いらいらして、おこりっぽくなることは	12	13	50	31	19	31	19	25
19. たいした理由がないのに、何かこわくなったり、とり乱すことは	44	44	44	31	12	5		13
20. いつもより色々なことを重荷と感じたことは	38	25	50	44	6	25	6	6
21. 自分は役に立たない人間だと感じたことは	25	44	44	38	31	5		13
22. 人生にまったく望みを失ったと感じたことは	60	50	25	44	15			6
23. 不安を感じ緊張したことは	25	31	44	44	19	19		6
24. 生きていることに意味がないと感じたことは	75	63	12	12	6	5	7	13
25. この世から消えてしまいたいと感じたことは	62	63	19	19		13	19	5
26. ノイローゼ気味で何もすることができなないと考えたこと	88	75	6	13			6	12

注) 1. 調査人数：1年男112名，2年男112名

2. 回答日：平成7年3月23日

3. 回答のA～Dの段階は下記による

良又は「ない」 ————— 不良又は「ある」

(いつも) (ときどき) (ときどき) (いつも)

A B C D

4. 表中数字は該当者の%を示す

- い」父親と女の子の会話。 「どうぞお役に立てて…」
- ②女の子の人が鳥かごだけを持ってマンションから ⑤あふれる汚物の清掃
走りおりた。 ⑥各地から被災した子どもの家庭受入れ「どうぞ心を癒して下さい」
- ③わずかな食物を分け合って
- ④見知らぬ人にクーラーいっぱい缶ジュース ⑦みんなで野菜をきざんで、味噌をとかして豚

表2 中学生(女)に対する健康調査(WHO:GHQ26)の結果

	A		B		C		D	
	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年
1. 気分や健康状態は		10	73	60	27	30		
2. 疲労回復剤(ドリンク・ビタミン剤)を飲みたいと思う	82	20	18	40		40		
3. 元気無く、疲れを感じたことは	9		36	20	45	40	10	40
4. 病気だと感じたことは	27	20	55	20	9	50	9	10
5. 頭痛がしたことは	18		27	20	36	70	18	10
6. 頭が重いように感じたことは	18	10	45	10	27	50	10	30
7. 体がほてったり、寒気がしたことは	18	10	18	20	36	70	10	
8. 心配事があって、よく眠れないことは	18	10	18	60	18	20	46	10
9. 夜中に目を覚ますことは	27	30	18	20	27	30	28	20
10. いつもより忙しく活動的な生活を送ることが	9		18	60	73	20		20
11. いつもより何かするのに余計に時間がかかることが	9		45	50	46	40		
12. いつもより全てがうまく行っていると感じることが	18		36	70	36	20	10	10
13. 毎日している仕事は		10	73	90	18			
14. いつもより自分のしていることに生きがいを感じることに	27		45	80	18	10	10	10
15. いつもより容易にものごとを決めることが	9	10	73	70	9	20		
16. いつもストレス(緊張感)を感じたことは	18		27	40	36	40	19	20
17. いつもより日常生活を楽しく送ることが	26	30	45	40	9	20	9	10
18. いらいらして、おこりっぽくなることは		10	9	30	64	40	27	20
19. たいした理由がないのに、何かこわくなったり、とり乱すことは	55	40	36	50	9	10		
20. いつもより色々なことを重荷と感じたことは	9		36	90	45	10	10	
21. 自分は役に立たない人間だと感じたことは	9	20	45	60	36	20	10	
22. 人生にまったく望みを失ったと感じたことは	45	50	18	20	37	30		
23. 不安を感じ緊張したことは	27	10	18	10	37	70	18	10
24. 生きていることに意味がないと感じたことは	64	50	18	30	9	20	9	
25. この世から消えてしまいたいと感じたことは	55	50	9	40	27	10	9	
26. ノイローゼ気味で何もすることができなと考えたこと	55	60	36	30		10	9	

注) 1. 調査人数：1年女77名，2年女70名
 2. 回答日：平成7年3月23日
 3. 回答のA～Dの段階は下記による

良又は「ない」 ————— 不良又は「ある」

(いつも) (ときどき) (ときどき) (いつも)

A B C D

4. 表中数字は該当者の%を示す

- 汁をつくって、
- ⑧街の闇に白い梅，青空に櫻が，しかし，チュウリップの花びらがギザギサになって（自然の営みと豊かさと厳しさ）
 - ⑨栄養食品部の炊き出しーおでんとバチ汁ーあったかいものありがとう先生
 - ⑩医務室，病院となった保健室

4 集団の健康教育

(1)震災後のアンケートによる実態調査を実施

した。（実施日，平成7年3月23日，対象1年男112女77，2年男112女70），数名の特異なケースに会い，全校生徒はどうか不安をもち実態把握のため全員の調査をした。

学級担任の指導のもと（WHO - GHQ 28のうち，自殺・死の2項目を除く26項目とした），それに加え，中学生の疲労実態の調査も行った。教師には，被災体験者の心理，身体状況を客観的に知ってもらうため（DSM - IV）アンケート調査を行った。（表3）

表3 教職員に対するアンケート調査結果
DSM - IV調査票

京都大学防災研究所
地域防災システム研究センター

災害は強烈な体験です。人のところに大きなストレスを与えます。そのため、災害後にさまざまな心理的・身体的な変調を経験する方がたくさんいます。ここでは、大きな災害を経験した人なら、誰もが体験するような心理状態や身体状態をこれまでの研究をもとにまとめてあります。これらの質問に答えていただくことによって、あなたご自身の状況を客観的に知っていただけたと思います。

回答者名	回答日	7年 3月 23日
この1ヵ月間に、あなたはつぎにのべるような体験がつづきましたか。		
1) 地震のときの光景がくりかえし思い出される。		36
2) 地震の時の光景をくりかえし夢に見る。		6
3) もう一度、地震がおきたように感じてびっくりする。		42
4) 地震を思い出させるものを見たり聞いたりするとつらくなる。		53
5) 地震のことを思い出すと体がこわばり、緊張する。		14
6) 地震のことを考えたり、話題にするのをさける。		6
7) 地震のことを思い出せることや場所をさける。		8
8) 地震の時のことをよく思い出せない。		6
9) 大切だとわかっていることでも一所懸命になれない。		31
10) ほかに人といっても、その人との距離が遠く感じられる。		14
11) ものごとに感動しなくなる、できるだけ感情を抑える。		17
12) 先のこと、将来のことを考える気になれない。		25
13) 寝つきが悪くなったり、すぐ目を覚ましたりする。		25
14) いらいらしがちで、ささいなことにもすぐかっとなる。		22
15) ものごとに集中できない。		31
16) ものごとに過敏になって、眠気も起きない。		3
17) わずかなことにもひどく驚く。		17



教職員36名中「はい」と回答した者の割合 (%)

(2)調査結果と考察

表1より、男子中学生は、震災後、生きがいもてなかったり、全てがうまくいっていないと過半数にみとめられた。表2より女子中学生は、頭重感、不安緊張感におそわれ活動的でなかった割合が高い。男女共に、この世から消えてしまいたいと思った生徒が少なからずいたことは、教師をあわてさせた。

春期休業中に家庭訪問を行うなど生徒・親・教師との十分なコミュニケーションを図った。

5 組織活動と健康教育

被災後、特に思ったことは、日常の保健室活動・運営が一般教職員に理解されているかである。校内組織は勿論、地域保健との連携、関係専門機関とのパイプラインが、できているかである。この度の震災後、保健所の専門職の方の学校訪問や援助をいただいた。医師会との協力も得られた。このことは、学校保健推進役の養護教諭の平素のおこたりのない執務計画、内容とその実践、さらに生徒との信頼関係、職員との協力体制が物をいう。

6 相談活動と養護教諭

保健室での相談活動は、意図的計画的に行われないうちに、生徒にとっても心開くことになるのだろう。ここでは、養護教諭の力量を問われることになる。また、生徒と教師の信頼関係がベースとなるだろう。

7 教職員の健康と養護教諭のかかわり

被災地の教職員も被災者の立場にある。ストレス状況の程度も高いことが表5よりうかがえる。教職員の健康管理もみのがせない。

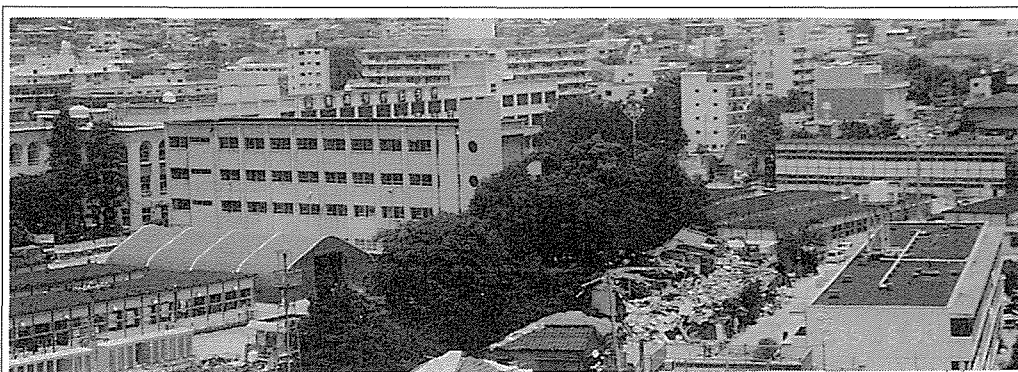
8 まとめ

被災して間もなく教育委員会主催の精神科医、人類学者、防災心理学者の方々による教職員の研修が企画され、研鑽をつんだ。また従来より実施されている心の健康相談に加え巡回相談、訪問相談などが開設された。このような、心の健康に関する専門機関のパイプラインもできた。このことは、教職員の心の支えとなり、教職員の力量を高めてくれた。

特に、養護教諭自身がスーパーバイズをうける必要を感じた。信頼できるスーパーバイザーが必要。かつ、望まれる。これも、平素から、人間関係を保ち、心豊かでありたいし、努力を重ねたい。震災によって、あらためて、「生活リズムをとりもどす」「話しやすい環境づくり」など学校保健の原点ともいえることが重要であることに気付くことができた。毎日の生活を復活させ、人生の再構築を行っていくことが必須だろう。

「心のケア」は、健康福祉の視点から、地域社会の連携をもって推進されたいと思う。

最後に、全国各地のみなさまのご支援が、復旧・復興・復活への支えになったことに、心から感謝している。



学校周辺の被害とグラウンドのプレハブ（提供：後和美朝氏）

■特集 大震災と学校—被災地からのレポート—(9)

被災の経験から

立石 光代

兵庫県立夢野台高等学校

Experiences of a Great Earthquake

Mitsuyo Tateishi

Yumenodai Senior High School, Hyogo Prefecture

はじめに

この度の大震災にあって、私は養護教諭として、主婦として、母親として、どう行動したか、良かった点、困った点、今後の課題等について述べる。

当日、六甲山の麓、神戸市灘区高羽町にて被災、自宅は半壊、周囲は $\frac{1}{3}$ が全壊、 $\frac{1}{3}$ 半壊、 $\frac{1}{3}$ 一部損壊で幸い火災の発生はなかった。

勤務地の夢野台高校は、神戸市長田区で校舎は $\frac{1}{2}$ が壊滅し危険で立入禁止、雨により内庭の崖がくずれ流出した土砂が校舎を直撃。体育館には被災者約1000人、グラウンドではテント50張りで約200人の方々が避難してこられた。学校の周辺は全焼、全壊の家屋が多く、一転して風景が変わり本校舎だけがそびえ立っていた。瀬戸内海が一望でき、すっかり淋しい街並に変わってしまった。校舎は大正5年に建てられ老朽化したため昨年より新しく建築中で、I期工事の完成も被災により遅れ、現在使用可能な教室は25教室、3学年24クラスが授業している。しかし、体育の授業が出来ず、理科、家庭科、書道等の特別教室は全壊で実習不能の現状である。全校生の $\frac{1}{3}$ が被災している。

さて、魔の1月17日、午前5時46分、ドーンという雷が落ちたのかと思わせる号音、次の瞬間、家ごと大きなシェーカーでシェイクされている様な揺れ！家財は転倒し食器類は全壊、家族の無事の確認と出口の確保が精一杯であっ

た。暗闇の中、家族が2階の安全な一室に身を寄せ合って、真冬の夜明けを息をこらして待ったが不気味な静けさであった。

I 被災直後、自宅で行ったこと —主婦として—

- (1) 安全の確保、2次災害の予防
 - 家族のけがの有無
 - ガラスの破片注意
 - 厚手のくつ下、屋内で履物を履く(靴、スリッパ)
 - 防寒衣の着用(暖かく動きやすい服装)
- (2) 水の確保
 - 直後、浴槽に水を溜める(サビ水だが、後日、洗い物、トイレの水に大変役立った)
- (3) 近隣者の救出活動
 - 一人暮らしの宅へ安否の確認と救出(救出者4人)老人で戸が開けられない人、門扉が折れ瓦礫で脱出できない人が多かった
- (4) 貴重品の持出し準備
 - 貴重品、印鑑、緊急連絡帳等
- (5) 緊急連絡するも電話は全く機能せず、3日間は、ダイヤル電話機、公衆電話のみが通話可能。県外、外国からの受信はできた。携帯電話からの110番 119番は発信出来ない
- (6) 自宅周辺の状況と安全の確認
 - 自宅の写真を撮る(内・外壁のヒビ割れ、屋根瓦、家の傾き、家財の破損の状況等)

(7) 勇気を出して避難しよう

1週間ぐらいは予震により2次災害が発生しやすく、ライフラインの復旧も無理だった。食べ物が2～3日で底をつき、寒さによる冷えて下痢、不眠になる。被災者全員の食料の調達は(物流不能)交通渋滞のため無理。そのためにも脱出しようということで、私は4日目に東加古川に脱出した

II ライフライン復旧の状況

	自 宅	職 場
(1)電話	復旧3日後	当日受信のみ 仮設電話4日目より
(2)電気	仮復旧3日後 正常復旧1月27日 (10日後)	仮設、体育館のみ 1月20日より 校舎内復旧 2月下旬より
(3)水道	復旧2月10日 (24日後)	校門入口まで 2月上旬 正常復旧3月16日
(4)ガス	復旧3月20日 (62日後)	4月中旬 市内最終日に復旧
(5)商店	2日目、在庫のみ、すぐ品切れ 物流は交通網との関係が大きい。	

III 学校正常化へのあゆみ

- 1月17日 大地震発生、交通途絶、
生徒、教職員の安否の確認
—出勤可能な教職員による—
- 1月25日 第一回 職員会議—現状報告—
- 1月28日 第二回 職員会議—今後の対策—
- 1月30日 生徒集合(南部、北部に分かれ、始めて生徒と会う)、被災状況の確認等
- 1月31日 第三回 職員会議
—生徒の状況報告—
- 2月3日 第四回 職員会議
—授業開始に向けて—
- 2月7日 第五回 職員会議—校内環境整備—
- 2月8日 在校生 登校開始(交通機関復旧)
- 2月9日～午前中授業開始
- 2月20日～正常授業(6限)にもどる

- 2月28日 卒業式—3年生のみ講堂にて—(在校生会場狭く参列できず)
- 3月30日 3学期 終業式
- 9月18日 グランド復旧
- 10月3日 体育館復旧

IV 保健室の現状

1. 救護場所となった場合(隣接兵庫高校の例)
対策本部より、医師、看護婦、保健婦等派遣され2月末まで24時間体制、3月末までは昼間のみ開設され診療がなされた

- 救急処置、専門医への移送、一般内科の診療が行れた
 - 予防接種
 - 健康相談、調査(心のケア、栄養等)
 - 薬品は県の医務課及び日赤等より配布
- この間保健室は病院の外來診療室と全く同じ様相であった

2. 救護場所とならなかった場合(本校の例)
(体育館と保健室は離れており停電のため体育館の舞台裏の控室が救護所となる。)

1) 保健室ですぐ準備したもの

- 水の確保(蛇口付、ポリタンク1個)
- 石油ストーブ、使い捨てカイロ等
- 手指消毒液…逆性石けん、クレゾール液、ウェルパス、ウェットティッシュ
- 手ぶくろ。(軍手)ゴミ袋、ダンボール箱
- うがい薬 ○紙タオル ○バケツ、柄杓等

2) 養護教諭が登校して保健室で最初に行ったこと

- (1) 保健室の現状を写真撮影
(全体像と備品の個々の破損状況)
- (2) 室内の整理整頓(足の踏場もない状態)
 - まず自分の座る場所、机、椅子のまわりより作業開始。
 - 転倒したすべての戸棚を起こし、使用可能なものと不能のものに分別する。
 - 公簿を整理(公文書、健康診断票等)
 - 薬品の整理(外科用、内科用、衛生材料)
 - 備品の整理(オーディオメータ、器具一式)

○保健室の全体復旧

救急処置コーナー、相談コーナー、休養コーナー、掲示コーナー、事務コーナー等、花を生ける

○備品の破損状況の写真、一覧表を作成し、備品購入要望書を作成

(後日、文部省より現地調査時大変に役立った)

3) 日頃より心がけていて良かった点

- (1) 常に保健室が地域の保健センター的役割が果せるよう、学校保健委員会で積み上げていたため、緊急時の医療体制がスムーズに行われた
- (2) 保健室には常に緊急用外科薬品と衛生材料1000人以上のストックをしていたこと(特に精製水が、断水のため、傷の処置に役立った)
- (3) 病人やけが人を搬送するのに担架5台が役立った(車椅子も多い方がよい)

4) 失敗したこと、及び注意すべきこと

- (1) 校医の安否の確認が遅れたこと、電話のベルは鳴るが応答がないので歩いて訪問したところ、内科、眼科校医の病院は全焼、耳鼻科校医宅全壊で先生ご夫婦圧死が判明し、大変失礼をした。病院と自宅の住所の異なる校医は平常より両方の住所、電話番号をキャッチしておくべきであった
- (2) 飲み水の確保は保健室では一番大切であり、日頃より、蛇口付きのポリタンクを常備すべきであった(非常時手に入りにくい商品である)
- (3) 担架は各階ごと、各分散している校舎、体育館、格技場、プールごとに数多く準備しておくこと緊急時一度に多発する事故者の搬送に役立つ

V 災害発生より生徒が登校再開するまでに教職員全体で対応したこと

- (1) 学校に避難されて来た人への対応
- (2) 全校生の安否の確認、教職員も同様
- (3) 校舎の内外の安全の確認、二次災害の予防対策、薬品処理(危険物)

(4) 転出していく生徒への対応

- (5) 自宅が焼失又は全壊し、制服、教科書を失った生徒への対応、準備をする
- (6) 被災により経済的困難な生徒への対応
- (7) 災害対策本部、県教委、近隣の学校、OB等の連携や宿日直の割当等
- (8) 環境の整備(仮設トイレ、ポリタンク等)
- (9) 通学路の安全の確認、被災生徒の昼食確保
- (10) ボランティアの確保と仕事の割り振り等検討

VI 授業再開し生徒が登校しだしてから、困ったこと(問題点)

- (1) 被災により、遠隔地より通学して来る生徒への配慮(交通途絶による)
- (2) 一時的に治安が悪く、特に女子生徒への身の安全について警察と連携を密にして警備を強化してもらう(強姦、強盗等の注意)
- (3) 交通安全、自分の身の安全は自分で守る。特に信号機が市内すべて機能しないため、道路が無法地帯となった
- (4) ふだん水洗トイレになれている生徒が仮設トイレでの用がたせない例が多発した
- (5) 市内全域が瓦礫の撤去のため空気が汚染され、ぜんそく、アトピーの生徒が重症化した
- (6) 断水のため、手洗い方法の指導と伝染病の予防に大変気を使った(特にトイレ)
- (7) 予震、2次災害発生時、全校生徒の安全な避難場所の確保に困った
- (8) グラウンド、体育館、特別教室が使用不能のため、生徒はエネルギー発散の場を失った

VII 授業再開後、保健室を訪れた生徒の状況

- 1) 被災地域で、従来不登校であった生徒が全員登校して来た。反面、被災せず当時ボランティア活動を一生懸命にした生徒の中から不登校が発生した
- 2) 病气やけがで保健室を訪れる生徒は被災前

より減少した(3月末まで)が、

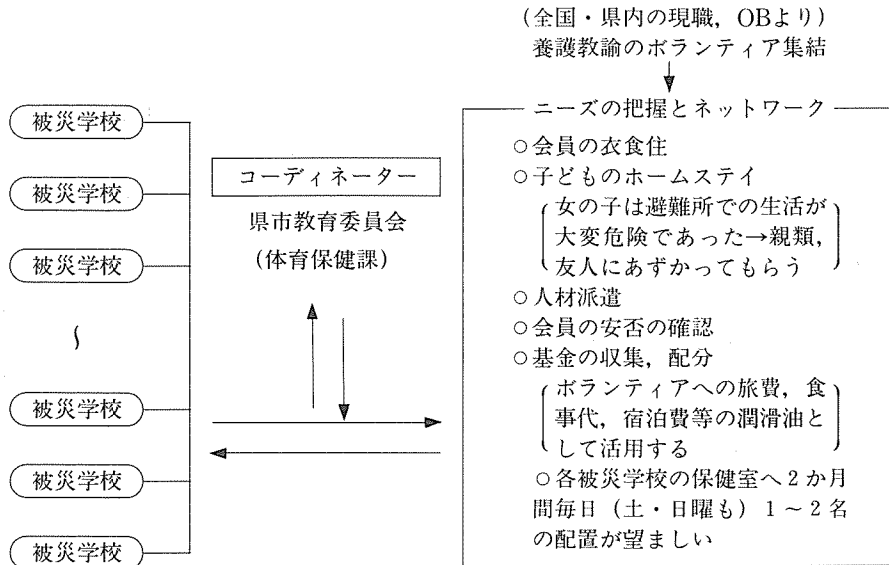
変わった点は

- (1) 下痢を訴えて来室する生徒が多かった
(冷え、食生活の乱れ、飲水等による)
- (2) 心的外傷後ストレス障害(PTSD)の生徒の来室は5月以後で、それまでは本人が自覚できなかったと思われる
- (3) 避難所で生活している女子生徒が不安を訴え、来室が増えた(強姦、変質者等で)
- (4) 体重が減少した生徒が増加
体育、部活動ができず、食欲不振になったと思われる
- (5) 4月の定期健康診断結果よりの変化
 - 眼科 霰粒腫の増加(ほこりによる)
 - 内科 ぜんそく、アトピー性皮膚炎の増加
 - 耳鼻科 アレルギー性鼻炎の増加
 - 歯科 う歯の減少(しかし被災時、お菓子を沢山いただいたので、今後、増加するのではないかと心配されている)
- (6) 心のケアを要する生徒は2学期以後増えてくるであろう
学校が避難所から開放され、平常の授業にもどった頃より心のケアが必要になってくると思う、被災された人々と学校で共生して、自分を押し殺して我慢している生徒が少なからずいることは事実である

VIII 被災地の養護教諭から見て今後の課題

- 1) 学校が地域の保健センター的役割を発揮できるよう、日頃より研鑽を積んでおくこと
- 2) 環境の整備、安全管理(特に危機管理)
2次災害の予防対策(潜在的危険予知)について、考え、行動する習慣を身につけ研修しておくこと
- 3) 伝染病の予防対策
- 4) 震災時の心得をあらゆる機会をとらえて、全校生に教育しておく
- 5) 養護教諭の組織活動としての課題
(残念ながら、今回は組織としての活動が全くなされなかった)
 - (1) 災害発生時は自宅より一番近い学校に出勤し勤務できるよう、配置マップを作成しておく
利点
 - 最もニーズの高い救護活動がすぐできる
 - 交通渋滞の緩和に役立つ
 - 地域の医療機関に精通している
 - 地域住民の状況がよくわかっており、連携しやすい
 - 自宅から近くで勤務できることは、緊急時、家族の連絡、物資特に水の調達、ライフ・ラインの復旧時等に、臨機応変に対処できる等
 - (2) 養護教諭の同僚としてのボランティアネットワークの確立
(看護、保健婦は全国からボランティアが結集し組織的に活動されていた)
○養護教諭は災害時にはニーズの高い職種
の1人である(医師、看護婦、保健婦のように)
○主婦でもある(家族の安全、生活、看護等)
○母親でもある(育児、老人の介護等)
○被災に伴う種々の雑務
自宅の復旧、衣・食・住の確保、公的諸
手続等
○ボランティア、ネットワーク組織案(次
頁参照)(今後のために絶対に必要である)
○私的ボランティア
(これには養護教諭のOBが当たるとよい)
家さがしのインフォメーション、引越
しの手伝い、転居地の諸々の生活情報、
会員の育児、介護、看病、留守番等
 - 公的ボランティア
被災校に常時1~2名の養護教諭を加
配する。それには、県下の養護教諭が1
人1日ずつ専免をとれば充足する。期間
は1~2ヶ月でライフ・ライン、交通が
復旧するまでを目途とする
- (3) 被災しなかった近隣の学校からしてほし
かった援助

ボランティア、ネットワーク組織図(案)



○発生1~2日目に生徒1人がペットボトル1本の水と、おむすび1個を持ちより避難所の学校に配布してほしい(3日目ぐらいから災害対策本部よりの物資がくばられるようになるが、その間が大変困った)

まとめ

一瞬にして、原始時代にタイムスリップして、今までの文化的生活は何であったのかと、いろいろ考えさせられた。生きることは！生活と

は！人間関係とは！自立とは！等々。失ったものも多かったが、得たものも沢山あった。「備えあれば憂いなし」「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」の諺を肝に銘じて、これからいきいき生きていきたいと思う。後をふり向かないで前を向いて、この神戸が安心、活力、魅力のある町に復興するよう祈りつつ、その一番の担い手である高校生が発育発達に障害を被ったり、学力低下により進路が阻害されることのないよう支援し続けたい。

— 資 料 —

本校における地震対策

兵庫県立夢野台高等学校

地震発生時における緊急対策

1. 第1次対策…ぐらっときたら

的確な判断, 的確な指示

不安、恐怖などの心理的動揺が起りパニック状態や混乱がおこる。

教師は沈着、冷静かつ毅然たる態度で生徒を掌握し秩序ある集団行動をとらせる。

※指示例

- 「落ちつけ」「騒ぐな」
- 「大丈夫、静かに」
- 「机の下にもぐれ机の足をもて」
- 「外に出るな」
- 「座布団をかぶれ」

身の安全の確保

地震動（1分間程度）がおさまるまで、あわてて外に飛び出さない。

「机の下にもぐる」「座布団をかぶる」など身の安全を図る。

火気の始末

実験、実習や暖房器具等の火気を使用している時は火気の始末をさせる、特に薬品には転落、転倒によって火災や火傷を引き起こすものもあるので、その保管、管理、点検、整備など平素から万全の対策を立て、細心の注意を払う。

避難口の確保

校舎のゆがみなどによりドアの開閉ができなくなる場合もあるので、教室のドアを開け、避難口を確保する。

2. 第2次対策…揺れがおさまったら！

避難と誘導

- 1) 安全第1に避難誘導する。
 - (1)本部の指示に従って避難誘導する。
※緊急時は、教師の的確な状況判断で！
 - (2)教師が先頭に立ち、避難経路の安全を確認しながら避難誘導する。
 - (3)サンドイッチ方式（教師が先頭と最後尾につく、教師1人の時は委員長）
残留者のないように注意する。
 - (4)階段、廊下、昇降口、玄関、非常口などでは「走らない」「押さない」「しゃべらない」「仲間から離れない」を守らせる。
 - (5)防火ドアやぐり戸は手で押せば簡単に開くことを指示する。
 - (6)窓ガラスの落下、ロッカー等の転倒、倒壊する場合がありますので、頭部を保護する等、安全に十分注意する。
 - (7)恐怖のあまり動けなくなる生徒がでてる場合もあるので、お互い助け合い、励ますなど協力して避難できるようにする。
- 2) 担任は必ず出席簿を携帯して、避難誘導する。又できる限り、生徒連絡簿、トランジスターラジオ、携帯マイク、笛、旗など携行できるよう配慮する。

生徒の掌握

避難場所に到着したら！

- 1) 人員点呼を行い異常の有無を本部に連絡する。
- 2) 無断でクラスから離れないように指示し、本部の指示があるまで待機する。
- 3) 学校が地域の避難場所になるので、生徒の掌握には十分注意する。

応急処置

- 1) 負傷者の応急処置をする。
- 2) 負傷の程度により、校医、近隣の医師に治療を受ける。
又 消防署などに適切な指導助言を受けると共に家庭に連絡する。

情報の入手

- 1) テレビ、ラジオ等を通じて、被害の状況、周辺地域の状況、今後の動向など正しい情報の入手に努める。
- 2) 県・教委及関係機関との連絡を密にして、今後の対策を検討する

3. 第3次対策…次の災害にそなえて

第2次避難場所（広域避難場所 えげ山、ひよどり墓園）への誘導

- 1) 火災、地割れ、津波、山くずれ、がけくずれ、浸水等の第2次災害が考えられる場合、直ちに第2次避難場所へ誘導する。
- 2) 最も安全な経路を選択して避難させる。
出火場所、風向き、津波の速さ、地形、学校の構造や立地条件等を考慮して…
- 3) 途中、人ごみに巻きこまれたり、消火活動、救助活動の邪魔にならないよう教職員の適正配置を図る。

生徒の引き渡し

- 1) 生徒を家族に引き渡す場合、出席簿、連絡簿等を利用し必ず、チェックする。
- 2) 避難誘導の途中では、保護者が迎えにきても原則として引き渡さない。
- 3) 保護者には、どこに避難しているか知らせるため、学校に連絡員を残すか、その旨校門前等に掲示する。

※平常より家族の落ち合う場所を話し合っておく。

Ecological Correlations and Anthropometric Variations in Chinese Youths

Seiji Ohsawa*¹ Cheng - ye, Ji*²

*¹ Institute of Human Living Sciences, Otsuma Women's University, Tokyo, Japan

*² Institute of Child and Adolescent Health, Beijing Medical University, Beijing, China

中国人（漢族）青年の形態の変異と生態学的相関

大澤清二*¹ 季成葉*²

*¹大妻女子大学人間生活科学研究所発達環境研究部門

*²北京医科大学児童青少年衛生研究所

要旨：19世紀以来，生態学的要因と形態との関係が欧米で検討されてきた。しかし，生態学的要因と発育との関係を検討するには扱われる人口集団（人種，民族）が様々であって，それぞれに遺伝的要因が強く関与しているために，気候や地理的条件の影響を論じるには不都合な点があった。本研究では，広大な中国全土に拡散された漢族に限定して，厳密に標本抽出された18歳男女の身長と体重を可能な限り正確に計測し，その統計値をもって当該28地区の代表値となし，それと各地区の中心地点の気候，地理学的変数との相関を検討した。この生態学的相関関係から，形態と年平均気温，年間気温較差，年日照時間や海拔高度，緯度などとの間に有意の関係を認めた。また主因子分析の結果から，この変数群は主として年平均気温と緯度に代表される因子と，海拔高度及び中国大陸に特徴的な西高東低の経度情報による因子の2群に分かたれることが示された。この研究の主たる成果は次の点に尽くされる。中国大陸という極めて多様性に豊んだ地域に生活し，そこで発育成熟した結果としての漢民族集団の形態が，大きな地理的変異をもっており，その変異が生態学的条件によってもたらされていると推察することが可能になったという点である。

Abstracts : The relationship between climatic - geographic features and Chinese Han school children's morphological growth (height and weight) were explored in the present study. There was a total of 5,679 boys and girls aged 18 who participated in this study. Wide variations could be seen not only in their body size, but also in the ecological conditions that participants lived under. Regional correlation analyses showed that in most of the cases both boys and girls' body size significantly correlated with ecological condition of temperature, temperature range, sunshine time, precipitation, frost - free period, as well as altitude, latitude and longitude. By using multivariate factor analysis, two factors were selected and extracted from these ecological and geographic climatic variables, by which two traits of the ecological features in Chinese mainland were reflected. The results of this study were compared with those reported from other continents, and the factors for causing these similarities and dissimilarities were discussed.

Key words : Morphological growth, body size, geographic - climatic feature
Chinese youth.

Introduction

Despite the vast amount of evidence which has been collected on genetic and environmental influence, there are still wide gaps in our understanding of the causes of children's growth variation.^{1,2)} Most literature on physical growth in mainland China focused on the population's ethnic background, nutrition, major and minor illness, and the maternal - child health care. But little attention has been paid to ecological factors that may also strongly affect the variability²² of human growth. Examples of this are geographic location, sunlight, temperature, and many other climate features.^{3,4)} An increasing number of studies concerning human morphological adaptability to different ecological conditions have been reported from Africa, Europe, Middle Eastern, and America.^{3,5)-12)} In many of these studies mentioned above, however, the data were sampled from different ethnic groups. Making it quite difficult to determine whether human anthropometric variations were dominantly controlled by genetic or ecological effects.¹³⁾ In addition these studies included only a few samples from Asia, and revealing little much information on human variation on that continent.

The purpose of this study is to search for the ecological perspective association between Chinese youths' body size and geographic - climatic factors. The subjects will be selected from various population groups widely scattered throughout mainland China. However, all subjects selected belong to the some racial / cultural group, the Chinese Han race.

Materials and Methods

Sampling

The subjects comprised 2,842 boys and 2,837 girls at 18 years of age. They were all secondary school pupils randomly selected from the areas in 28 cities. In each city there were two groups, one of boys and another of girls, and the sample size was between 97 – 104 for each group (see Table 1). Specially, in every city surveyed three or four secondary schools were selected and checked for the official ages (age of official registration) of their students. There after, the subjects in this age group were randomly sampled for this study. The subjects were generally, healthy, and had to submit to stringent physical examinations to make sure that they were not in any way deformed or seriously ill.

The local distribution of these 28 cities are shown in Figure 1 . Among those cities, three (Bijjing, Tianjin and Shanghai) were metropolitan areas and the others were provincial capitals where the population sizes exceeded 650,000¹⁴⁾ In order to minimize the perspective genetic effects, the subjects were all selected from the Han nation. The reason being that there are another 55 racial / cultural groups, the 'Chinese minority races' which account for 5.98% of the Chinese entire population.

In fact, all the samples mentioned above were drawn from the 1985 National Survey on Students' Constitution and Health. The study, which was China's first large - scale national survey on school - children and youths' health, comprised all of the 28 provinces across the mainland China. Altogether there were 984,872 primary school, secondary school and college students ages 7 through 22 , both came from urban and rural areas, sampled in this study. Under the direction of the Chinese National Survey on Students' Constitution and Health (SSCH) Association, each city was appointed to organize a team composed of physicians, paediatricians and technicians. The teams worked simultaneously, following a

uniform programme for organizing and training the team members, carrying out physical examinations and measurements, and constructing local growth norms and references. In order to avoid the seasonal effects on youths' growth velocity, all subjects were measured from April to May in 1985.

Variables and measurement

Height and weight were the anthropometric variables used in this study. They were measured by using the methods and apparatus recommended by Harrison et al.¹⁵⁾ and have been standardized in China since the end of 1960 s.

Weighing was done on platform scales, and the results were recorded to the nearest 0.1kg. The boys were required to wear shorts only, and girls wore shorts and vests.

Table 1 Chinese urban groups included in data set

Group name	Boys				Girls					
	N	Height		Weight		N	Height		Weight	
		Means±S. D.	Means±S. D.	Means±S. D.	Means±S. D.		Means±S. D.	Means±S. D.		
Beijing 北 京	102	172.97±5.15	60.99±4.99	102	161.18±4.40	51.19±5.18				
Tianjin 天 津	102	171.16±4.85	57.60±4.76	100	159.88±4.71	51.10±5.48				
Shijiazhuang 石 家 庄	101	171.57±4.27	59.65±4.90	103	158.30±5.55	50.65±5.33				
Taiyuan 太 原	104	170.74±5.03	56.48±4.76	101	157.65±4.32	49.52±5.38				
Huhehaote 呼 和 浩 特	102	168.87±5.68	57.41±5.35	100	158.23±4.92	51.64±4.35				
Shenyang 瀋 陽	101	171.55±4.99	56.58±5.30	101	159.92±4.46	49.97±4.54				
Changchun 長 春	101	172.27±4.03	57.93±4.84	102	158.24±4.92	49.29±5.17				
Harbin 哈 尔 濱	102	173.00±4.19	61.41±5.37	101	159.78±5.08	49.13±4.03				
Shanghai 上 海	102	173.34±4.77	58.71±5.23	103	160.13±5.10	49.95±5.05				
Nanjing 南 京	102	171.37±4.35	58.83±4.23	101	159.12±4.69	50.22±4.88				
Hangzhou 杭 州	102	171.28±5.67	57.43±5.30	102	159.01±4.57	50.35±5.22				
Hefei 合 肥	104	171.11±5.04	53.68±4.85	102	158.48±4.97	48.44±4.55				
Fuzhou 福 州	100	169.63±5.33	55.50±5.39	103	158.38±4.40	47.95±4.07				
Nanchang 南 昌	102	167.90±4.15	55.50±4.36	101	157.14±4.09	48.90±4.42				
Jinan 济 南	101	173.21±5.08	61.23±4.83	102	159.73±5.67	51.09±5.29				
Zhengzhou 郑 州	101	170.95±4.65	57.25±4.58	100	159.28±5.82	49.51±5.40				
Wuhan 武 汉	102	168.77±5.22	54.95±5.03	102	158.20±5.04	49.64±4.75				
Changsha 长 沙	103	168.74±4.38	56.18±4.61	101	157.71±4.73	50.09±4.30				
Guangzhou 广 州	102	168.99±5.01	54.47±4.83	104	157.74±4.77	47.40±4.69				
Nanning 南 宁	102	166.81±4.34	54.37±4.72	98	155.91±4.90	47.34±4.67				
Chengdu 成 都	100	167.65±4.75	54.09±5.36	101	156.35±4.99	47.06±4.35				
Guiyang 贵 阳	97	167.63±5.26	53.49±5.21	98	155.27±5.35	47.80±5.06				
Kunming 昆 明	101	169.23±4.62	55.59±5.21	102	157.84±5.46	48.12±5.14				
Xian 西 安	102	169.36±5.02	57.01±4.64	101	158.31±4.74	50.00±3.98				
Lanzhou 兰 州	101	170.28±4.88	55.63±4.90	102	158.96±5.24	49.00±4.87				
Xining 西 宁	100	168.09±4.79	53.58±4.88	102	159.12±4.92	49.60±4.67				
Yinchuan 银 川	102	169.90±4.38	55.93±4.07	103	159.14±4.53	50.50±4.39				
Wulumuqi 乌 鲁 木 齐	101	171.00±5.33	56.33±4.97	99	158.83±5.05	49.70±5.32				

Heights were measured against metal column bars, and recorded to the nearest mm. The subjects were required to step on the scale barefoot, straighten the back, to keep the head touching the bar and to look straight forward. The technicians who took these measurements were required to pass a special training course to prove their competence. During the field work, the technicians were required to check the apparatus every day to make sure that the equipment was sensitive and accurate.

Geographic and climatic data

Table 2 displays ecological climatic information in each of the 28 cities researched in the present study. There are three geographical location variables, the altitude, longitude (referred to as east longitude), and latitude (referred to as north latitude). Their values were taken in each city's central point. The climatic data was collected on mean annual temperature, mean annual precipitation, mean annual frost - free period, and mean annual sunshine time. From the data, an additional variable was calculated: Temperature range, the difference between the mean temperature of the hottest and the coldest months. All of this information was obtained from the central meteorological observatory located in each city, and was annually published by the National Bureau of Statistics.¹⁴⁾

Statistical analysis

Descriptive statistics, correlation matrix and principal factor analysis were used in this study. Specially, the interrelationships between anthropometric and geographic - climatic variables were analysed by using the Kendall's tau rather than Pearson's r, because most

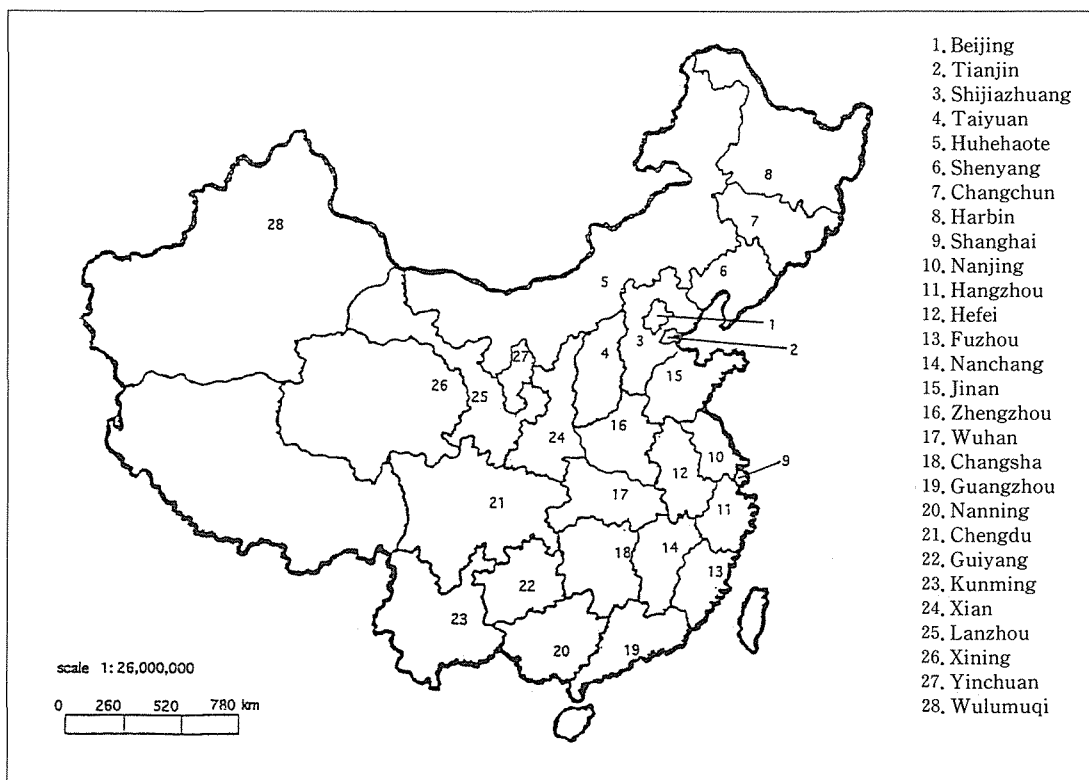


Fig. 1 The geographic distribution of 28 provinces in China

of the geographic - climatic variables weren't the normal distribution. By using Principal factor analysis (and Varimax rotation), factors were extracted in order to show the different traits of ecological features. All the statistical analyses were carried out by using the SPSS. x.

Results

Table 1 presents means of height and weight in each of the 56 groups of subjects. Both boys and girls show great growth variations in body size. The highest mean height of 18-year-old boys, for example, was in Shanghai (173.34cm) and for girls Beijing (161.18cm). While Nanning boys and Guiyang girls were 6.53 and 5.91cm shorter than the tallest boys and girls respectively. The mean body weight of Kumming girls was 3.52kg lighter than

Table 2 Chinese urban groups included in data set

City name		Temperature	Temp. range	Prec.	Sunshine time	Lat.	Long.	Alti.	Fros. period
Beijing	北 京	11.5	30.2	644.2	2780.2	39.93	116.33	44	166
Tianjin	天 津	12.2	30.2	569.9	2724.4	39.40	117.38	10	200
Shijiazhuang	石 家 庄	12.9	29.7	549.9	2737.8	37.88	114.20	64	210
Taiyuan	太 原	9.5	27.6	459.5	2675.8	37.78	112.55	800	202
Huhehaote	呼 和 浩 特	5.8	35.0	417.5	2970.5	40.82	111.68	1050	150
Shenyang	瀋 陽	7.8	35.1	734.5	2574.0	41.80	123.38	45	159
Changchun	長 春	4.9	39.2	593.8	2643.5	43.92	125.30	195	145
Harbin	哈 尔 濱	3.6	41.8	523.3	2641.0	45.70	126.67	148	140
Shanghai	上 海	15.7	21.9	1123.7	2014.0	31.23	121.48	4	230
Nanjing	南 京	15.3	22.6	1031.3	2155.2	32.05	118.78	120	220
Hangzhou	杭 州	16.2	21.6	1398.9	1903.9	29.92	119.55	10	250
Hefei	合 肥	15.7	22.2	988.4	2163.3	31.88	117.25	30	245
Fuzhou	福 州	19.6	16.9	1343.7	1848.2	26.07	119.28	30	326
Nanchang	南 昌	17.5	28.1	1596.4	1903.9	28.40	116.00	60	296
Jinan	济 南	14.2	28.1	685.0	2737.3	37.53	116.97	40	231
Zhengzhou	鄭 州	14.2	22.5	640.9	2385.3	34.75	113.67	95	230
Wuhan	武 漢	16.3	22.2	1204.5	2058.4	30.67	114.38	45	243
Changsha	長 沙	17.2	21.1	1396.1	1677.1	28.25	113.07	60	260
Guangzhou	広 州	21.8	12.6	1694.1	1906.0	23.45	113.57	30	365
Nanning	南 寧	21.6	12.8	1300.6	1827.3	22.83	108.25	76	362
Chengdu	成 都	16.2	17.9	947.0	1228.3	30.65	104.08	500	300
Guiyang	貴 陽	15.3	15.5	1174.7	1371.0	26.55	107.00	1251	270
Kunming	昆 明	14.7	11.5	1006.5	2470.3	25.38	102.92	1894	244
Xian	西 安	13.3	25.4	580.2	2038.2	34.25	108.93	450	200
Lanzhou	蘭 州	9.1	26.8	327.7	2607.6	36.78	103.50	1520	180
Xining	西 寧	5.7	22.2	368.2	2762.0	36.62	101.77	2275	100
Yinchuan	銀 川	8.5	29.2	202.8	3039.6	38.52	106.10	1150	159
Wulumuqi	ウ ル ム チ	5.7	35.9	277.6	2733.6	43.72	87.78	900	114

the weight of Huhehaote girls, while the difference in weight between Harbing and Guiyang boys was even as great as 7.92kg .

Table 2 displays the wide geographical - climatic variations existing among the 28 cities of mainland China, whereas Table 3 shows several patterns of correlation among geographical and climatic variables. For example, temperature positively correlates with precipitation; hotter areas are wetter. Sunshine time negatively correlates with temperature, but positively correlates with temperature range; colder areas not only have larger differences in temperature during a year, but also have a lot of sunshine time. Significant correlations can be found between latitude and many climatic variables; those with temperature and precipitation are negative, but those with temperature range and

Table 3 Kendall's tau correlation matrix of ecological variables

Variable	Temperature	Temp. range	Precipitation	Sunshine time	Lat.	Long.	Alti.	Fros. period
Mean annual temperature (°C)	1.000							
Temperature range (°C)	-0.649***	1.000						
Mean annual precipitation (ml)	0.716***	-0.461**	1.000					
Mean annual sunshine time (hour)	-0.571**	0.512**	-0.596***	1.000				
North latitude (°)	-0.768***	0.859***	-0.580***	0.584***	1.000			
East longitude (°)	0.051	0.216	0.228*	-0.029	0.151	1.000		
Altitude (meter)	-0.325*	0.056	-0.432**	0.190	0.109	-0.576**	1.000	
Mean annual frost-free period (day)	0.856***	-0.679***	0.651***	-0.606***	-0.750***	-0.003	-0.286*	1.000

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

Table 4 Kendall's tau correlations between geographic - climatic variables and youths' height and weight

Variable	Temperature	Temp. range	Precipitation	Sunshine time	Lat.	Long.	Alti.	Fros. period
Boys								
Height	-0.280*	0.407**	-0.148	0.336*	0.432**	0.466**	-0.304*	-0.305*
Weight	-0.283*	0.427**	-0.156	0.329*	0.414**	0.400**	-0.222*	-0.319*
Girls								
Height	-0.315*	0.336*	-0.220*	0.377**	0.408**	0.310*	-0.227*	-0.388**
Weight	-0.280*	0.386**	-0.254*	0.464**	0.400**	0.116	-0.117	-0.375**

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

sunshine time are positive. For the longitude, however, only significant correlation is found between it and altitude. This fact obviously indicates that the climatic variables used here vary more in the north - south direction than in the east - west direction, whereas for altitude, the opposite can be observed. Not unexpectedly, annual frost - free periods show positive correlations with temperature and precipitation, and show significantly negative correlations with temperature range, sunshine time, and latitude. These correlation patterns must be taken into consideration when interpreting the different associations of the variables with Chinese youths' body size.

Table 4 presents the correlations between body size and geographic - climatic variables. For both boys and girls, the most significantly positive correlations are found between latitude and body size, indicating that as degrees of latitude increase (from the north to the south), height and weight decrease. Significantly positive correlations can be found between body size (both in height and weight) and sunshine time, indicating the advantageous effect of sunlight on children's growth. On the other hand, both height and weight negatively correlated with temperature, but positively correlated with temperature range. These phenomena also could be interpreted in terms of the advantages of having a large body size with a relatively small body surface area (to the volume) in cold and varying climates. A comparison of correlations indicated that there are two major differences between the sexes. First, only significantly negative correlations can be found between girls' body size and precipitation. Secondly, both boys' height and weight show significantly positive correlations with longitude and negative correlations with altitude. But for girls, only significant correlations, though somewhat lower than those of boys, are found between height and longitude as well as height and precipitation.

Table 5 shows the two factors extracted from these geographic - climatic variables. Longitude and altitude, with a closed correlation, compose a factor, while the other variables compose another. These factors represent two traits of geographic - climatic

Table 5 Factors extracted from geographic-climatic variables

Variables	Rotated loadings of variables	
	Factor I	Factor II
Mean annual temperature	-0.948	0.191
Temperature range	0.906	0.305
Mean annual precipitation	-0.873	0.347
Mean annual sunshine time	0.850	-0.107
Latitude	-0.979	0.107
Longitude	0.055	0.904
Altitude	0.203	-0.912
Mean annual frost-free period	-0.936	0.202
Eigen values	5.167	1.879
% of total variance explained	64.591%	23.490%

features. Their eigen values are 5.167 and 1.879, which can explain 64.59% and 23.49% of the total variance, respectively.

Discussion

Early in middle of the 19 century, scientists noticed the effects of ecological factors on human morphological variation. In terms of the geographic traits, Newman⁸⁾, Marshall³⁾ and Salzano and Callegari - Jacques¹³⁾ noted that population mean height tends to decrease from the north to south of the European and South American continents. Roberts⁶⁾ described the relative linear physique, which commonly existed even in the well - nourished children, in some South American Indian groups, some African ethnics living in the tropic, as well as the Chinese living in Southeast Asia. Tanner¹⁶⁾ noticed the high altitude of the Peruvian altiplano (4,000 meters) which induced larger chest circumference and bigger lungs in Quechuan children growing there, unlike those Quechuan children living near the sea (costal area). However, in order to explore the conclusions that can be drawn from the observations above, the effects of another ecological trait, the climatic trait, must be taken into consideration. Eveleth and Tanner¹⁾ suggests that in temperate zones children tend to growth faster in height in the spring and slower in the autumn, but in the tropics seasonal variation is governed more by dry and wet period and the varying availability of foods. From the surveys on the North American Indians, Newman¹⁷⁾ found significantly negative correlation between height and the mean temperature of the coldest month while on a world - wide scale⁷⁾ and for Europe and the Mediterranean,¹⁸⁾ mean height negatively correlated with mean annual temperature. These negative correlations indicate the advantages of a large body size with its relatively small body surface in cold climates. On the other hand, in sub - Saharan regions,¹⁹⁾ height, sitting height and many other anthropometric measures are positively correlated with climatic features. The strongest correlation is found between height and precipitation, and relative sitting height (sitting height / height) and temperature. These results were interpreted in terms of the advantage of a tall, thin body built in the hot and dry climatic environment. Whereas the small body size was conducive to the populations living in rain forests, because their relatively large body surface (usually reflected by the surface - area - to - volume ratio) facilitated heat loss in a hot and humid environment.²⁰⁾²¹⁾ In conclusion, although there are different features existing among different ethnic group living on various continents, the overall results shown by these studies indicate that all of these populations follow 'zoological rules'. These rules, which were firstly founded by Bergmann²²⁾ are specifically related to the varying tendency of human's body size and shape with varying temperature conditions: the larger the ratio of body surface to body volume, the larger the radiative surface to heat - producing mass; the greater the caloric loss by convection or radiation, the greater the skin area (body surface) for evaporation, and vice versa.²²⁾

The results discovered from the present study are quite similar with those reported from other continents. These results are also well in concordance with our previous studies either on the geographic variations of Chinese urban and rural children aged 7²³⁾ or the dissimilarities of adolescent growth in Chinese Han girls.²⁴⁾ As can be seen from Table 4, the correlations between Chinese youth's body size and geographic - climatic variables are in most cases significant. The coefficients seemed not to be so high, both in boys and girls, just because they were performed by using the Knedall's tau correlation. Generally

speaking, in those areas situated in the colder areas of the north which have large seasonal change and plentiful sunlight, boys and girls are usually of greater body size than those living in the warmer southern areas with relatively small seasonal change and plenty of precipitation; while in the plain and coastal areas of northeast China, children not only have advanced adolescent growth, but also are superior in body size at successive ages to those living in the mountainous areas situated in the western inland China. Just like those have concluded by Tanner,²⁵⁾ "The differences in growth have indeed been stimulated in response to the different ecological conditions in which each group evolved, but they also arise from selections over many generations rather than from the immediate effect in individual children".

As it can be seen from Table 3, correlations between geographic-climatic variables themselves are in most cases significant, analysis was used in this study. The two factors, Factor I and II, which were extracted from eight variables were thought to reflect the climatic traits and geographic traits of Chinese urban youths' ecological circumstances, respectively. Not unexpectedly, latitude, a geographic variable, also joined with climatic variables to compose Factor I because of their closed associations. That is also why Factor II plays a more important role than Factor I in explaining ecological influence for both boys' and girls' height and weight. Nevertheless, the results of present study reveal that both geographic and climatic variables play strong roles in effecting on Chinese urban youth's body size.

"It is well known that a portion of the large differences between populations is genetic in origin and another portion, environmental"(Tanner)²⁵⁾ Some scientists suggested that anthropometrics are more affected by environment are than the genetic traits.¹³⁾ Because their observations showed that in both anthropometric and genetic variation there was evidence for north-south clines. But our previous studies show a contrary trait, because the dissimilarities on children's body size and shape among various Chinese racial/cultural groups are much larger than those among a same group.²³⁾²⁶⁾ Thus in the present study, all the subjects were selected from the Han race in order to minimize the genetic interference. However, in a developing country such as China, the environmental factors, especially those concerning about the socioeconomic status, play a much larger portion in the control of children's growth than in the developed country. For example, most of the China's relatively developed cities, such as Beijing, Shanghai and Tianjin, are situated along the coastal areas and north China. The socioeconomic status there are much higher than those of the inland cities such as Xining, Lanzhou and Yinchuan. The stronger economy and better living conditions, plus the relative abundance of sunlight and low altitude, etc., certainly create a circumstance favouring children's growth there. In another words, the possibility that their large body size may be the results of nutritional and other social factors cannot be dismissed. In order to obtain a better picture of Chinese youth's living environment, a lot of further research will be required.

Acknowledgments

The authors are grateful for Dr. C. G. Nicholas Mascie-Taylor, Head of the Department of Biological Anthropology, University of Cambridge, for his kind help and advice.

References:

- 1) Eveleth, P. B., and J. M. Tanner, *Worldwide Variation in Human Growth*. 2 nd ed., Cambridge: Cambridge University Press , 1990
- 2) Chinese National SSCH Association (ed.): *The 1985 th National Survey on Students Constitution and Health*. People's Educational Publication, Beijing (in Chinese) , 1987
- 3) Marshall, W. A., *Geographic and ethnic variations in human growth*. *British Medical Bulletin*, 37(3):273–280, 1981
- 4) Rona, R. J., *Genetic and Environmental factors in the control of growth in childhood*. *British Medical Bulletin*, 37(3) : 265–272, 1981
- 5) Roberts, D. F., *Body weight, race and climate*. *American Journal of Physiological Anthropology*, 11 : 533–538, 1953
- 6) Roberts, D. F., *Race, genetics and growth*. *Journal of Biosocial Science Science Suppl.*, 14 : 43–67, 1969
- 7) Roberts, D. F., *Climate and Human Variability*. 2 nd ed., London: Cummings Press, 1978
- 8) Newman, M. T., *The application of ecological rules to the racial anthropology of the aboriginal New World*. *American Anthropology*, 55 : 311–327, 1953
- 9) Schreider, E., *Physiological anthropology and climatic variations*. In: *Environmental Physiology and Physiology in Air Conditions*. Proceedings of the Lucknow Symposium, UNESCO, Paris , 1963
- 10) Schreider, E., *Morphological variations and climatic differences*. *Journal of Human Evolution*, 4 : 529–539, 1975
- 11) Hiernaux, J., and A. Froment, *The correlations between anthropological and climatic variables in Sub – Saharan Africa: Revised estimates*. *Human Biology*, 48 : 757–767, 1976
- 12) Stinson, S., *Variation in body size and shape among south American Indians*. *American Journal of Human Biology* , 2(1) : 37–51, 1990
- 13) Salzano, F. M., S. M. Callegari - Jacques, *South American Indians*. New York: The Clarendon Press, Oxford University Press , 1988
- 14) Chinese National Bureau of Statistics, *Statistical Yearbook of China in 1986*. Chinese Statistical Publications , 1986
- 15) Harrison, G. A., J. S. Weiner, J. M. Tanner, and N. A. Barnicot, *Human Biology: An Introduction to Human Evolution, Variation, Growth and Ecology*, 2 nd, ed, 1977, Oxford: Clarendon Press , 1977
- 16) Tanner, J. M., *Foetus into Man: Physical Growth from Conception to Maturity*. London: Open Books Publishing Ltd , 1978
- 17) Newman, M. T., *Adaptations in the physique of American aborigines to nutritional factors*. *Human Biology*, 32 : 288–313, 1960
- 18) Crognier, E., *Climate and anthropometric variations in Europe and the Mediterranean area*. *Annals of Human Biology* , 8(2) : 99–107, 1981
- 19) Hiernaux, J., P. Rudan, and A. Brsmbsti, *Climate and the weight / height relationship in Sub – Saharan Africa*. *Annals of Human Biology* , 2(1) : 3–12, 1975
- 20) Villers, H. de, *A study of morphological variables in urban and rural Venda male populations*. In Vorster, D. j. M., (ed.), *Human Biology of Environmental Change*. London: International Biological Programme , 110–113, 1972
- 21) Mcgurk, H., *Ecological Factors in Human Development*. New York: North - Holland Publishing Company , 1977
- 22) Bergmann, C., *Ueber die Verhältnisse der Wärmeökonomie des Thiere zu ihrer Grösse*.

Göttinger Studien , 595–708, 1847

- 23) Ji, C. Y., S. Ohsawa, and N. Nixijima, The geographic clustering on body of Chinese children aged 7years. *Annals of Human Biology* , 18(2) : 137–153, 1991
- 24) Ji, C. Y., G. S. Ye, and J. Yuan, The dissimilarities of adolescent growth patterns and events in Chinese Han girls. *Chinese Acta of Physical Anthropology* , 24(3) : 157–162. (in Chinese), 1990
- 25) Tanner, J. M., Growth as a mirror of the condition of society; secular trends and class distinctions. *Acta Paediatrica, Japan* , 29 : 96–103, 1987
- 26) Ohsawa, S., and C. Y. Ji, Comparative study on growth of minority race in China. *Journal of Anthropological Society of Nippon* , 98 : 215, (in Japanese), 1990

(Received, Jul , 3, 1995 ; Accepted, Aug , 15, 1995)

Address for correspondence: Dr. Seiji Ohsawa, Institute of Human Living Sciences,
Otsuma Women's University, 12, Sanbancho, Chiyoda, Tokyo, 102, Japan.

報 告

外国語指導外国人講師の滞在中受療状況
—静岡県—

大河内 由 香*¹ 田 中 諭*²
長谷川 晶 子*³ Eric Laverdure*³

*¹東京医科歯科大学 難治疾患研究所 社会医学研究部門(疫学)

*²浜松医科大学 公衆衛生学教室 *³静岡県教育委員会高校教育課

A Report of a Survey on Assistant Language Teachers (ALTs) Staying
in Japan who Received Medical Treatment.
—Shizuoka Prefecture—

Yuka Ohkouchi*¹ Satoshi Tanaka*²
Akiko Hasegawa*² Eric Laverdure*³

*¹Medical Research Institute Tokyo Medical and Dental University

*²Department of Public Health, Hamamatsu University School of Medicine

*³High School Education Division, The Shizuoka Prefecture Board of Education.

A survey on the health problems and the complains of the health care system in Japan of 47 Assistant Language Teachers (ALTs) living in Shizuoka Prefecture was conducted in the first semester of 1994 academic year. Their nationalities (by number) were : U. S. (23), England (13), Canada (5), New Zealand (4), Ireland (1) and unknown (1). The average length of stay in Japan was 1.6 years.

The main results of the survey are as follows :

- (1) Thirty nine of the respondents had been sick while in Japan.
- (2) Twenty four suffered from upper and lower respiratory diseases. This was the most frequent complaint.
- (3) Thirty four (72.3%) had visited medical clinics. Three of them needed admission with surgical problems.
- (4) Their problems experienced when visiting medical clinics were (a) language problems (41.2%), (b) lack of informed-consent (32.4%), (c) lack of privacy (17.7%), (d) lower Japanese medical standards (14.7%), (e) no appointment system (5.9%) and (f) no separation of pharmacy from medical practice.
- (5) The first person consulted on getting sick was a supervisor, someone other than a colleague, another ALT or a Board of Education Staff member in that order.
- (6) 21.3% were dissatisfied with the treatment received. Among the complaints were (a) lack of medical knowledge of doctors, (b) excess treatment, (c) over prescription, (d) no explanation; all of which were consistent with Japanese complaints.
- (7) 52.9% of the doctors, 61.8% of nurses and 55.9% of the clerks were considered unreliable.
- (8) 85.1% of the them were satisfied with the present Japanese health insurance system.
- (9) 53.2% stated they were not in good health.
- (10) 68.1% felt Japan more stressful than their countries.
- (11) 87.2% were paying attention to exercise and food intake and/or vitamin pill

supplementation in their daily lives to promote health.

(12) After coming to Japan, two (4.3%) increased their smoking and twenty two (46.8%) increased their alcohol intake. The main cause of increase alcohol intake was they had attend drinking dinner parties.

Key words : Assistant Language Teacher (ALT), health problems, Japanese medical services

外国語指導外国人講師, 健康問題, 日本の医療制度

I. 緒 言

Assistant Language Teacher (以下 ALT と略す) は, 外務省, 文部省, 自治省及び地方公共団体 (都道府県等) の協力により「語学指導等を行う外国青年招致事業」(JET プログラム) の一事業として来日している外国語指導外国人講師である。JET プログラムは, 日本における外国語教育の充実を図るとともに, 青年交流による地域レベルでの国際交流の発展を図ることを通じて, わが国と諸外国との相互理解を増進し, もってわが国の国際化の推進に資することを目的として1987年に開始された。

ALT の選抜方法は在外公館 (日本大使館または日本領事館) で第一次書類審査合格者に対し, 第二次審査で面接を行う。第一次書類審査では, 簡単な健康状況自己報告書を添付し, 第二次審査合格後, 医師署名の正式な健康診断書を提出することになっている。後者の健康診断書には, 一般的な現症及び既往症, 胸部 X 線写真の所見, 血液, 尿の病理生化学的検査所見, 精神疾患の有無まで詳細に記載されている。

今回我々は平成6年度に静岡県に在職した全 ALT 107人を対象に, かつて ALT の健康に関する調査報告がなされていないこと, また, 筆者等が日常の診療を通じて, ALT が日本の医療に対し, 懐疑的になっていることを感じ, ALT の不満な点を把握し, 改善策を検討する目的で本調査を行ったので以下に報告する。

II. 対 象

調査対象は, 平成6年度第1学期間に静岡県

に勤務した ALT 107人 (男性50人 [46.7%], 女性57人 [53.3%]) で, 雇用先内訳は県教育委員会89人 (83.2%), 市町村教育委員会13人 (12.1%), 私立学校5人 (4.7%) であった。

アンケートに回答した47人を研究対象とし, 研究対象の年齢範囲は22~30歳で, 平均年齢は 25.3 ± 2.1 歳で, 日本における滞在期間は1~3年, 平均在日期間は1.6年であった。性別は男性17人 (36.2%), 女性30人 (63.8%) であった。出身国籍は米国23人 (48.9%), 英国13人 (27.7%), カナダ5人 (10.6%) ニュージーランド4人 (8.5%), アイルランド1人 (2.1%), 不明1人 (2.1%) であった。

なお, ALT の収入は月額一律30万円で, 最長3年まで継続契約が可能であるが, 給与は不変である。住居は職員住宅か民間アパート (大体広さ2DK) であり, 勤務場所および常駐場所は静岡県下の公立私立の中学校, 高校, 教育事務所で, 勤務時間は1日7時間である。また ALT の管理責任者は各学校の校長および静岡県教育委員会である。

III. 方 法

前記の対象者に対して, 日本における健康状態や受診状況, 日本の医療に対する疑問や問題点を問うアンケートを英語で作成した (図1)。

アンケートの回答方法は原則として多肢選択式 (複数回答可) を用いたが, 設問ごとに ALT が自由意見を記述できるよう, 自由回答欄をも設けた。

アンケートの回収方法は, 全 ALT に平成6年6月3日にアンケート用紙を郵送し, 同年7月

図1 ALT に対する健康意識調査項目

- 1 Gender:(M / F)
- 2 Age:
- 3 Nationality:
- 4 Have you ever been ill after coming to Japan? (Yes / No)
- 5 On first becoming ill who did you consult first?
 - a The Prefecture Board of Education
 - b Your supervisor at your school / office c Other ALTs d Other
 - e No one I went straight to the doctor on my own
 - f No one and I did nothing about it
- 6 If at the time of consultation there was a problem, what was it?
 - a The standard of medical service b The language
 - c A lack of information d A lack of privacy
 - e The lack of an appointment system
 - f The lack of a dispensary separate from the medical practice
 - g Other
- 7 Have you seen a doctor since coming to Japan? (Yes / No)
 - a How many times?
 - b Did anyone accompany you? If so, who?
 - c What kind of symptoms were you suffering from?
- 8 Have you ever been hospitalized in Japan?
 - a If so, for how long?
- 9 If you visited a doctor in Japan how would you describe the attitude of the doctor?
 - a Hospitable b Unfriendly c Helpful d Unhelpful e Other
- 10 Similarly how would you describe the attitude of the nurses?
 - a Hospitable b Unfriendly c Helpful d Unhelpful e Other
- 11 Similarly how would you describe the attitude of receptionist?
 - a Hospitable b Unfriendly c Helpful d Unhelpful e Other
- 12 With regards to treatment you received were you;
 - a Terribly dissatisfied b Dissatisfied c Satisfied d Very satisfied
- 13 Are you satisfied with your health insurance coverage? (Yes / No)
 - a If no, what causes dissatisfaction?
- 14 What do you think of the medical expenses in Japan?
 - a Expensive b Reasonable c Inexpensive
- 15 If you suffer from any medical problems in Japan do you think any of the following might be the causes;
 - a The climate b Your eating habits c Your housing conditions
 - d Your working conditions e Something else
- 16 Are you suffering from any health problems right now? (Yes / No)
- 17 At the moment do you consciously do anything for health reasons? (Yes / No)
- 18 Do you believe you suffer from "stress"?
 - a Yes very much b Yes just a little c Yes, but no more than in my home country d No not at all
- 19 Do you think any of the following cause the stress?
 - a Language problem b Daily customs c A lack of friends d Work
 - e Food f Shopping g Different ways of thinking h Being treated as a foreigner i Others
- 20 Since coming to Japan
 - a Have you taken up smoking? b Have you stopped smoking?
 - c Do you smoke more? d Do you smoke less?
 - e There has been no change.
- 21 Since coming to Japan
 - a Have you taken up drinking alcohol? b Have you stopped drinking alcohol?
 - c Do you drink more? d Do you drink less? e There has been no change.
- 22 If you have any other opinions about the Japanese medical service, please let us know.

30日迄に返送してもらった。回収数は47通（回収率は43.9%）であった。なお、研究対象が少ないため、性差による分析は行わなかった。

Ⅳ. 結 果

① ALT の罹患状態

日本滞在中に病気にかかったことがあるものが39人（83.0%）、病気にかかったことがないものは8人（17.0%）であった。

疾患の内訳は、感冒及び上下気道感染症に含まれると考えられるもの（インフルエンザ、扁桃腺炎、肺炎、感冒性胃腸炎を含む）24（51.1%）で最も多く、次いで外傷7（14.9%）、発疹5（10.6%）、尿路感染症4（8.5%）、婦人科疾患4（8.5%）、耳鼻咽喉科疾患2（4.3%）、詳細不明のアレルギー性疾患2（4.3%）であった（表1）。約半数以上が上下気道感染症であった。

② ALT の受診入院状況

罹患者のうち、在日中に受診したものは34人（72.3%）、受診しなかったものは13人（27.7%）で、7割以上のALTが日本の医療を實際体験していた。表2に受診者の受診回数を示した。受診者34人の受診回数は、1回から10回で、一人平均3.1回であった。受診者の68.8%、22人が3回以内の通院回数であった。

入院歴があるものは3人（6.4%）で入院疾患（入院日数）は、鼠蹊ヘルニア（6日）、スポーツ外傷（4日）、膝蓋骨骨折（1日）と全て外科的疾患であった。

③ 受診時、入院時の問題点

表3は受診者が指摘した問題点である。受診経験者34人があげた問題点は、「言葉」14（41.2%）、「説明不足」11人（32.4%）、「プライバシー欠如」6人（17.7%）、「低医療水準」5人（14.7%）、「予約制なし」2人（5.9%）、「医薬分業なし」1人（2.9%）であった。もっとも大きな問題は「言葉」であった。

「プライバシー欠如」の例としては、日本の診療室のカーテン1枚、薄いドア1枚という構造上の問題も指摘されてはいたが、また医師が患者に無断で上司に病状を伝えることが、医師

のモラルの低さとして受け取られていた。

また、疾病時の相談相手については、上位から、「上司」13人（38.2%）、「ALT以外の人」9人（26.5%）、「他のALT」7人（14.9%）、「直接病院へ」3人（8.8%）、「教育委員会職員」1人（2.9%）、「相談相手なし」4人（11.8%）であった。

④ 医療スタッフの印象

表1 ALTの罹った疾病とその率

疾 患 名	例 数	%
上下気道感染症	24	51.1
外傷	7	14.9
発疹	5	10.6
尿路感染症	4	8.5
婦人科疾患	4	8.5
耳鼻咽喉科疾患	2	4.3
詳細不明のアレルギー疾患	2	4.3

表2 ALTの受診回数

回 数	人 数	累積人数	累 積 %
1	9	9	28.1
2	7	16	50.0
3	6	22	68.6
4	3	25	78.1
5	3	28	87.5
6回以上	4	32	100.0

表3 受診時の問題点

問題点	人 数	%
言葉	14	41.2
説明不足	11	32.4
プライバシー欠如	6	17.7
低医療水準	5	14.7
予約制なし	2	5.9
医薬分業なし	1	2.9

受診者34人について受診時の医療関係者の印象を表4にまとめて示した。

a) 医師について

「親切」18人 (52.9%)、「不親切」0人 (0%)、「頼りになる」22人 (64.7%)、「頼りにならない」0人 (0%)、「その他」5人 (14.7%)であった。「その他」の内訳は、「英語力不足」、「説明不足」、「セクシャルハラスメント」であった。

b) 看護婦について

「親切」21人 (61.8%)、「不親切」0人 (0%)、「頼りになる」21人 (61.8%)、「頼りにならない」1人 (2.9%)、「その他」3人 (8.8%)であった。「その他」の内訳は、「処置の荒さ」、「日本語ができないことに対する咎め」、「婦人科内診で不必要と思われる複数の看護婦の立会い」であった。

c) 事務員について

「親切」15人 (44.1%)、「不親切」3人 (8.8%)、「頼りになる」19人 (55.9%)、「頼りにならない」1人 (2.9%)、「その他」3人 (8.8%)であった。「その他」の内訳は、「事務的」、「言葉の問題による意志疎通困難」、「外人に対して過敏な対応」であった。

以上のことから、ALTは医療従事者全般に関しては言葉の問題と同時に、「その他」の内訳から、対応の仕方に悪い印象を持ったようである。

⑤治療に対する満足度

受診者の医療に対する満足度は、「大変満足した」4人 (11.8%)、「満足」23人 (67.6%)、「不満足」7人 (20.6%)であった。約8割のものが「治療」に満足していた。「不満」の理由は、「医師の知識不足」、「過剰投薬」、「説明不足」、「レントゲン被曝予防の不備」であった。

⑥日本の医療費について

ALTは各派遣された学校の教職員と同様の健康保険制度を受けている。

日本の保険制度については「満足」40人 (85.1%)、「不満足」5人 (10.6%)、「無回答」2人 (4.3%)であった。

日本の医療費については、「高い」15人 (31.9%)、「適当」14人 (29.8%)、「安い」12人 (25.5%)、

「無回答」6人 (12.8%)であった。表5に日本の医療費に関する印象を国籍別に表示した。国家医療制度が比較的整備されている英国国籍のものは「高い」と感じている一方、米国国籍のものは「安い」と感じているようであった。

⑦ALTの現在の体調

現在体調の不調を訴えてるいるALTは25人

表4 医療スタッフに対する印象

印象	医師	看護婦	事務員
親切	18 52.9	21 61.8	15 44.1
不親切	0 0.0	0 0.0	3 8.8
頼りになる	22 64.7	21 61.8	19 55.9
頼りにならない	0 0.0	1 2.9	1 2.9
その他	5 14.7	3 8.8	3 8.8

(上段の数値は人数, 下段の数値は%)

表5 国籍別日本の医療費の印象

国籍	高い	適当	安い
米国	5 33.3	6 42.9	10 83.3
英国	5 33.3	5 35.7	1 8.3
ニュージーランド	2 13.3	2 14.2	0 0.0
カナダ	2 13.3	1 7.1	0 0.0
アイルランド	1 6.7	0 0.0	0 0.0
不明	0 0.0	0 0.0	1 8.3
(計)	15 100.0	14 100.0	12 100.0

(上段の数値は人数, 下段の数値は%)

(53.2%)であった。その原因としては、「気候」、「食生活」がそれぞれ13人 (52.0%)、「ストレス」9人 (36.0%)、「労働条件」が8人 (32.0%)、「住居環境」7人 (28.0%)があげられていた。半数以上がその原因を「気候」及び「食生活」としていた。

⑨自主的な健康維持行動

39人 (83.0%)が、自主的に何らかの健康維持行動を実施しており、その実施内容は、上位から「運動」34人 (87.2%)、「食生活」16人 (55.2%)、「ビタミン剤の服用」13人 (33.3%)であった。

⑩ALTのストレスと喫煙飲酒習慣

a) ストレスの自覚

ストレスを自覚している程度は、「大変ストレスを感じる」7人 (14.9%)、「少しストレスを感じる」25人 (53.2%)、「母国にいるのと同程度」14人 (29.8%)、「全くなし」2人 (4.3%)であった。即ち、32人 (68.1%)が自国にいるときよりもストレスを感じていた。

表6にストレスの内容を示した。ストレスの原因としては、上位より「言葉の問題」、「外人として扱われること」それぞれ35人 (74.5%)、「仕事」26人 (55.3%)、「考え方の違い」23人 (48.9%)、「日常習慣の違い」14人 (29.8%)、「友人がいない」12人 (25.5%)、「食生活の違い」9人 (19.1%)、「買い物」5人 (10.6%)、「その他」8人 (17.0%)であった。その他の内訳は、「親しい人と離れて暮らしている」、「ホームシック」であった。

b) ALTの喫煙習慣

来日後、喫煙習慣ができたものが2人 (4.3%)おり、来日前から喫煙習慣があったものは2人 (4.3%)で、内1人は来日後禁煙しており、他の1人も喫煙量が減少した。他の43人 (91.5%)は喫煙習慣がなかった。

c) ALTの飲酒習慣

来日後飲酒するようになったもの、来日後禁酒したものが各々1人 (2.1%)であった。

来日後の飲酒量の変化は、「増加した」22人 (46.8%)、「変化なし」17人 (36.2%)、「減少

した」5人 (10.6%)、「無回答」3人 (6.4%)であった。

約半数のALTが、来日後飲酒量が増加していることは注目に値する。飲酒量が増加した理由を表7に示す。上位より「宴会、付き合い、日本の習慣」16人 (72.7%)、「ストレス解消」2人 (9.1%)、「ほかに何もすることがない」1人 (4.6%)、「無回答」3人 (13.6%)であった。自由記載欄の中に「宴会で酒、タバコを強制される」、「日本の社会では、宴会以外に親しくなる方法がない」、「ストレス発散の手段が飲酒だけ」という意見があった。

⑩日本の医療全般に関する自由記載

自由記載の興味ある意見を表8にまとめた。

V. 考 察

1. アンケート回収率について

本調査の回収率は、49.3%と低率であったが、

表6 ストレスの原因

原 因	人 数	%
言葉の問題	35	74.5
外人として扱われること	35	74.5
仕事	26	55.3
考え方	23	48.9
日常習慣	14	29.8
友人がいない	12	25.5
食生活	9	19.1
買い物	5	10.6
その他	8	17.0

表7 来日後飲酒量の増加した理由

理 由	人 数	%
宴会・付き合い・日本の習慣	16	72.7
ストレス解消	2	9.1
他にすることが何も無い	1	4.6
無回答	3	13.6

(%は飲酒量の増加した22人中の割合)

その理由は、アンケート実施期が6月であり、ALTの帰国時期と重なったことが主因と考えられる。また彼らにとって、健康問題が興味あるテーマでなかったとも考えられる。あるいは、アンケートそのものが魅力あるものではなかったとも考えられる。再度このような調査を行う際には、回収率の高いアンケートの内容・形式・方法について改善する必要がある。

2. 罹患, 受診, 入院状況について

何らかの疾患にかかったことのあるALTの割合は59.6%であった。また、現在体調の不調を訴えているALTは53.2%であった。日本の同年代の有訴率¹⁾男196.8, 女253.8(人口千対)と比較すると、ALTの有訴率は高かった。

本調査では、交通事故による受診者が皆無であった。これは、静岡県内のALTは各所属長(各校長)の許可がなければ、自動車の運転が許可されないことが要因の一つとなっているのであろう。

3. 受診時, 入院時の問題点について

(1) 言葉の問題について

ALTにとって、医師、看護婦、事務員の対応は言葉による意思疎通がうまくなされないことに問題があった(表3)。ALTも日本にいる限り日本語を学ぶべきであるが、国際化が進んで

いる現在では、医療従事者や医療施設は少なくとも国際語である英語で対応できると理想的であろう。医療現場におけるコミュニケーションの不足は、文化の相違と相まって誤解を招く可能性がある。

外国人の医療サービスとして、東京都外国人医療相談所がある。外国人向け医療サービスのガイドブックは数多く発行されており、例えば東京都衛生局編「医療応急ハンドブック」²⁾には、英語の話せるスタッフのいる都内の病院名、電話番号、専門科名、地図が記載されている。また、医療サービスガイドとして「Accessible Medical Service for Foreign Residents of Tokyo」³⁾もある。

広島県では広島県と広島県地域保健対策協議会保健医療情報委員会との共同で、外国人に広島県下の医療機関の案内書の英語版「A Foreign Residents Guide to Doctors and Dentists in Hiroshima Prefecture」を作成し配布した⁴⁾この案内書には外国語に堪能な医師や歯科医師が記載されている。その他、日本の医療福祉を6か国語で表した小林のガイドブック⁵⁾も出版されている。

前述の広島県の調査⁴⁾によると「A Foreign Residents Guide to Doctors and Dentists in

表8 日本の医療に対する不満・疑問

年齢	性別	具体的内容(本文を筆者が日本語に訳したもの)
24	女	医師や看護婦は処置はするが、質問に答えることには慣れていない。
23	女	日本国技・相撲の曙がロサンゼルスに行って膝の手術を受けるのは日本のスポーツ医学が遅れているためではないか。
26	男	海外渡航時にどこで予防接種を受けるのかわからない。
25	女	米国の医師は納得するまで質問に答えてくれるので信頼ができるが、日本の医師は説明無しで、過剰投薬・過剰治療をする。
27	男	説明なしに治療されるので、大変にストレスが溜まる。
26	男	日本の医師は質問しにくく、雲の上の存在のようだ。
26	女	養護教諭が外国人語学指導講師にもっと医療サービスをするとよい。
26	男	米国では医療上の秘密が守られることが重要視され、職場に病状が知られることはない。

Hiroshima Prefecture」を持っている外国人は48.4%であった。これら出版物が医療機関や行政窓口に着目され、医療情報が積極的に提供されることが望ましい。

(2) 治療に対する不満について

日本における医療及び保険制度にALT受診者の79.4%、85.1%がそれぞれ満足と答えている。

健康保険組合連合会が1994年7月に全国の20歳以上の男女2,000人を対象に行った調査⁶⁾では30.9%の人が診療への不満、疑問を持っていた。内訳のトップは、「病状や治療法について充分説明してもらえなかった」44.1%、2位は「長時間待たされた」40.5%、3位は「医師や看護婦の態度が不親切」21.6%、4位は「薬が多くて飲み切れなかった」16.7%の順であった。「過剰医療」、「過剰投薬」は出来高払いによる保険制度に慣らされた日本医療の欠陥でもあろう。本調査のALTの不満内容と非常に類似していた。

ALTからは「プライバシー欠如」、「セクシャルハラスメント」、「医師の低医学水準」が他に挙げられていた。その原因として、日本の保険医療制度や医学教育の欠陥や文化的相違が考えられる。

現行の保険制度下では、容易に医師を受診でき、国民健康調査¹⁾によれば人口千人当たり一日の受診率は252.4と著しく高い。このことが診療現場における「説明不足」、「長い待ち時間」を引き起こす原因ともなっている。日本中平均してどこでもよい医療をという目的で国民皆保険制度が施行され、現在一応その目的は達成されたかに見える。今後は、医療を受ける立場からの「快適さ」を主眼に置いた医療改革が成されるべきである。

わが国の医療現場では、これまでインフォームド・コンセントと個人のプライバシーの保護がおろそかにされてきており、今後特に充実されるべき点であると思われる。例えば上司からの問いあわせに対し、軽い疾患であるからと受診者に了解なく病状が暴露されることがALTにとってプライバシーの侵害と受け取られた事例(表8)があった。

4. 精神的ストレス、飲酒習慣について

自国にいるときより、ストレスが増加したものの割合が68.1%と高率であった(表6)。その原因となるワースト3が上位から「言葉」、「外人扱い」、「仕事」(表6)であり、最小限の日本語を学習させることや、日本の文化や習慣、詳細な仕事内容の情報を来日前から多く提供しておけば、ある程度ストレス軽減に役立つかもしれない。

VI. 結 論

静岡県下在職のALT47人に対し、健康問題や日本の医療問題についてアンケート調査を行った結果以下の結論を得た。

1. 在日中(平均滞在期間1.6年)に病気にかかったものは39人(83.0%)であった。
2. 上下気道感染症がもっとも多く24人(51.1%)であった。
3. 受診者数は34人(72.3%)であった。そのうち入院したものは3人(6.4%)で入院疾患はすべて外科的疾患であった。
4. 受診時の問題点としては「言葉の問題」41.2%、「説明不足」32.4%、「プライバシー欠如」17.7%、「低医療水準」14.7%、「予約制なし」5.9%、「医薬分業なし」2.9%があった。
5. 病気になったときの相談相手は多い方から「上司」、「ALT以外の人」、「他のALT」、「教育委員会職員」であった。
6. 治療についての不満率は、21.3%で、その内容は「医師の知識不足」、「過剰治療」、「過剰投薬」、「説明不足」等で日本人に行った同様の調査とほぼ同じであった。
7. 医師、看護婦、事務員の態度については「親切」がそれぞれ52.9%、61.8%、44.1%、「頼りになる」がそれぞれ64.7%、61.8%、55.9%で、低率であった。
8. 保険制度については85.1%が満足していた。
9. ALTの53.2%が体調の不調を訴えていた。
10. 68.1%が母国にいたときよりもストレスを自覚していた。
11. 健康の保持増進目的で運動・食事等に留意

しているものは87.2%であった。

12. 来日後、喫煙量が増加したものは2人(4.3%)のみであったが、飲酒量が増加したものは22人(46.8%)であった。飲酒増加の原因は「宴会」が多かった。

今回の調査では、アンケートの回収率が49.3%と低率であったため、これらの結果が全てのALTを代表しているとはいえない。以後、同様の調査を行う際には、アンケートの方法・内容・形式を再考する必要がある。

また、今回の調査では対照群を設置しなかったことが調査方法として不十分であった。在日外国人労働者の中でのALTの健康問題を明確にするのであれば、ALT以外の外国人労働者を、あるいは全教職員の中でのALTの健康問題を明確にするのであれば日本人教職員を対照として選定・比較する必要があった。またあるいは海外在留日本人教師とALTを比較する等、ALTの健康問題をより明らかにする方法を考慮すべきであった。

なお、本調査の結果は以後、静岡県教育委員会が開催するALTのための研修会にて、日本の医療事情・習慣の違いを説明するのに用いられる。今回の調査では、72.3%のALTが受診していたが、この結果からALTの健康審査の基準をより厳密にするのではなく、来日したALTに対して教育委員会が十分な医療に関する情報を与えること、またその門戸となることが必要であ

ると考えられる。

本調査に際し、ご指導、ご尽力くださった静岡県教育委員会高校教育課事務局参事兼課長、杉田豊先生に深謝いたします。

参考文献

- 1) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生指針臨時増刊：39(9)：608：1992
- 2) 東京都衛生局医務部医療対策課：A Guide to Emergency Medical Treatment in Tokyo, 救急医療ハンドブック：1990
- 3) 古田直樹, 他：Accessible Medical Services for Foreign Residents of Tokyo：第一法規出版
- 4) 広島県地域保健対策協議会 保健医療情報委員会 坪倉篤雄 神辺真之：広島県在住外国人の広島県医療システムに対するアンケート調査結果, 広島医学44：1855-1864：1991
- 5) 小林米幸：6か国語対応/外国人にも利用できる日本の医療・福祉制度ガイド：中山書店：1993
- 6) 静岡新聞(朝刊)：1994年11月7日付
- 7) 末舛恵一：医療昨今①アメリカの医療事情を推測する：Medical Tribune：1994年11月17日号 Vol. 27 No. 46

(受付 95. 5. 11 受理 95. 7. 20)

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-3-10

東京医科歯科大学難治疾患研究所
社会医学研究部門(疫学)(大河内)

待望のエイズ教育・研修専用テキストついに登場!

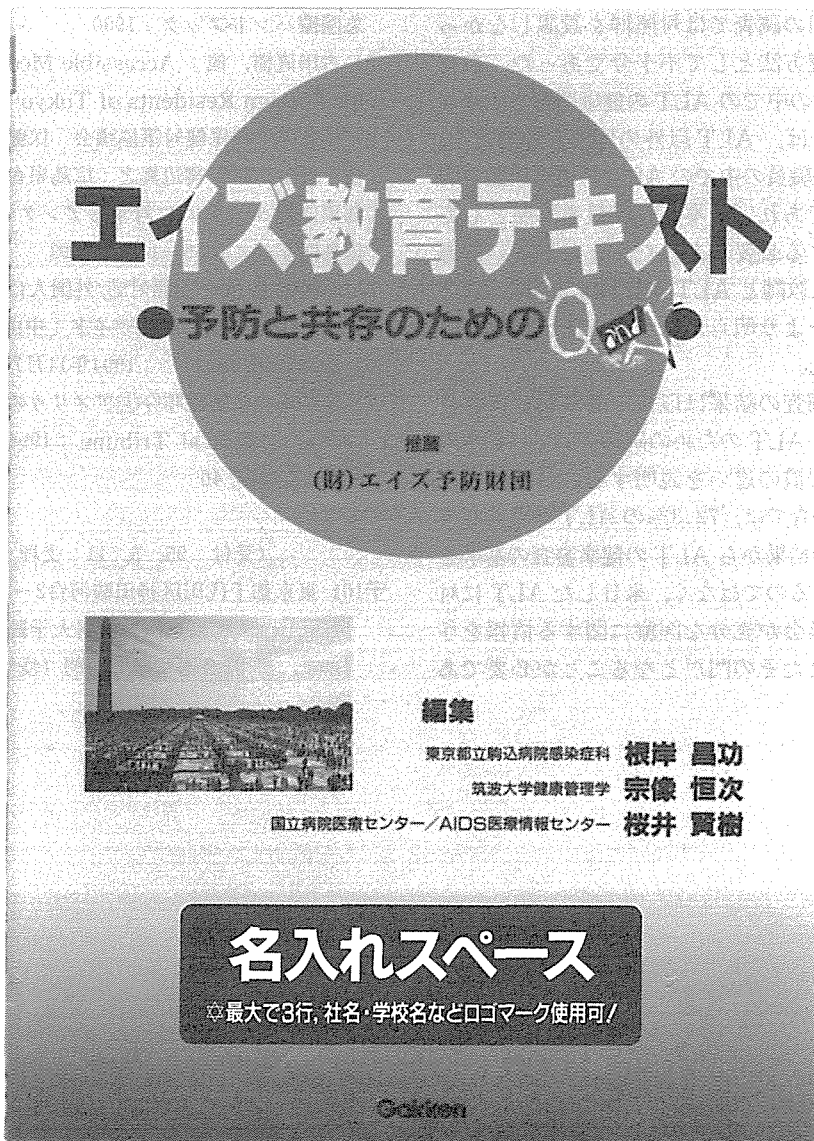
本書は、各自治体、病院、学校、企業などで、啓蒙あるいは研修を目的に行われる
エイズ教育に不可欠な教材として絶賛を博しています。

「エイズ教育テキスト」 名入れサービスのご案内

〈名入れサービスのご利用例〉

- エイズ教育の教材採用時 ●成人式配布の記念品
- 学校などの入学・卒業時の配布用 ●病院や企業内での研修用 ●海外派遣社員の研修用
- 生命保険会社・製薬会社などでののお得意先サービス品…etc

財エイズ予防財団推薦



名入れサービスは50部以上無料です

本書ならびに名入れサービスに関するお問い合わせ・ご注文は下記までお願いします。
学研メディカル出版事業部「エイズ教育テキスト」係 〒145 東京都大田区上池台4-40-5
Tel. 03-3726-8408 FAX. 03-3726-8857

Gakken

B5判・288頁で定価1,000円(税)!
名入れ用にふさわしい超低定価設定

会 報 第42回日本学校保健学会のご案内 (第4報)

1. 会 期 平成7年11月25日(土), 11月26日(日)

2. 会 場 千葉大学

〒263 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

交通 = JR総武線 西千葉駅下車 北口前 (西千葉駅には, 快速, 特急は止まりません)

徒歩約10分

京成千葉線 みどり台駅下車 改札を出て左 徒歩約8分

3. 日 程

		9:10	10:10	12:30	14:00	15:40	17:10	20:50
		9:10	12:10	13:00	15:10	15:50	18:30	
11月25日	受付	学会長講演	シンポジウムⅠ・Ⅱ ビデオセッション	昼 休 み	総 会	特別講演Ⅰ	教育講演Ⅰ	懇 親 会
							一般口演 ポスターセッションⅢ・Ⅳ	
		一般口演 ポスターセッションⅠ・Ⅱ	クリニカルセッション			年次学会要望課題Ⅰ・Ⅱ		

		9:00	10:00	12:50	14:50	16:40	
		9:00	12:00	14:00			
11月26日	受付	教育講演Ⅱ・Ⅲ	シンポジウムⅢ・Ⅳ	昼 休 み	特別講演Ⅱ	教育講演Ⅳ	自主シンポジウム Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ
		一般口演 ポスターセッションⅤ・Ⅵ			年次学会要望課題Ⅲ・Ⅳ		
		フィジカルセッション		フィジカルセッション			

4. 行 事

(1)学会本部行事

- ①理事会 11月24日(金) 13:00~15:00 千葉大学けやき会館会議室3
- ②評議員会 11月24日(金) 15:30~17:00 千葉大学けやき会館大ホール
- ③総会 11月25日(土) 13:00~13:50 千葉大学けやき会館大ホール
- ④編集委員会 11月26日(日) 17:30~19:30 JR 東京駅大丸百貨店11階ルビーホール
- ⑤学会活動委員会 11月25日(土) 12:10~13:00 千葉大学けやき会館会議室1

(2)年次学会行事

- ①全体懇親会 11月25日(土) 18:30~20:50 千葉大学けやき会館レストラン
- ②展示 11月25日(土) 9:00~17:00 千葉大学教育学部1号館大会議室
- 11月26日(日) 9:00~17:00 千葉大学教育学部1号館大会議室

5. 関連行事

- (1)教員養成系大学保健協議会 11月24日(金) 9:00~17:00 千葉大学けやき会館会議室2
- (2)日本教育大学協会全国養護部門 11月24日(金) 9:00~理事会 千葉大学けやき会館会議室3
- 10:00~総 合 千葉大学けやき会館大ホール
- (3)全国養護教諭教育研究会第3回研究大会 11月27日(月) 9:30~16:00 千葉大学大学院自然科学研究科大会議室

6. 学会参加費及び懇親会費

参加費（講演集1冊を含む）7,000円、講演集は当日受付で手渡します。

但し、学生当日会員3,000円、講演集のみ別売り3,000円

懇親会費 8,000円

当日受付も可能ですので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さい。

尚、送金は郵便振替で次の口座にお振り込み下さい。

振替口座番号 00100-2-122757

加入者名 第42回日本学校保健学会

7. 学会発表について

- 一般演題のうち、「口演」による発表時間は、講演7分、討論3分の計10分です。時間を厳守して下さい。発表は講演集に添って行い、スライド、OHP等は使用できません。配布資料がある場合は、あらかじめ各会場の係員に提出して下さい。
- 一般演題のうち「ポスターセッション」及び「ビデオセッション」による発表要領については、それぞれの座長及び発表者に既に通知済みです。
- シンポジウム・年次学会要望課題の発表時間や質疑応答の方法については、それぞれの座長または司会者に一任してありますので、指示に従って下さい。

8. 連絡・問い合わせ先（年次学会事務局）

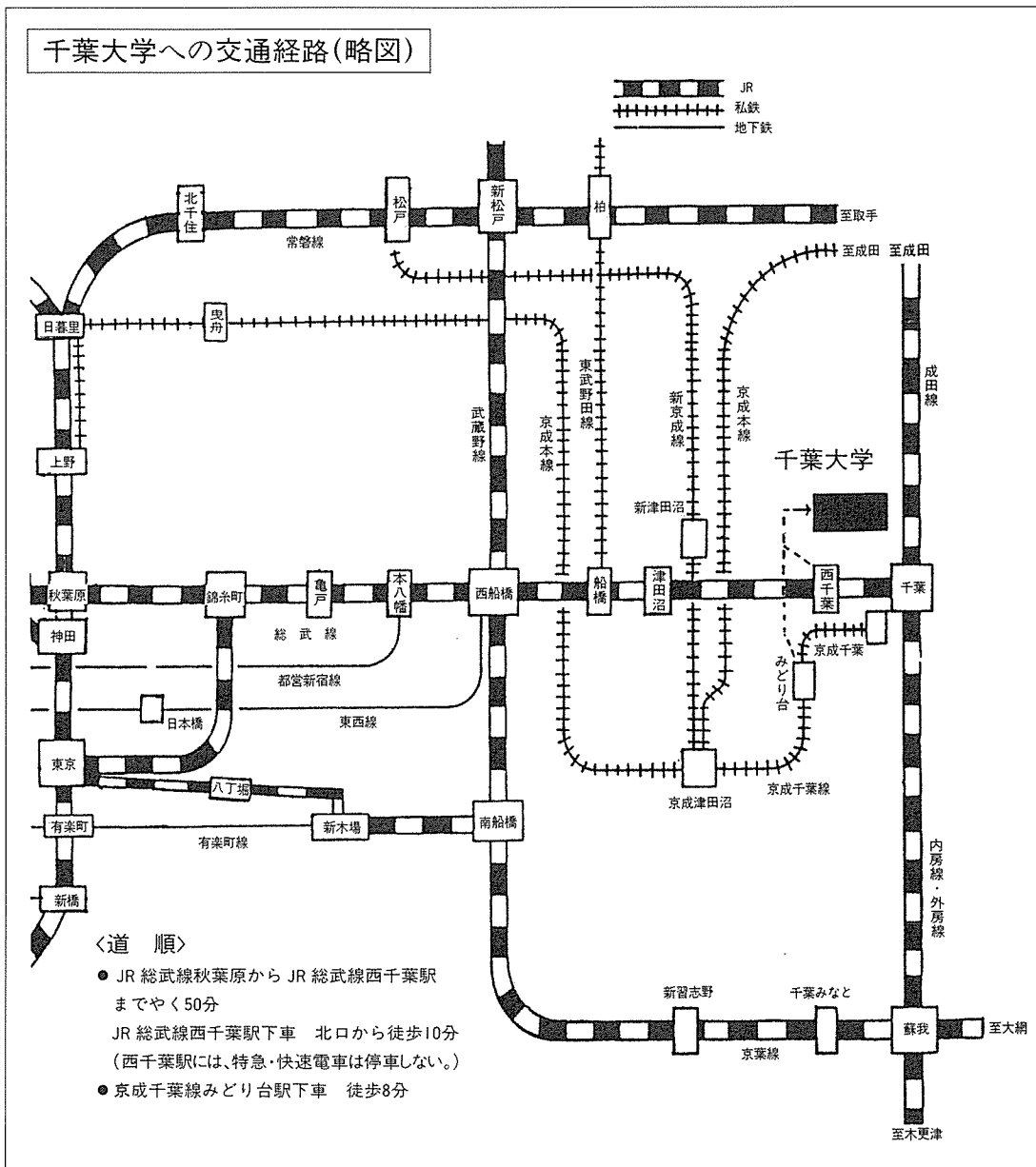
〒263 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学教育学部

第42回日本学校保健学会事務局（担当：阿部明浩）

TEL, FAX 043-290-2623

会場周辺案内図



第42回日本学校保健学会 プログラム

第1日(午前) A会場

◆シンポジウムⅠ (10:10~12:10)

養護教諭の専門性の確立とその発揮—いくつかの断面から概観すると—

- | | | |
|-------|----|-----------------------|
| | 座長 | 大谷 尚子(茨城大学) |
| | | 大橋 良枝(都立日黒高等学校) |
| 1aA01 | | ○鈴木美智子(九州女子短期大学) |
| 1aA02 | | ○大塚睦子(前堺養護学校) |
| 1aA03 | | ○節原香智美(福岡教育大学附属小学校) |
| 1aA04 | | ○曾根睦子(筑波大学附属駒場中・高等学校) |

第1日(午前) B会場

◆学会長講演 (9:10~10:00)

エイズ教育とライフスキル

- | | | |
|--|----|--------------------|
| | | 武田 敏(千葉大学) |
| | 座長 | 詫間 晋平(国立特殊教育総合研究所) |

◆シンポジウムⅡ (10:10~12:10)

保健授業改造の方針を探る—典型授業の比較検討を通して—

- | | | |
|-------|----|--------------|
| | 座長 | 森 昭三(筑波大学) |
| | | 高橋 浩之(山形大学) |
| 1aB01 | | ○和唐正勝(宇都宮大学) |
| 1aB02 | | ○近藤真庸(岐阜大学) |
| 1aB03 | | ○川畑徹朗(神戸大学) |

第1日(午前) C会場

◆一般口演

健康意識・健康行動 (10:10~10:50)

- | | | |
|--|----|---------------|
| | 座長 | 上延富久治(大阪教育大学) |
|--|----|---------------|

- 1aC01 児童・生徒の生活実態をめぐって(第1報)
 -15年前との比較- ○後和美朝(大阪国際女子大学), 鹿島朋子(西宮市上ヶ原南小学校)
 前田千鶴(西宮市瓦木小学校), 吉村智子(西宮市生瀬小学校)
 藤原美津子(西宮市鳴尾中学校), 坂本民恵(西宮市鳴尾東幼稚園)
 今出悦子(西宮市教育委員会), 森岡郁晴・宮下和久・武田眞太郎(和歌山県立医科大学)
- 1aC02 児童・生徒の生活実態をめぐって(第2報)
 -愁訴と生活実態との関連- ○吉村智子(西宮市生瀬小学校), 後和美朝(大阪国際女子大学)
 鹿島朋子(西宮市上ヶ原南小学校), 前田千鶴(西宮市瓦木小学校)
 藤原美津子(西宮市鳴尾中学校), 坂本民恵(西宮市鳴尾東幼稚園)
 今出悦子(西宮市教育委員会), 森岡郁晴・宮下和久・武田眞太郎(和歌山県立医科大学)
- 1aC03 児童期における生活習慣形成要因の分析
 ○江藤真紀(中京女子大学大学院), 藤井真美・森 悟(中京女子大学), 家田重晴(中京大学)
- 1aC04 学童期小児の健康についての知識とライフスタイルに関する疫学的研究(1)
 -小学校高学年- ○永井純子・川島 隆・黒田種樹・赤星隆弘・北山敏和・渡邊正樹・
 勝野眞吾(兵庫教育大学), 松浦高麿(五色健康福祉総合センター)
- (10:50~11:30) 座長 菊田 文夫(聖路加看護大学)
- 1aC05 母親の回答にみる小学1・2年生の子供と母親の関連について
 -健康生活の一部項目の分析- ○鶴原香代子(愛知淑徳短期大学), 池上久子(名古屋聖霊短期大学)
 田中陽子(成城大学短期大学部), 青山昌二(三重大学)
- 1aC06 児童・生徒の成人病に関する認識 ○佐藤幸代(弘前大学大学院), 佐藤雄一(弘前大学)
- 1aC07 小学校高学年児童の睡眠時間と日常生活との関連性
 ○大西文子(藤田保健衛生大学), 山崎和桂代(刈谷市立東刈谷小学校)
 梅村靖子(刈谷市立住吉小学校), 佐藤和子・天野敦子(愛知教育大学)
- 1aC08 小学校高学年児童の蓄積時疲労徴候と食習慣との関連性
 ○梅村靖子(刈谷市立住吉小学校), 山崎和桂代(刈谷市立東刈谷小学校)
 森 千鶴(名古屋市立西前田小学校), 大西文子(藤田保健衛生大学)
 佐藤和子・天野敦子(愛知教育大学)
- (11:30~12:10) 座長 門田新一郎(岡山大学)
- 1aC09 通塾が中学生の生活行動や健康に与える影響に関する調査
 ○新井猛浩(中京大学), 佐藤和子(愛知教育大学), 家田重晴(中京大学)
- 1aC10 中・高校生のライフスタイルと健康状態
 ○関 房子(茨城県岩井南中学校), 佐藤郁子(青森十和田裁判所), 西沢義子(弘前大学)
- 1aC11 高校生における訴え症状の日内変動と睡眠時間
 ○中永征太郎(ノートルダム清心女子大学), 前橋 明(倉敷市立短期大学)
- 1aC12 自由連想語法による“いじめ”の意識に関する調査研究 ○小浜 明(東北工業大学)

第1日(午前) D会場

◆一般口演

性教育・エイズ教育 (10:10~10:50)

座長 伊藤 助雄(福岡県予防医学協会)

- 1aD01 一般男女大学生に行ったエイズチェックテストの成績と、そのテスト効果について
○土井 豊(東北生活文化大学), 中條多美子(東北学院大学), 川上吉昭(東北福祉大学)
- 1aD02 わが国における大学生の性・エイズに関する調査研究(第3報)
－性行動欲求と性意識・性行動との関連－
○木村龍雄(高知大学), 皆川興栄(新潟大学)
- 1aD03 わが国における大学生の性・エイズに関する調査研究(第4報)
－エイズ態度と性行動との関連－
○皆川興栄(新潟大学), 木村龍雄(高知大学)
- 1aD04 大学新入生のAIDS予防に関する知識の入学後の変化について
○兵頭圭介(大東文化大学)

(10:50~11:30)

座長 木村 龍雄(高知大学)

- 1aD05 エイズ知識の学年別比較と効果的指導内容に関する研究(1)
－中・高・大学生のエイズ知識の比較－
○根本節子(練馬区立田柄中学校), 中島玲子(愛知教育大学)
徳山美智子(大阪府立桜塚高等学校), 森 悟(中京女子大学), 斉藤歎能(横浜国立大学)
藤井真美(中京女子大学), 藤江善一郎(常磐大学)
- 1aD06 高校生のエイズ予防行動に関わるスキル
－Akita AIDS education for Adolescent Survey(AAAS)－
○野津有司(秋田大学), 渡部 基(秋田工業高等専門学校), 岩井浩一(茨城県立医療大学)
- 1aD07 エイズに関する意識・知識と性行動に関する調査
○高橋弘彦・内野秀哲(仙台大学), 渡辺栄子(仙台南高等学校), 佐藤 理(福島大学)
- 1aD08 「性」に関する知識についての高校生の理解度
○小林 臻(東京大学), 衛藤 隆(東京大学)
田中哲郎(東京医科大学), 原田幸男(都立市ヶ谷高等学校)

(11:30~12:10)

座長 向井 康雄(愛媛大学)

- 1aD09 高校教員におけるエイズ教育に関する調査
－Akita AIDS education for Adolescent Survey(AAAS)の結果より－
○渡部 基(秋田工業高等専門学校), 野津有司(秋田大学), 岩井浩一(茨城県立医療大学)
- 1aD10 都区内外小中教員のエイズに対する意識について
○薩田清明(東京家政学院大学)
- 1aD11 諸外国におけるエイズ教育・性教育に関する調査・研究(第1報)
－米国におけるエイズ教育の内容－
○野津有司(秋田大学), 和唐正勝(宇都宮大学), 平山宗弘(恩賜財団母子愛育会)
吉田瑩一郎(日本体育大学), 武田 敏(千葉大学), 皆川興栄(新潟大学)
高橋浩之(山形大学), 上田誠治(金沢大学), 石川哲也(文部省)
- 1aD12 諸外国におけるエイズ教育・性教育に関する調査・研究(第2報)
－イギリス・HEAの取り組み－
○皆川興栄(新潟大学), 和唐正勝(宇都宮大学), 植田誠治(金沢大学)
武田 敏(千葉大学), 高橋浩之(山形大学), 野津有司(秋田大学)
吉田瑩一郎(日本体育大学), 平山宗弘(恩賜財団母子愛育会), 石川哲也(文部省)

第1日(午前) E会場

◆一般口演

精神保健 (10:10~10:50)

座長 吉川 武彦(国立精神・神経センター)

- 1aE01 教師行動の自己評価と生徒からの評価の比較分析(1)
 - 学校嫌いの予防・立ち直りのための質問紙の項目分析 -
 ○ 赤倉貴子(芦屋大学), 木場深志(金沢学院大学), 浦田 肇(石川県立金沢向陽高等学校)
- 1aE02 教師行動の自己評価と生徒からの評価の比較分析(2)
 - 分析結果の検討と教師へのフィードバック -
 ○ 木場深志(金沢学院大学), 赤倉貴子(芦屋大学), 浦田 肇(石川県立金沢向陽高等学校)
- 1aE03 思春期の心身の不適応徴候のスクリーニング法の検討
 - 数量化II類による解析(1) - ○ 天願優子・識名節子・大山佐知子・平山清武(琉球大学)
 森 忠繁(岡山環境保健センター), 折原茂樹(国士舘大学)
- 1aE04 思春期の心身の不適応徴候のスクリーニング法の検討
 - 数量化II類による解析(2) - ○ 識名節子・大山佐知子・天願優子・平山清武(琉球大学)
 森 忠繁(岡山環境保健センター), 折原茂樹(国士舘大学)

(10:50~11:30)

座長 齊藤 和雄(北海道大学)

- 1aE05 教師版Irrational Belief Test(TIBT)開発に関する研究 ○ 土井一博(筑波大学)
- 1aE06 中学生の抑うつとライフ・イベントとの関連について(1)
 THI-J抑うつ尺度と各種ライフ・イベントとの関連
 ○ 笹澤吉明・竹内一夫・宮崎博子・鈴木庄亮(群馬大学), 土井由利子(テキサス大学)
- 1aE07 中学生の抑うつとライフ・イベントとの関連について(2)
 OSD尺度基準と各種ライフ・イベントとの関連
 ○ 竹内一夫・笹澤吉明・宮崎博子・鈴木庄亮(群馬大学), 土井由利子(テキサス大学)
- 1aE08 心因性内科的症状を訴える生徒の実態
 ○ 中村和彦(山梨大学), 森 昭三(筑波大学), 山田七重(山梨大学大学院)

(11:30~12:10)

座長 青山 英康(岡山大学)

- 1aE09 CD1による児童・生徒の抑うつ状態に関する研究(第4報)
 - 東海4県下(小学校11校・中学校11校)のCD1によるハイリスク者1年間の事後指導の成果について -
 ○ 伊藤春夫(名古屋市学校医会常任理事)
- 1aE10 女子高校生における精神健康調査
 ○ 下山千景・大野 裕・左保由美子・河辺博史・斎藤郁夫・永野志朗(慶應義塾大学)
- 1aE11 不登校生徒対応のための学校内教育相談室兼適応準備教室の在り方(その2)
 - 登校入室援助についての意識 - ○ 染川清美(八尾市立八尾中学校)
- 1aE12 中学生の精神保健に関する研究
 ○ 不破功二郎・扇原 淳・田口 圭・孟 憲英(筑波大学大学院), 森 昭三(筑波大学)

第1日(午前) F会場

◆ビデオセッション

コーディネーター

柴若 光昭(東京大学)

(10:10~11:10)

座長

齊藤 美麿(山口女子大学)

- 1aF01 パソコン用保健室利用者カルテの活用(第1報)
 - 保健室利用状況の分析と教育への活用と評価 -
 ○ 大西雅美(大阪府立高槻南高等学校), 辻 立代(大阪府立鳥飼高等学校)
 太田俊児(トステム)

- 1aF02 パソコン用保健室利用者カルテの活用(第2報)
 - 頻回来室者の指導と担任との連携 -
 ○辻 立代(大阪府立鳥飼高等学校), 大西雅美(大阪府立高槻南高等学校)
 太田俊児(トステム)
- (11:10~12:10) 座長 横尾 能範(神戸大学)
- 1aF03 児童とともにいう健康教育 - 保健委員会児童とともに -
 ○田中千恵子(東京学芸大学附属小金井小学校)
- 1aF04 学校安全教育への新しい接近 - コンピュータソフトの利用を含む -
 ○詫間晋平(国立特殊教育総合研究所), 松岡 弘(大阪教育大学)

第1日(午前) H会場

◆一般口演

- 国際学校保健 (10:10~10:30) 座長 小林 芳文(横浜国立大学)
- 1aH01 「海外情報ニュース」にみる国際学校保健の動向分析
 ○詫間晋平(国立特殊教育総合研究所)
- 1aH02 カナダのエドモンド市における小学生の生活と健康について
 ○船本美緒(成田赤十字病院), 佐藤有紀子・中野正孝・野尻正美(千葉大学)
- (10:30~11:00) 座長 岡田加奈子(千葉大学)
- 1aH03 タイ国北部少数民族と東北部の児童生徒の生活時間
 ○國土将平(鳥取大学), 佐川哲也(金沢大学), 西嶋尚彦(筑波大学)
 笠井直美・大澤清二(大妻女子大学)
- 1aH04 タイ国北部と東北部における児童生徒の栄養摂取状況
 ○笠井直美(大妻女子大学), 國土将平(鳥取大学), 佐川哲也(金沢大学)
 西嶋尚彦(筑波大学), 大澤清二(大妻女子大学)
- 1aH05 東北タイにおける児童生徒の医療行動について
 - タイ国ウボン県における健康生活学術調査(第20報) -
 ○家田重晴(中京大学), 大澤清二・軽部光男・笠井直美(大妻女子大学)
 國土将平(鳥取大学), 佐川哲也(金沢大学)
- 学校安全・安全教育 (11:00~11:30) 座長 吉田瑩一郎(日本体育大学)
- 1aH06 大学生におけるSensation Seekingと交通安全行動との関連性 ○渡邊正樹(兵庫教育大学)
- 1aH07 学校管理下の傷害発生と学校環境(男女別の結果) ○石樽清司(滋賀大学)
- 1aH08 パソコン利用の学校災害事例検索システムの開発 ○横尾能範(神戸大学国際文化学部)
- (11:30~12:00) 座長 藤井 真美(中京女子大学)
- 1aH09 喘息児に関する研究 ○中島崇博(千葉大学大学院), 阿部明浩(千葉大学)
- 1aH10 大学生の生活意識に関する研究
 ○顧鈞 健(千葉大学大学院), 阿部明浩(千葉大学), 中島崇博(千葉大学大学院)
- 1aH11 学童の錯視の実態とその応用に関する研究(1) ○阿部明浩(千葉大学)

第1日(午前) J会場

◆ポスターセッションⅠ (9:30~10:20)

コーディネーター 桃崎 一政(千葉経済大学)

- 1aJ01 男子大学生の体操に関する実態意識調査
○金子嘉徳(女子栄養大学), 春山文子(実践女子大)
- 1aJ02 女子大学生の体操に関する実態意識調査
○春山文子(実践女子大)
- 1aJ03 in vivo赤血球の浸透圧脆弱性および水分含有量に及ぼす遊離脂肪酸の影響
○佐藤正臣・小河弘之・樋口豊治(大阪教育大学)
- 1aJ04 学童期の低・中・高学年における食習慣を中心とした検討
-第7回全国健康福祉祭かがわ大会より-
○村上淳・多田賢代・岡野温子・熊野昭子(香川県明善短期大学)
川田久美・合田恵子・武田則昭・寛成文彦(香川医科大学)
- 1aJ05 女子高校生および短大生への喫煙防止に関する保健教育とその評価
○大嶺智子・加藤英世・一條優章・松田博雄・小林 清(杏林大学)

◆ポスターセッションⅡ (10:50~11:40)

- 1aJ06 中学生のストレスに関する調査研究
○玉江和義・曾根智史(産業医科大学)
- 1aJ07 学生の性格傾向が健康生活に及ぼす影響(第4報)
○沢田孝二(山梨学院短期大学)
- 1aJ08 高校普通科と看護科生の老人に関する意識調査
○松本順子・合田恵子・川田久美・武田則昭・安成文彦(香川医科大学)
大須賀桂子(香川県看護専門学校), 菅西玲子(香川県立高松原高等学校)
三好和子(香川県立飯山高等学校)
- 1aJ09 災害後の小学生の心身様子と保健室の取り組み(1)
○前田千鶴(西宮市立瓦木小学校), 上野昌江・山中久美子(大阪府立看護大学)
島井哲志(神戸女学院大学), 服部祥子(大阪府立看護大学)
- 1aJ10 災害後の小学生の心身様子と保健室の取り組み(2)
○上野昌江・山中久美子(大阪府立看護大学), 前田千鶴(西宮市立瓦木小学校)
島井哲志(神戸女学院大学), 服部祥子(大阪府立看護大学)

第1日(午前) K会場

◆一般口演

健康評価 (10:10~10:40) 座長 出井美智子(杏林大学)

- 1aK01 養護教諭の職務展開に関する研究 -力を注いだ題材別にみる保健指導の実践状況-
○中川克子(伊勢市立浜郷小学校), 天野敦子(愛知教育大学)
- 1aK02 健康中学生についての腋窩温の研究
-学年別・季節による日内変動と, 1日の変動幅について-
○澤田佳代子(兵庫県姫路市立大白書中学校), 正木健雄(日本体育大学)

- 1aK03 「子どもの体の調査'95」の結果報告
 - 保育所・幼稚園・小・中・高校における“からだのおかしさ”の実感について-
 ○阿部茂明・野田 耕・正木健雄(日本体育大学)

(10:40~11:20)

座長 西嶋 尚彦(筑波大学)

- 1aK04 体の歪みのチェックリスト項目について
 ○関口 淳(順天堂大学大学院), 大津一義・柳田美子(順天堂大学)
 前上里直(順天堂大学大学院)

- 1aK05 児童生徒の生活と健康(2)自覚症状の有症率における学年推移
 ○宮崎博子・竹内一夫・笹澤吉明(群馬大学), 佐藤泰一(藤岡保健所)
 佐藤昭三・鈴木庄亮(群馬大学)

- 1aK06 OD児における疲労自覚症状 - 中学生の場合 -
 ○大塚幹太・藤岩秀樹(日本体育大学大学院), 野井真吾(日本体育大学)
 松本富美子(調布市立第六中学校), 正木健雄(日本体育大学)

- 1aK07 青少年の血圧調節機能とOD調査結果との関連 - 中学生の場合 -
 ○藤岩秀樹(日本体育大学大学院), 野井真吾・野田 耕・阿部茂明・正木健雄(日本体育大学)

(11:20~11:40)

座長 高田 公子(世田谷区立代田小学校)

- 1aK08 項目表現形式の違いによる回答パターンの変化: CES-Dうつ病スケールを例として
 ○岩田 昇(産業医科大学), 竹内一夫・鈴木庄亮(群馬大学)

- 1aK09 近赤外方式体脂肪計による女子大学生の体組織検査
 ○杉中真紀子・荒島真一郎・岡安多香子(北海道教育大学)

歯科保健 (11:40~12:10)

座長 近藤いさを(日本大学)

- 1aK10 小学校における歯科保健教育と生活習慣の形成に関する研究
 ○北田豊治(杏林大学), 吉田懸一郎(日本体育大学)

- 1aK11 中学校特殊学級生徒の歯科保健指導に関する研究(1)
 - 口腔衛生状態とブラッシング行動について -
 ○田代悦章(浜松医科大学), 渡邊正樹(兵庫教育大学)
 岡田加奈子(千葉大学), 高江洲義矩(東京歯科大学)

- 1aK12 高校生の歯ならびとかみ合わせの意識調査結果と歯科検診結果について
 ○貴志知恵子(鳴門第一高等学校)

第1日(午前) L会場

◆一般口演

食品保健・学校給食・栄養 (10:10~10:40) 座長 柳田 美子(順天堂大学)

- 1aL01 小・中学生の生活習慣・食品摂取状況調査 ○南里清一郎・米山浩志(慶應義塾大学)

- 1aL02 学校別にみた小学生の食生活
 ○畑中高子・竹田由美子・生田清美子(神奈川県立衛生短期大学)

- 1aL03 学校給食の有無が子どもの食生活に及ぼす影響について
 ○吉田 穰・境みどり・大塚量子(和歌山信愛女子短期大学)
 石居宜子・森岡郁晴・宮下和久・武田眞太郎(和歌山県立医科大学)

- (10:40~11:10) 座長 加藤 博(千葉大学)
- 1aL04 学齢期小児の食習慣と健康に関する疫学的研究(1)
-食品群別の栄養摂取量- ○川島 隆・黒田種樹・永井純子・勝野真吾(兵庫教育大学)
松浦尊麿(五色健康福祉総合センター)
- 1aL05 子どもにおける間食の人間学的基礎とその育成化への試み(2)
-母親による回顧からの検討- ○河内信子(岡山大学)
- 1aL06 家族内感染症を伴った病原性大腸菌0157による腸管出血性大腸炎の小学校における集団発生事例
-学校保健からみた問題点とその対策- ○柳生善彦(奈良県桜井保健所)
- 原理・歴史・方法 (11:10~11:50) 座長 山本万喜雄(愛媛大学)
- 1aL07 -明治前期保健教育史- 「明治前期における養生と衛生の概念についての比較検討」
○田口喜久恵(常葉学園富士短期大学)
- 1aL08 大正期における教育衛生論の検討
-富士川遊の理論を中心に- ○野村良和(筑波大学)
- 1aL09 健康教育理論誌に関する基礎的研究(8)
○瀧澤利行(茨城大学), 和唐正勝(宇都宮大学), 森 昭三(筑波大学)
- 1aL10 戦後保健科教育における領域構成・構成原理に関する一考察
○扇原 淳・田口 圭・不破功二郎・孟 憲英(筑波大学大学院)
岩田英樹(茨城県立医療大学), 森 昭三(筑波大学)

第1日(午前) M会場

- 疾病予防・健康管理 (9:10~9:40) 座長 松浦 鎭治(愛知教育大学)
- 1aM01 診療所におけるアレルギー性疾患児に関する研究
-障害(主に発達障害)児のアレルギー疾患について-(第2報)
○長山由利(名古屋市立当知小学校), 松浦鎭治・佐藤和子(愛知教育大学)
- 1aM02 成人における小児感染症の抗体保有状況について
-看護系学生の麻疹・風疹・流行性耳下腺炎抗体保有状況-
○高柳満喜子・法橋尚宏・静 正子・城川美佳・土屋英俊・西川浩昭・中谷弥栄子・
松本研一・豊川裕之(東邦大学), 村井貞子(東邦大学医療短期大学)
- 1aM03 骨粗鬆症検診受信者の日常生活の実態と骨粗鬆症に対する意識調査
○津村直子・佐藤敏雄・奥村晶子(北海道教育大学)
- (9:40~10:20) 座長 豊川 裕之(東邦大学)
- 1aM04 小学生の身長計測グラフから明らかになった健康障害
○斉藤久美(大宮市立桜木小学校), 小林正子(東京大学), 東郷正美(神戸大学)
- 1aM05 小児期からの成人病予防健診の現状と栄養摂取状況(第2報)
-KARATSU STUDY(1994年)- ○林 辰美(中村学園大学)
- 1aM06 男子高校生における血液糖尿病諸指標の検討
○森 正明・和井内英樹・吉田 正・中里優一・河邊博史・南里総一郎・斉藤郁夫・
水野志郎・久根木康子・田中雅子・佐保由美子(慶應義塾大学)

1aM07 児童・生徒の動脈硬化促進リスクの低減に関する研究

○宇佐見隆廣・木村一元・中村公裕(獨協医科大学), 佐伯圭一郎(文教大学)
小宮秀明(宇都宮大学), 山根則幸・中村康夫(栃木県保健衛生事業団)
鯨淵清子・高橋信子・伊藤洋子(真岡市役所)

(10:20~11:00)

座長 森 和夫(国立療養所下志津病院)

1aM08 視力検査と事後処置について(子どもの視力について その8) ○高橋ひとみ(桃山学院大学)

1aM09 スポーツ活動中の眼障害とその管理の実態について

○藤山由紀子(北里大学), 小沢治夫(筑波大学附属駒場中・高等学校)
庄司倫子・青木 繁・向野和雄・石田 哲(北里大学)

1aM10 健康教育における自己検尿の試み

○照井 哲(日本大学), 森 和夫(国立療養所下志津病院)
土井弘基(国立佐倉病院), 鴫田純一(鴫田病院)

1aM11 女子高校生における甲状腺腫の有無と甲状腺機能の関係

○久根木康子・吉田正・佐保由美子・河邊博史・斎藤郁夫・永野志朗(慶應義塾大学)

第1日(午後) A会場

◆特別講演 I (14:00~15:00)

ヘルスプロモーションとライフスキル Donna Cross(西オーストラリアカーティン大学)

座長 川畑 徹朗(神戸大学)

◆教育講演 I (15:10~15:50)

人類学からみた子どもの健康問題 -アジアのフィールドから-

大澤 清二(大妻女子大学)

座長 加納 克己(筑波大学)

第1日(午後) B会場

◆年次学会要望課題 I (14:00~15:40)

現代の学校における養護教諭の役割と複数配置

座長 藤田 和也(一橋大学)

山梨八重子(お茶の水女子大学附属中学校)

1pB01 研究者の立場から, 複数配置の現状と課題

○堀内久美子(愛知教育大学)

1pB02 校長の立場から, 校長から見た養護教諭の複数配置

○佐藤哲夫(元朝霞西高等学校)

1pB03 養護教諭の立場から, 複数配置を体験して

○小豆島悦子(大阪市立長原小学校)

第1日(午後) C会場

◆一般口演

健康意識・健康行動 (15:10~15:50)

座長 鈴木 庄亮(群馬大学)

- 1pC01 質問紙法における女子短大生の健康・体力意識について
○井上千枝子(実践女子短期大学), 石山恭枝(東京大学)
池上久子(名古屋聖霊短期大学), 鶴原香代子(愛知淑徳短期大学)
二村良子(三重県立看護短期大学), 青山昌二(三重大学)
- 1pC02 質問紙法による女子短大生の睡眠項目間の検討
○池上久子(名古屋聖霊短期大学), 鶴原香代子(愛知淑徳短期大学)
田中陽子(成城大学短期大学), 二村良子(三重県立看護短期大学)
井上千枝子(実践女子短期大学), 石山恭枝(東京大学), 青山昌二(三重大学)
- 1pC03 質問紙による女子短大生における肥満の一考察
○石山恭枝(東京大学), 井上千枝子(実践女子短期大学)
鶴原香代子(愛知淑徳短期大学), 二村良子(三重県立看護短期大学)
池上久子(名古屋聖霊短期大学), 青山昌二(三重大学)
- 1pC04 女子短大生における朝型夜型の統計的分析
○二村良子(三重県立看護短期大学), 鶴原香代子(愛知淑徳短期大学)
池上久子(名古屋聖霊短期大学), 石山恭枝(東京大学), 青山昌二(三重大学)
- (15:50~16:30) **座長** 荒島真一郎(北海道教育大学)
- 1pC05 女子高校生の隠れ肥満者におけるライフスタイル —食事・運動・減量行動について—
○梶岡多恵子・藤井輝明(名古屋大学大学院), 吉田 正(愛知教育大学)
大沢 功・佐藤祐造・押田芳治(名古屋大学)
- 1pC06 高校生の朝食欠食の要因と健康に及ぼす影響
○嘉手苺初子(琉球大学大学院), 平良一彦(琉球大学)
- 1pC07 大学生の飲酒に対する意識と行動
○太田ひろみ・朝野 聡・加藤英世・北田豊治・野原忠博(杏林大学)
- 1pC08 大学生の老人性痴呆に関する知識とイメージについて
○藤田大輔・南 哲・田中洋一(神戸大学)

第1日(午後) D会場

◆一般口演

- 性教育・エイズ教育** (15:10~15:50) **座長** 林 正(滋賀大学)
- 1pD01 エイズに関する知識と意識の乖離について
○武田真太郎・宮下和久・森岡郁晴・ゲーオープンチューオーワン・山本博一・
影山セツ子(和歌山県立医科大学), 松本健治(鳥取大学)
- 1pD02 避妊の知識と行動の関連性について ○安岡 京(千葉大学大学院)
- 1pD03 女子学生のAIDSに関する意識調査について(第3報)
○今中正美・道本千衣子(跡見学園女子大学短期大学部), 薩田清明(東京家政学院大学)
楯 博(獨協医科大学), 高橋昌巳(筑波技術短期大学)
- 1pD04 大学におけるエイズポリシー策定のための基礎的研究
○堤 公一(佐賀大学大学院), 栗原 淳(佐賀大学)
- (15:50~16:20) **座長** 山本 勉(岡山県立短期大学)
- 1pD05 エイズに関する知識・意識とその情報源について ○池田紀子(長野県立看護大学)
- 1pD06 看護学生のAIDSに関する認識 ○淵 勲・西牧謙吾(堺市宿院保健所)

1pD07 高校生の性に関する誘惑への反応 —場面設定を取り入れた質問紙調査—

○斎藤 太・松浦賢長(京都教育大学)

第1日(午後) E会場

◆一般口演

精神保健 (15:10~15:40)

座長 川上 吉昭(東北福祉大学)

1pE01 いじめ問題への対応と養護教諭・保健室の果たす役割(第1報)

—いじめ問題に関連した事例から今後のありかたを探る—

○徳山美智子(大阪府立桜塚高等学校), 北村陽英(奈良教育大学)

池川典子(大阪府立藤井寺養護学校), 菊池美奈子(大阪府立池田高等学校)

岸 紘子(大阪府立牧野高等学校), 北垣ひなこ(東大阪市立金岡中学校)

中村昭代(大阪府立今宮高等学校), 三原和子(大阪府立守口東高等学校)

1pE02 いじめ問題への対応と養護教諭・保健室の果たす役割(第2報)

—内科的主訴で来室した生徒へのアンケート結果—

○中村昭代(大阪府立今宮高等学校), 北村陽英(奈良教育大学)

池川典子(大阪府立藤井寺養護学校), 菊池美奈子(大阪府立池田高等学校)

岸 紘子(大阪府立牧野高等学校), 北垣ひなこ(東大阪市立金岡中学校)

徳山美智子(大阪府立桜塚高等学校), 三原和子(大阪府立守口東高等学校)

1pE03 いじめ問題への対応と養護教諭・保健室の果たす役割(第3報)

—学校内外の組織や機関との連携のあり方—

○三原和子(大阪府立守口東高等学校), 北村陽英(奈良教育大学)

池川典子(大阪府立藤井寺養護学校), 菊池美奈子(大阪府立池田高等学校)

岸 紘子(大阪府立牧野高等学校), 北垣ひなこ(東大阪市立金岡中学校)

徳山美智子(大阪府立桜塚高等学校), 中村昭代(大阪府立今宮高等学校)

(15:40~16:20)

座長 華表 宏有(産業医科大学)

1pE04 青年男女の子供時代のたのしみ経験 —学校生活を中心として—

○小沢道子・上田礼子(東京医科歯科大学), 池田紀子(長野県立看護大学)

クック範子(明治大学)

1pE05 大学生のやる気に関わる諸要因

○前上里直(順天堂大学大学院), 大津一義・柳田美子(順天堂大学)

関口 淳(順天堂大学大学院)

1pE06 教師志望者の「不登校問題」に関する意識

○小林央美・数見隆生(宮城教育大学)

1pE07 教師志望学生の「いじめ問題」に関する意識

○数見隆生・小林央美(宮城教育大学)

(16:20~16:50)

座長 梅垣 弘(愛知教育大学)

1pE08 地震と高校生の精神保健

○北口和美(西宮市西宮高等学校)

1pE09 兵庫県南部地震被災による女子生徒の健康諸問題に関する研究

○寶學照子(松蔭女学院), 柳井 勉(大阪教育大学)

1pE10 障害児総合保育の事例研究

○大内 隆(京都中央看護学校), 上田 修・外山町子(勸修保育所), 藤澤邦彦(筑波大学)

藤井輝明(名古屋大学), 太田幸雄(千葉県立衛生短期大学)

第1日(午後) H会場

◆一般口演

健康相談・健康活動 (15:10~15:40)

座長 天野 洋子(東京大学附属中・高等学校)

- 1pH01 ヘルスカウンセリングにおけるネットワークづくり その1
 - 養護教諭と学級担任との連携 -
 ○ 追切 規(市川市立真間小学校), 大津一義(順天堂大学), 寺島シズ子(市川市立塩浜中学校)
 膝館ひろ子(市川市立二俣小学校), 鶴岡和世(市川市立第一中学校)
 横木裕美(市川市立富美浜小学校), 成島美智恵(市川市立信篤小学校)
- 1pH02 ヘルスカウンセリングの効果的な進め方
 ○ 塩田瑠美(千葉県総合教育センター), 大津一義(順天堂大学)
 本多英子(SHC事務局), 出原嘉代子(習志野市立実花小学校)
 延原幸子(成田市教育委員会), 斎藤裕子(市原市立辰巳台中学校)
- 1pH03 不登校生徒に対する学級担任・養護教諭相互の役割期待(第2報)
 ○ 松本幸子(練馬区立光ヶ丘第二中学校), 清水花子(練馬区立光が丘第一中学校)
 根本節子(練馬区立田柄中学校), 森田光子(練馬区立総合教育センター)
 中島玲子(愛知教育大学大学院)

(15:40~16:10)

座長 飯田澄美子(聖路加看護大学)

- 1pH04 養護教諭の相談活動に関する分析的研究
 - 保健室来室者への個別的対応の実態(その1) 来室者の内訳と対応の概要 -
 ○ 大橋好枝(都立目黒高等学校), 大谷尚子(茨城大学)
 菊池寿江(千葉市立加曾利中学校), 木幡美奈子(都立江北高等学校)
 中村泰子(狛江市立第一中学校), 平岩美弥子(筑波大学附属桐ヶ丘養護学校)
 本多英子(SHC事務局), 森田光子(練馬区立教育センター)
- 1pH05 養護教諭の相談活動に関する分析的研究
 - 保健室来室者への個別的対応の実態(その2) 継続対応の事例 -
 ○ 菊池寿江(千葉市立加曾利中学校), 大谷尚子(茨城大学)
 大橋好枝(都立目黒高等学校), 木幡美奈子(都立江北高等学校)
 中村泰子(狛江市立第一中学校), 平岩美弥子(筑波大学附属桐ヶ丘養護学校)
 本多英子(SHC事務局), 森田光子(練馬区立教育センター)
- 1pH06 養護教諭の相談活動に関する分析的研究
 - 保健室来室者への個別的対応の実態(その3) 1回で終わりそうな事例 -
 ○ 中村泰子(狛江市立第一中学校), 大谷尚子(茨城大学)
 大橋好枝(都立目黒高等学校), 菊池寿江(千葉市立加曾利中学校)
 木幡美奈子(都立江北高等学校), 平岩美弥子(筑波大学附属桐ヶ丘養護学校)
 本多英子(SHC事務局), 森田光子(練馬区立教育センター)

(16:10~16:40)

座長 鈴木美智子(九州女子短期大学)

- 1pH07 養護教諭の行う相談活動の特徴
 - 子ども全体を見渡しての心のケア(その1) -
 ○ 植井弘子(川崎市立中原中学校), 天野洋子(東京大学附属中・高等学校)
 糸山外代子(都立墨田川高等学校堤校舎), 坂田 淳(鳴門大学中学校)
 鈴木美智子(九州女子短期大学), 平良千鶴子(那覇大道小学校)
 平岩美弥子(筑波大学附属桐ヶ丘養護学校), 飯田澄美子(聖路加看護大学)
 池田あさみ(那覇市真地小学校)

- 1pH08 養護教諭の行う相談活動の特徴
 ー子ども全体を見渡しての心のケアー(その2)ー
 ○糸山外代子(都立墨田川高等学校堤校舎), 天野洋子(東京大学附属中・高等学校)
 植井弘子(川崎市立中原中学校), 坂田 淳(鳴門大学中学校)
 平良千鶴子(那覇大道小学校), 平岩美弥子(筑波大学附属桐ヶ丘養護学校)
 鈴木美智子(九州女子短期大学), 池田あさみ(那覇市真地小学校)
 飯田澄美子(聖路加看護大学)
- 1pH09 養護教諭の相談活動を規定する要因について ○池本禎子(順正短期大学)
- (16:40~17:10) 座長 岡田 晃(金沢大学)
- 1pH10 長期不登校(1年以上)事例の追跡調査 ○鶴見智子・荒島真一郎(北海道教育大学)
- 1pH11 アトピー性皮膚炎を既往症にもつ女子学生の病識調査 ○熊沢幸子(昭和女子大学)
- 1pH12 色覚検査の的確な事後措置 ○高柳泰世(本郷眼科), 宮尾 克(名古屋大学)
 山口昭子(愛知女子短期大学), 住田 実(大分大学)

第1日(午後) J会場

◆ポスターセッションⅢ (15:20~16:10)

- 1pJ01 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(1)健康と生活ー
 ○土田 豊(日本体育大学大学院), 野田 耕・野井真吾(日本体育大学)
 長谷川久子(北海道教育大学旭川校), 正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ02 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(2)土ふまずー
 ○野田耕・阿部茂明(日本体育大学), 杉本記久恵(東京学芸大学大学院)
 正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ03 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(3)体温ー
 ○正木健雄(日本体育大学), 長谷川久子(北海道教育大学旭川校)
- 1pJ04 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(4)視機能ー
 ○上野純子(日本体育大学女子体育大学), 野井真吾・野田 耕・正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ05 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(5)運動能ー
 ○平井貴子(日本体育大学大学院), 長谷川久子(北海道教育大学旭川校)
 正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ06 へき地の子どもたちの健康と生活 ー兵庫県宍粟郡S小学校の場合(6)脳活動の型ー
 ○杉本記久恵(東京学芸大学大学院), 大塚幹太(日本体育大学大学院)
 正木健雄(日本体育大学)

◆ポスターセッションⅣ (16:40~17:30)

- 1pJ07 小学生における土ふまずと拇指内角 ○井狩芳子(和泉短期大学)
- 1pJ08 幼児期における視機能の発達に関する研究
 ○太田恵美子(女子栄養大学), 上野純子(日本体育大学女子短期大学)
 正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ09 発育期における平衡感覚の発達 ー重心動揺計の諸指標よりー
 ○野井真吾(日本体育大学), 鈴木 学・平井貴子(日本体育大学大学院)
 岡崎勝博・小沢治夫(筑波大学附属駒場中・高等学校), 正木健雄(日本体育大学)
- 1pJ10 妊娠前・中の運動がマウスの仔の発育・発達に及ぼす影響
 ○余田由香・黛 誠(武庫川女子大学), 辻田純三・堀 清記(兵庫医科大学)

1pJ11 成長期における骨密度と骨折・ライフスタイルとの関係について

○小沢治夫・岡崎勝博(筑波大学附属駒場中高等学校)
 藤山由紀子・向野和雄(北里大学医療衛生学部), 石川 哲(北里大学医学部)

第1日(午後) K会場

◆年次学会要望課題Ⅱ (14:00~15:40)

青少年の喫煙対策

座長 皆川 興栄(新潟大学)

1PK01 学校における取り組みと考察

○石川哲也(文部省)

1PK02 保健行政における取り組み

○小川 浩(愛知みずほ大学)

1PK03 青少年保護の立場から見た喫煙問題

○安部哲夫(北陸大学)

◆一般口演

喫煙・飲酒等防止教育 (15:50~16:20)

座長 村松 常司(愛知教育大学)

1pK04 受動喫煙が生体に及ぼす急性的影響

- 喫煙習慣の有無が呼吸・循環機能へ与える影響の検討 -

○青柳直子(東京大学), 東郷正美(神戸大学)

1pK05 大学生の喫煙行動とその保健意識の動向

○渡辺紀子(鹿児島大学)

1pK06 小学校高学年用喫煙防止プログラムの開発研究(4)

- 自由記述形式で調べた喫煙に関する知識の介入による変化 -

○西岡伸紀・皆川興栄(新潟大学), 川畑徹朗(神戸大学)
 中村正和(大阪がん予防検診センター), 大島 明(大阪がん予防センター)
 望月吉勝(旭川医科大学), 小池 晃(新潟市立坂井輪小学校)

(16:20~17:00)

座長 種村 玄彦(日本学校薬剤師会)

1pK07 喫煙防止学習における喫煙の知識・態度・行動の変容

○北井美奈子(愛知淑徳中学校), 村松常司(愛知教育大学), 野村和雄(愛知教育大学)
 村松園江(東京水産大学), 片岡繁雄(北海道教育大学)

1pK08 アルコール教育の内容と方法改善のための授業研究

○田口 圭(筑波大学大学院), 扇原 淳(筑波大学大学院), 不破功二郎(筑波大学大学院)
 孟 憲英(筑波大学大学院), 森 昭三(筑波大学)

1pK09 薬物乱用防止システムの国際比較研究(7)

- 薬物乱用防止システムの国際比較研究: カナダの薬物乱用予防プログラム -

○武内克朗(兵庫教育大学), 北山敏和(兵庫教育大学), 渡邊正樹(兵庫教育大学)
 勝野真吾(兵庫教育大学), 高橋浩之(山形大学), 石川哲也(文部省)
 小沼杏坪(国立下総療養所), 和田 清(国立精神保健研究所)
 猪股俊二(国際武道大学), 国崎 弘(元静岡大学)

1pK10 家庭裁判所におけるシンナー常習者への取り扱いについて

○宮地直丸(東京家庭裁判所八王子支部医務室)

第1日(午後) L会場

◆一般口演

健康増進・体力 (15:10~15:50) 座長 大山 良徳(和歌山大学)

- 1pL01 飲料摂取に対して運動量の影響について
○西岡光世(日本女子体育短期大学), 原田節子(和泉短期大学)
矢崎美智子(学習院女子短期大学), 桜井幸子(埼玉県立衛生短期大学)
- 1pL02 朝の欠食がその後の体温上昇に及ぼす影響 ○高崎裕治(秋田大学)
- 1pL03 生涯健康を目指した高齢者の運動処方 ○大貫義人(山形大学)
- 1pL04 短大生の大学での授業時の活動量について -カロリーカウンターを利用して-
○上野奈初美・福本絹子・上林久雄(大阪成蹊女子短期大学)

(15:50~16:40) 座長 正木 健雄(日本体育大学)

- 1pL05 体力測定の評価が主観的体力認識におよぼす影響
○木村肇子・金子嘉徳・太田恵美子(女子栄養大学)
- 1pL06 身体活動能力の均衡性と比体表面積との関係
○高柳紀子(兵庫教育大学大学院), 三野 耕(兵庫教育大学)
五十嵐裕子(神戸大学附属明石中学校), 後和美朝(大阪国際女子大学)
石井宜子・森岡郁晴・宮下和久・武田眞太郎(和歌山県立医科大学)
- 1pL07 東京都T幼稚園における幼児の運動能力・調整力の実態
○長堂泰丈(国際音楽学校), 西島尚彦・田中喜代次(筑波大学)
- 1pL08 学生のライフスタイルと体力・運動能力との関係についての分析的研究
○小島広政(京都産業大学), 大山良徳(和歌山大学)
- 1pL09 体力診断テストの種目別にみたねむけとだるさの日内変動
○桐原由美・三原紀子・小林倫子(聖セラリア女子短期大学)
中永征太郎(ノートルダム清心女子大学)

第1日(午後) M会場

◆クリニカルセッション(12:30~17:10)

学校医学・小児保健 最新情報 -1995年ここに注目, ここが変わった-

座長 平山 宗広(日本総合愛育研究所)
大木師礎生(千葉県小児科医会長)
藤森 宗徳(千葉市医師会長)

- 1pM01 思春期心身症 ○森 崇(前福岡教育大学)
- 1pM02 アレルギー疾患 ○堀内康生(大阪教育大学)
- 1pM03 予防接種法改正 ○堀内 清(千葉血清研究所)
- 1pM04 学校検尿 ○倉山秀昭(千葉東病院)
- 1pM05 最近の小児罹患傾向 ○上原すゝ子(千葉大学)
- 1pM06 沿道汚染と学童の健康 ○安達元明(千葉大学)

第2日(午前) A会場

◆教育講演Ⅱ (9:00~9:50)

新学力観に基づく学校健康教育の評価

大津 一義(順天堂大学)

座長 市村 国夫(常磐大学)

◆シンポジウムⅢ (10:00~12:00)

学校5日制とこれからの学校保健

座長 高石 昌弘(大妻女子大学)

猪股 俊二(国際武道大学)

2aA01 学校5日制の実施に伴う今後の学校保健を考える

○野津有司(秋田大学)

2aA02 地域保健法の施行に伴う今後の学校保健を考える

○赤穂 保(青梅保健所)

2aA03 学校保健に関する実践を通して今後の学校保健を考える

○鎌田尚子(女子栄養大学)

第2日(午前) B会場

◆教育講演Ⅲ (9:00~9:40)

大学生の健康管理

佐藤 祐三(名古屋大学)

座長 富田 勤(北海道教育大学)

◆シンポジウムⅣ (10:00~12:00)

成人病予防健診と栄養教育のシステムづくり

座長 武田眞太郎(和歌山医科大学)

坂本 元子(和洋女子大学)

2aB01 学校教育における栄養教育システム

○貴田嘉一(愛媛大学)

2aB02 地域保健と栄養システム

○勝野眞吾(兵庫教育大学)

2aB03 健診システムと栄養教育システム

○村田光範(東京女子医科大学)

第2日(午前) C会場

◆一般口演

発育・発達 (9:00~9:40)

座長 美坂 幸治(鹿児島大学)

2aC01 春休みと新学期における発育および成長ホルモンの変化に関する研究

○岩城淳子(東京大学), 東郷正美(神戸大学)

2aC02 毎月1回の測定からみる身長の発育 - 同胞2女児の時系列解析 -

○布施喜与司(希望ヶ丘高等学校), 小林正子(東京大学), 岡島佳樹(玉川大学)

2aC03 北海道の小学生における体重と身長の時系列解析

○岡安多香子・武岡道子・野崎純子・荒島真一郎(北海道教育大学)

2aC04 1970年代初期の小学生における体重の季節変動と肥満との関係

○荒居和子(日野市立平山台小学校), 小林正子(東京大学), 東郷正美(神戸大学)

(9:40~10:10)

座長 竹内 宏一(浜松医科大学)

- 2aC05 通学時の重量負荷と健康(第2報) -教諭・養護教諭への調査も含めて-
○小出彌生(岡山大学), 岡田弘子(総合病院三愛)
- 2aC06 女子大学生における足蹠と重心動揺および運動能力について
○新宅幸恵・乾 道生(大阪成城女子短期大学)
白井永男(放送大学), 竹内宏一(浜松医科大学)
- 2aC07 チェコの人々の直立時接地足底面の形状について
○白井永男(放送大学), 渡邊 功(静岡産業大学)

(10:10~11:00)

座長 松本 健治(鳥取大学)

- 2aC08 初経発来前後の身体発育について
○森岡郁晴(和歌山県立医科大学), 後和美朝(大阪国際女子大学)
平瀬悦子(武庫川高等学校), 石居宜子・黒田基嗣・宮下和久・
武田眞太郎(和歌山県立医科大学), 松本健治(鳥取大学)
- 2aC09 中高生における初経調査の検討
○久泉由紀子(滋賀大学大学院), 板持絃子(滋賀大学附属中学校), 林 正(滋賀大学)
- 2aC10 年齢や初経後年齢による月経周期の変化 -女子体育大生における縦断的データから-
○菊池 潤・原田千絵・中村 泉(日本女子体育大学)
- 2aC11 思春期における下肢と座高の発育
○小林正子(東京大学)
- 2aC12 韓国・学童生徒のSkelic Indexの加齢変化
○佐竹 隆(日本大学), 服部恒明(茨城大学)

(11:00~11:50)

座長 東郷 正美(神戸大学)

- 2aC13 近赤外方式小児用体脂肪計による小学生の体組成測定
○松田ひとみ(北海道教育大学附属小学校), 荒島真一郎・岡安多香子(北海道教育大学)
- 2aC14 近赤外方式小児用体脂肪計による中学生の体組成測定
○土井芳美(北海道教育大学附属中学校), 荒島真一郎・岡安多香子(北海道教育大学)
- 2aC15 10歳から18歳の男女児童・生徒のSiri式とLohman式による体脂肪率の再検討
○田原靖昭・湯川幸一(長崎大学), 綱分憲明(長崎県立女子短期大学)
浦田秀子・勝野久美子・福山由美子(長崎大学医療短期大学), 佐伯重幸(長崎大学)
- 2aC16 大学生におけるBMIを用いた肥満判定の有効性と限界
○田中茂穂・服部恒明(茨城大学)
- 2aC17 肥満児の事例研究
○小野 良(八幡中学校), 斉藤由美(所沢北高等学校), 鎌田尚子・森田光子(女子栄養大学)

第2日(午前) D会場

◆一般口演

保健学習 (9:00~9:30)

座長 瀧澤 利行(茨城大学)

- 2aD01 全国公立中学校における保健学習の実態に関する研究
○鈴木 学・大塚幹太(日本体育大学大学院), 井筒次郎(日本体育大学)
時本識資(文部省), 吉田壘一郎(日本体育大学)
- 2aD02 保健体育教諭と養護教諭との保健学習のとらえ方の比較
○山田七重(山梨大学大学院), 中村和彦(山梨大学)
- 2aD03 保健学習における教師の「力量」についての一研究
○赤田信一(静岡大学)

- (9 : 30 ~ 10 : 10) 座長 照屋 博行(福岡教育大学)
- 2aD04 「死」に関する経験・態度・認識についての調査研究(16)
○板谷幸恵(女子栄養大学), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
- 2aD05 「死」に関する経験・態度・認識についての調査研究(17)
○藤田禄太郎(鳴門教育大学), 板谷幸恵(女子栄養大学)
- 2aD06 「生命観・死生観」に関する認識調査報告(2)
ー沖縄・韓国高校生の比較を中心にー
○川畑三矢(鳴門教育大学大学院), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
- 2aD07 日本人の宗教と死生観および終末期医療についての一考察 ○木宮敬信・南 哲(神戸大学)
- (10 : 10 ~ 10 : 40) 座長 澤山 信一(順正短期大学)
- 2aD08 保健学習における「医療・疾病」概念についてのdeconstruction(2)
○小川克之(鳴門教育大学大学院), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
- 2aD09 生命倫理教育の進め方について(その1)
ー脳死に対する大学生の考え方ー ○桃崎一政(千葉経済大学), 大津一義(順天堂大学)
- 2aD10 エイズに関する児童生徒の認識構造の研究
○友定保博(山口大学), 下村義夫(岡山大学), 和唐正勝(宇都宮大学)
森 昭三(筑波大学), 田村 誠(横浜国立大学), 野村良和(筑波大学)
近藤真庸(岐阜大学), 住田 実(大分大学)
- (10 : 40 ~ 11 : 20) 座長 田原 靖昭(長崎大学)
- 2aD11 小学校における「死生観教育」の内容構成に関する実証的研究(4)
○射場利春(牟礼町立牟礼中学校), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
- 2aD12 小学校保健教科書の研究 ー教員への調査結果を素材としてー
○岩田英樹(茨城県立医療大学), 佐見由紀子(法政大学第一中・高等学校)
渡辺 謙(佐賀県立盲学校)
- 2aD13 小学校における第二次性徴の保健授業づくり
○奥津真理(市原市立白旗小学校), 桃崎一政(千葉経済大学), 大津一義(順天堂大学)
- 2aD14 保健の教材づくりにおける教材論的考察(1) ○住田 実(大分大学)
- (11 : 20 ~ 11 : 50) 座長 柳川 協(岡山大学)
- 2aD15 性に関する保健学習のあり方について ー情意形成に視点をあててー
○柳引宣子(千葉県立千葉女子高等学校), 大津一義(順天堂大学)
大野信郎・芦川裕一・野澤 明・白鳥 寿(千葉県立千葉女子高等学校)
- 2aD16 保健授業における情意形成の評価シート作成の試み
○今関豊一(千葉県立船橋高等学校), 大津一義(順天堂大学)
- 2aD17 心肺蘇生法練習用人形を使用した中学校保健体育「人工呼吸法」の学習効果に関する研究
○武井大輔(日本体育大学), 藤岩秀樹(日本体育大学大学院)
北田豊治(杏林大学大学院), 野井真吾・山田良樹(日本体育大学)

第2日(午前) E会場

◆一般口演

- 養護教諭 (9 : 00 ~ 9 : 40) 座長 福西 武子(横浜高等教育専門学校)

- 2aE01 「国立大学付属学校における養護教諭の職務に関する研究」(第9報)
一般教員免許取得の教育実習生への指導－調査の結果と考察－
○中川優子(横浜国立大学教育学部附属横浜中学校)
曾根睦子(筑波大学附属駒場中・高等学校), 小笠原紀代子(筑波大学附属聾学校)
- 2aE02 「国立大学付属学校における養護教諭の職務に関する研究」(第10報)
養護教諭免許取得の教育実習生への指導－調査の結果と考察－
○桑原由紀子(千葉大学教育学部附属小学校), 生田愛子(千葉大学教育学部附属中学校)
曾根睦子(筑波大学附属駒場中・高等学校)
- 2aE03 「国立大学付属学校における養護教諭の職務に関する研究」(第11報)
養護教諭教育－調査の結果と考察－
○小笠原紀代子(筑波大学附属聾学校), 曾根睦子(筑波大学附属駒場中・高等学校)
- 2aE04 「国立大学付属学校における養護教諭の職務に関する研究」(第12報)
特殊教育諸学校における教育実習及びそれを支える基礎栄養－調査の結果と考察－
○曾根睦子(筑波大学附属駒場中・高等学校)
中川優子(横浜国立大学教育学部附属横浜中学校), 小笠原紀代子(筑波大学附属聾学校)
- (9:40~10:20) 座長 小林 冽子(千葉大学)
- 2aE05 養護教諭の力量形成の研究(4)
－学校実地研究・実習を中心として－ ○大庭茂美(九州女子大学)
- 2aE06 養護活動の計画と評価に関する一考察
－養護実習における救急処置活動計画案の活用を通して－ ○後藤ひとみ(北海道教育大学)
- 2aE07 実習期間中における養護実習生のリーダーシップ行動に関する研究(第1報)
○古賀由紀子(熊本市三和中学校), 松本敬子(熊本大学)
岩坂いずみ(熊本県立八代高等学校), 佐方仁美(熊本県天草郡有明東中学校)
- 2aE08 養護教諭教育における臨床実習のサポート方法についての一考察
○神戸美絵子・矢野由紀子・青木かがり(愛知みずほ大学短期大学)
- (10:20~11:00) 座長 石原 昌江(岡山大学)
- 2aE09 セルフ・コントロールの教育実践研究(第9報)
－いじめの問題と養護教諭の役割－ ○浜口幸枝(日本大学第一中高等学校)
- 2aE10 定期健康診断に関する研究 一法改正を前にした養護教諭の認識実態調査－(その1)
○坂本富貴子・鎌田尚子・森田光子(女子栄養大学), 木幡美奈子(都立江北高等学校)
- 2aE11 定期健康診断に関する研究 一法改正を前にした養護教諭の認識実態調査－(その2)
○木幡美奈子(都立江北高等学校), 鎌田尚子・森田光子・坂本富貴子(女子栄養大学)
- 2aE12 学校健康診断に関する研究 一主として高校生の理解と実態－(第1報)
○相沢菊江(都立板橋高等学校), 細川淳一(筑波大学)
- (11:00~12:00) 座長 森田 光子(女子栄養大学)
- 2aE13 養護教諭の再学習の現状と今後のあり方
○中村和彦(山梨大学), 森 昭三(筑波大学), 友定保博(山口大学)
村内悦子(国立身体障害者リハビリテーションセンター学院), 山田七重(山梨大学大学院)
- 2aE14 養護教諭の職能成長に関する研究
－志望学生の自己教育(力)と他者からの支援についての検討－
○小林冽子(千葉大学), 林 文(東洋英和女子学院大学)
- 2aE15 養護教諭の労働条件に関する研究 ○小林育枝(東京都立武蔵高等学校)
- 2aE16 学校保健予算と養護教諭の活動 ○中村朋子・内山 源(茨城大学)

- 2aE17 養護教諭の行う保健指導の実態 - 複数配置校と単数配置校の比較 -
○石原昌江(岡山大学)
- 2aE18 汎用ソフトを利用した養護教諭の職務分析
○斉藤美磨(山口女子大学), 曾根睦子(筑波大学付属駒場中・高等学校)

第2日(午前) H会場

◆一般口演

- 疾病予防・健康管理 (9:00~9:40) 座長 山本 公弘(奈良女子大学)**
- 2aH01 保健室来室時の状況と生活態度との関連について ○竹崎登喜江(大田区立貝塚中学校)
- 2aH02 小学校高学年における日常生活と食事との関係
○竹田由美子・畑中高子・生田清美子(神奈川県立衛生短期大学)
- 2aH03 小学校6年生児童の血清脂質値と形態, 生活習慣との関連性
○森 千鶴(名古屋市立西前田小学校), 佐藤和子・天野敦子(愛知教育大学)
- 2aH04 血清脂質値の小学4年生から中学2年生に至る変化
○竹内宏一・丸山規雄・大堀兼男・中村留美子・森加奈子・甲田勝康・宮原時彦・坪井宏仁(浜松医科大学)
- (9:40~10:20) **座長 家田 重晴(中京大学)**
- 2aH05 大学生の健康管理について(3報) - 特に公立大学の学生健康管理担当職に関する課題 -
○小林育枝(東京都立武蔵高等学校)
- 2aH06 女子短大生のライフスタイルと易疲労性との関連
○美馬 信・岡崎延之(大阪女子短期大学)
- 2aH07 基礎体温所見による女子短大生の月経に関する研究(第2報)
○鈴木郁子・大村節子(長崎女子短期大学)
- 2aH08 ランナーの健康管理の実態
○田中浩子・音哉陽子(中村学園大学), 森 善彦(正樹会佐田病院スポーツ医科学研究所)
- (10:20~11:00) **座長 上林 久雄(大阪成蹊女子短期大学)**
- 2aH09 女子学生の生活行動と疲労に関する研究
- 生活習慣からみた疲労について - ○松田芳子(熊本大学), 柴田邦子(中村学園大学)
- 2aH10 「女子学生の生活行動と疲労に関する研究」 - 食生活面からみた疲労について -
○柴田邦子(中村学園大学), 松田芳子・安武 律(熊本大学), 城田知子(中村学園大学)
- 2aH11 小学生における通学時間と疲労及び生活行動要因との関連に関する研究
○富田 勤・木村郁子・佐々木胤則・横田正義(北海道教育大学)
- 2aH12 教員の疲労状況と健康管理に関する研究 ○佐藤 理・中村和利(福島大学)
- 2aH13 大学生のアレルギー疾患の実態と予後について ○堀内康生・安地真理子(大阪教育大学)

第2日(午前) J会場

◆ポスターセッションV (9:20~10:10)

- 2aJ01 医学生と短大生におけるエイズのイメージに関する検討
○武田則昭(香川医科大学), 村上淳(香川県明善短期大学)
川田久美・合田恵子・須那 滋・真鍋芳樹・浅川富美雪・寛成文彦(香川医科大学)
- 2aJ02 医学生と短大生におけるエイズに対する社会的距離に関する検討
○武田則昭(香川医科大学), 村上 淳(香川県明善短期大学)
川田久美・合田恵子・須那 滋・真鍋芳樹・浅川富美雪・寛成文彦(香川医科大学)
大須賀桂子(香川県看護専門学校), 菅西玲子(香川県立高松原高等学校)
三好和子(香川県立飯山高等学校)
- 2aJ03 性教育のあり方と高校生の意識 ○福島紀子・松本佳代子・坂井尚子(共立薬科大学)
- 2aJ04 子供のための暴行防止プログラム(CAP)の有効性について
ー参加者アンケート調査よりー ○鈴木道子(尚桐女学院短期大学)
- 2aJ05 セルフコントロールの教育研究(第10報)
ー心身症や問題行動生徒への心身医学的(全人的)アプローチー
○浜口幸枝(日本大学第一中・高等学校)

◆ポスターセッションVI (10:40~11:30)

- 2aJ06 スウェーデンにおける健康教育(第1報) ー教育制度上の位置づけー
○戸野塚厚子(宮城学院女子大学), 山梨八重子(お茶の水女子大学附属中学校)
- 2aJ07 スウェーデンにおける健康教育(第2報)
ー低学年オリエンテーション科の教科書にみる教育内容の分析ー
○山梨八重子(お茶の水女子大学附属中学校), 戸野塚厚子(宮城学院女子大学)
- 2aJ08 生殖関連技術に対する短大生の反応 ○篠原菊紀(東京理科大学諏訪短期大学)
- 2aJ09 短大生の臓器提供の意志について ○篠原菊紀(東京理科大学諏訪短期大学)
- 2aJ10 統合教育に関する日米比較研究
ー子どもの健康な発達を保障する教育の条件についての一考察ー
○加来和子(弘前大学教育学部)

第2日(午前) K会場

◆一般口演

- 健康意識・健康行動 (9:00~9:40) 座長 野原 忠博(杏林大学)
- 2aK01 看護学生の食生活意識についての一考察 ー調理実習を試みてー
○山本澄子・福森郁子・中島澄夫(藤田保健衛生大学)
- 2aK02 女子大生の日常生活の実態と骨粗鬆症に対する意識調査
○津村直子・佐藤敏雄・奥村晶子(北海道教育大学)
- 2aK03 大学生のダイエット体験に関する男女比較 ○八木橋元一(大垣女子短期大学)
- 2aK04 大学生の体型に関する意識の男女比較 ○八木橋元一(大垣女子短期大学)

(9:40~10:20)

座長 友定 保博(山口大学)

2aK05 大学院生の生活と疲労に関する研究

○浄住護雄(熊本大学), 村上亜希子(球磨郡錦町立西小学校)
横川奈生子(球磨郡五木村立五木東小学校)

2aK06 疲労スコア運動前後の変動パターンにみられる種目の特徴

○前橋 明(倉敷市立短期大学), 中永征太郎(ノートルダム清心女子大学)

2aK07 女子学生の生活リズムと生活活動時の消費熱量

○道廣睦子(倉敷看護専門学校), 前橋 明(倉敷市立短期大学)
中永征太郎(ノートルダム清心女子大学)

2aK08 大学保健教育のための「精神保健」に関する意識調査

○藤澤邦彦(筑波大学), 大内 隆(筑波大学大学院)

保健指導 (10:20~11:00)

座長 中村 朋子(茨城大学)

2aK09 すこやか教室(肥満児生活指導)の目に見えない効果

○城川美佳・高柳満喜子・西川浩昭・中谷弥栄子・松井研一(東邦大学)
加藤知己(東京電機大学), 鈴木圭子・増山恵美子(横浜市立中村小学校), 豊川裕之(東邦大学)

2aK10 気管支喘息児に対する担任教諭の保健指導の実態

○堀内康生・安地真理子(大阪教育大学)

2aK11 色覚異常者の色覚調査

○楠本久美子(大阪教育大学付属高等学校), 西 禮子(元大阪府立高津高等学校)

2aK12 小児成人病予防検診後の健康教育 -小学校での実践及び実地指導-

○加藤里恵子(江東区立亀島小学校), 小林冽子(千葉大学)

(11:00~11:40)

座長 中桐佐知子(吉備国際大学)

2aK13 小・中学校における朝の健康観察の実態

○吉村美保(葛飾区立柴又中学校)

2aK14 養護教諭に求められる総合的看護能力(第3報)

-行動変容をめざすワンポイント指導例の分析-

○山田万智子(京北中高等学校), 天野洋子(東京大学附属中高等学校)
五十嵐靖子(東京学芸大学付属大泉中学校), 糸谷外代子(都立隅田川高等学校堤校舎)
嶋本恭子(都立竹早高等学校定時制), 末吉裕子(都立北野高等学校)
鈴木裕子(横浜市立新治養護学校), 坪井美智子(都立小石川高等学校)
廣井直美(東京大学附属中高等学校), 福西武子(横浜教育専門学校)

2aK15 現職教員の「不登校」に関する認識調査III

○棟方百熊(鳴門教育大学大学院), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
板谷幸恵(女子栄養大学), 小川克之・川畑三矢・下岡康寿(鳴門教育大学大学院)

2aK16 現職教員の「不登校」に関する認識調査IV

○下岡康寿(鳴門教育大学大学院), 藤田禄太郎(鳴門教育大学)
板谷幸恵(女子栄養大学), 小川克之・川畑三矢・棟方百熊(鳴門教育大学大学院)

第2日(午前) L会場

◆一般口演

性教育・エイズ教育 (9:00~9:40)

座長 野村 和雄(愛知教育大学)

2aL01 地域における思春期保健のネットワーク(第1報) -開業助産婦への調査-

○前田順子・大森世都子(国立公衆衛生院), 衛籐 隆(東京大学)

- 2aL02 性教育指導技法の学習による研修会受講者の意識変容
○鈴木路津(千葉大学大学院), 武田 敏(千葉大学)
- 2aL03 高等学校エイズ教育における学習効果に関する一考察
○中山恭一(日本体育大学), 大塚幹太(日本体育大学大学院)
野井真吾・西村喜己彦・吉田瑩一郎(日本体育大学)
- 2aL04 高等学校におけるエイズ教育の実践報告 ―地域と連携をはかる実践例の紹介―
○山崎美佳(都立練馬工業高等学校)

(9:40~10:20)

座長 安藤 志ま(東海学校保健研究所)

- 2aL05 これからの性教育について ○安原 央(箕面学園高等学校), 荒地秀明(天理大学)
- 2aL06 エイズ教育教材(マンガHIV)の製作とその評価 ○松本恵子(大阪教育大学)
- 2aL07 「生命と性を尊重する教育」プログラムの制作とその評価 ○松岡 弘(大阪教育大学)
- 2aL08 コンドーム・性交指導をめぐる論争に関する一考察
○武田裕行(大阪教育大学), 坂田利弘(愛知教育大学)

環境保健・環境教育 (10:20~10:40)

座長 鈴木 路子(東京学芸大学)

- 2aL09 授業中の空気環境の変化 ―女子短期大学の場合―
○吉田肇子・美馬 信(大阪女子短期大学)
- 2aL10 交通騒音と不眠症に関する疫学的研究
○吉田順太・平良一彦(琉球大学), 影山隆之・兜 真徳(国際環境研究所)

(10:40~11:10)

座長 細川 淳一(筑波大学)

- 2aL11 学校におけるプール清掃の細菌学的安全性とその対策(第1報)
―プール清掃前のプール水の水質検査― ○田中千恵子(東京学芸大学附属小金井小学校)
物部博之・山崎昭紀・鈴木路子(東京学芸大学)
- 2aL12 寝具寝床内微気候に関する環境保健学的研究
―各種繊維素材別にみた寝床内微気候環境と睡眠―
○鈴木路子・物部博之(東京学芸大学), 金子健一(アイシン精機生活健康学研究所)
- 2aL13 湿度別にみた天然繊維素材「羊毛」の抗菌性発現に関する実験的研究
―スケール剥離羊毛の吸排湿機能と抗菌性の発現―
○物部博之・鈴木路子(東京学芸大学), 伊豫部志津子(群馬大学)

第2日(午前) M会場

◆フィジカルセッション I (9:00~12:00)

スポーツ傷害の予防と対応

- 2aM01 スポーツ傷害の予防 ○片岡幸雄(千葉大学)
- 2aM02 スポーツ傷害予防とメンタル・トレーニング ○霜礼次郎(日本医師会健康スポーツ委員)
- 2aM03 スポーツ外傷治療・回復と競技への復帰・継続 ○磯辺啓二郎(千葉大学)
- 2aM04 武道・スポーツ傷害に対する医療と生活のケア・システム ○山本利春(国際武道大学)
- 2aM05 学校体育と安全教育 ○阿部明浩(千葉大学)

第2日(午後) A会場

◆特別講演Ⅱ (12:50~13:50)

ヘルスプロモーションと学校保健

江口 篤寿(元筑波大学)

座長

船川 幡夫(元東京大学)

◆教育講演Ⅳ (14:00~14:40)

地域保健と学校保健

川田智恵子(東京大学)

座長

武田 壤壽(青森大学)

◆自主シンポジウムⅠ (14:50~16:40)

これからの社会に求められる保健の学力と内容

代表世話人

森 昭三(筑波大学)

第2日(午後) B会場

◆年次学会要望課題Ⅲ (12:50~14:30)

総合的健康教育と学校保健

座長

内山 源(茨城大学)

2pB01 総合的健康教育と性教育

○松岡 弘(大阪教育大学)

2pB02 総合的健康教育と学校保健管理活動

○古川寿恵子(千葉市立千城小学校)

2pB03 総合的健康教育と保健所活動

○荒木 均(茨城県潮来保健所)

2pB04 総合的健康教育とヘルスプロモーション

○内山源(茨城大学)

第2日(午後) F会場

◆自主シンポジウムⅡ (14:50~16:40)

保健室登校における対応と連携

代表世話人

本多 英子(元千葉県養護教諭会会長)

第2日(午後) H会場

◆自主シンポジウムⅢ (14:50~16:40)

幼児・児童にみられる体のゆがみの問題点と対策

代表世話人

原田 碩三(兵庫教育大学)

第2日(午後) J会場

◆自主シンポジウムⅣ (14:50~16:40)

豊かな心を育てる性の指導と養護教諭

代表世話人

三木とみ子(文部省)

第2日(午後) K会場

◆年次学会要望課題Ⅳ (12:50~14:30)

災害と子どもの健康

座長 林 謙治(国立公衆衛生院)

2pK01 救災医療活動の経験

○中村安秀(東京大学)

2pK02 養護教諭の救災活動の経験

○乾 外志(神戸市立上野中学校)

2pK03 学校管理と救災活動

○南 哲(神戸大学)

第2日(午後) M会場

◆フィジカルセッションⅡ (12:50~16:40)

キー・ノート・レクチャー 攻めの保健・守りの保健

座長 広橋 義敬(千葉大学)

金原 勇(筑波大学)

野尻 雅美(千葉大学)

第2日(午後) けやき会館2階会議室1

◆自主シンポジウムⅤ (14:50~16:40)

国際学校保健の展開

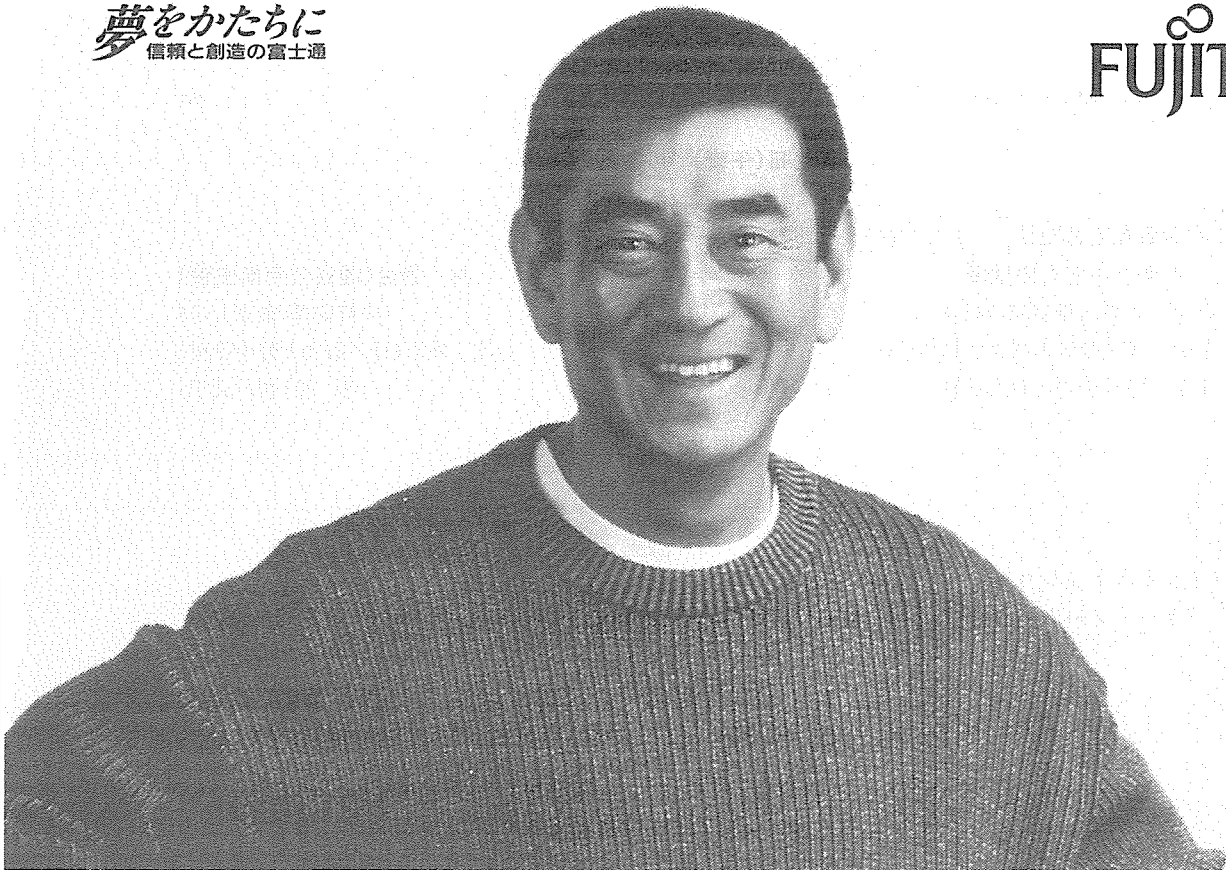
代表世話人 詫間 晋平(国立特殊教育総合研究所)

第2日(午後) けやき会館2階会議室2

◆自主シンポジウムⅥ (15:00~16:40)

養護教諭の看護能力

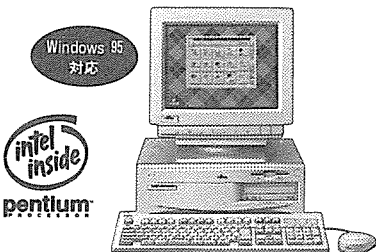
代表世話人 天野 敦子(愛知教育大学)



ベストセラーワープロ「一太郎」「Word」「OASYS」、
表計算「1-2-3」「Excel」、選べるパソコンはFMVだけ。

<p>①一太郎 Ver.6+Lotus1-2-3</p> <p>新バージョンV6.3への フリーパス・キャンペーン 対象製品となります。</p>	<p>②Word+Excel</p>	<p>③OASYS/Win+Lotus1-2-3</p>	<p>①ベストセラーワープロ一太郎Ver.6 for Windows®と、使いやすさで定評ある表計算ソフトLotus®1-2-3 R5Jの組み合わせ。 ②多彩な機能で人気のMicrosoft® Word for Windows® Version6.0と、Microsoft® Excel for Windows® Version5.0の組み合わせ。 ③豊富な機能を満載したOASYS/Win V2.3と、使いやすさで定評ある表計算ソフト Lotus®1-2-3 R5Jの組み合わせ。</p>
--	--------------------	------------------------------	---

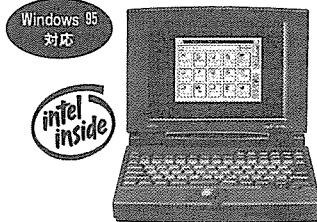
※ワープロ+表計算が、3 タイプの組み合わせから選べます。



DESKPOWER SX

(FMV DESKPOWERに、待望のPentium搭載モデル誕生。)
かんたんオールインワンの進化はつづく。

- 高性能CPU、Pentium™プロセッサ(75MHz)搭載●高格調ブラウン管採用、15インチCRT●高速処理を可能にするPCIバス採用●Windows環境を快適にする高速アクセラレータ、CL-GDS43採用●4倍 セット 価格 278,000円(税別)
- CD-ROMにステレオスピーカー標準装備 価格 278,000円(税別)



BIBLO

(FMV BIBLOがさらに身近になる。注目のA4サイズ・カラーノート登場。小型・高性能の進歩は止まらない。)

- CPU: Intel DX4™プロセッサ(75MHz)搭載●メモリは標準8MB(最大40MB)
- 340MBハードディスク搭載●10.4インチTFTカラー液晶採用●3.5インチFDDを内蔵●PCカード(TYPE I/II)×2またはTYPE III×1を搭載 標準 価格 408,000円(税別)

(富士通の国際標準機)



Pentium、Intel Insideのロゴは米国Intel社の商標です。Windowsは、米国Microsoft社の登録商標です。MS-DOS®は米国Microsoft社の登録商標です。一太郎は御ジャストシステムの登録商標です。OASYSは、オープン・アーキテクチャ推進協議会の商標です。その他、記載の会社名および商品名は、各社の商標または登録商標です。画面はハメ込み合成です。ご使用の際は、取扱説明書をよくお読みの上、ご使用ください。

043-299-3642 本広告の製品カタログを①お手持ちのFAXから、左記電話番号へダイヤルしていただき、②音声ガイドに従って、ご希望の資料番号を押していただき、(FMV DESKPOWER シリーズ1122、BIBLOシリーズ1113) FAXにてお送りいたします。(インデックス-0001)③発信音の後、FAXのスタートボタンを押し、受話器を置いてお待ち下さい。*G3 FAXのプッシュホン回線をご利用ください。



会 報

常任理事会議事概要

平成7年度 第2回

日 時：平成7年6月13日（17：30～19：30）

場 所：大妻女子大学人間生活科学研究所内 学会事務局

出席者：江口篤寿（理事長）、武田眞太郎（編集）、詫間晋平（庶務）、内山 源（国際交流）、森 昭三（学術）、大澤清二（事務局長）、上野優子（幹事）、吉田春美（事務局）

1. 前回常任理事会議事録の確認を行った。
2. 95年度学会役員選挙について
大澤事務局長より、役員選挙について選挙管理委員会（和唐委員長）の準備状況の説明がなされた。
 - ① 一連の作業における期日等を決定した。
 - ② 投票用紙には「学会印」を押印することになった。
 - ③ 得票数が同点の場合など、起こりうる問題への対処については、事前に明確にしておくよう選挙管理委員会へ申し入れておくことで、了承した。
 - ④ 選挙結果は、従来通り「学校保健研究」にて報告する。
3. 庶務関係
大澤事務局長より、現在の経理状況について、報告があった。
4. 編集関係
 - ① 武田編集担当理事より、「学校保健研究」の投稿論文とその査読、受理状況の説明がなされた。
 - ② 編集委員会の規定（細則）については、現在検討中である旨、報告がなされた。
5. 国際交流関係
内山国際交流担当理事より、本年8月に行われる第15回健康教育世界会議についての準備状況報告がなされた。
6. 学会共同研究について
森学術担当理事より、応募件数の説明ならびに審査結果について、報告がなされ、家田重晴（中京大）および勝野眞吾（兵庫教育大）を代表とする研究プロジェクトの2件が今年度の学会共同研究として決定された。
7. 年次学会時の役員会・総会について
例年通りの内容で、進めて行くこととなった。
8. 日本学術協力財団と共同主催のシンポジウムについて
学術協力財団よりの補助金によるシンポジウム共催制度について説明がなされたが、今年度は見送ることとなった。
9. その他
日本体育学会から、中教審に対する施策について、本学会の協力が得られるかの打診があった旨、報告がなされた。

お知らせ

全国養護教諭教育研究会 第3回研究大会開催案内(第2報)

1. 日 時：1995年11月27日(月) 9:30~16:00
2. 場 所：千葉大学大学院自然科学研究科大会議室(西千葉キャンパス内)
メインテーマ：養護教諭の力量形成にむけて
3. 内 容：
 - (1) パネルディスカッション(午前)

「力量形成にむけて—養護実習の目標はどのようにたてられているか」

進 行 中桐佐智子(吉備国際大学)

座 長 鎌田 尚子(女子栄養大学)

パネラー 盛 昭子(弘前大学) 大学でつけられる力量とは

小西 俊子(大阪市立新庄小学校) 新卒~3年位までの実践的力量とは

横 仁子(元小学校校長) 現場で考える力量とは

渡部木綿子(茨城大学学生) 学生の考えは
 - (2) 研究発表(午後)

座 長 石田トミ(国学院大学栃木短期大学)

 - ① 養護実習のあり方に関する研究

その1. 全国養護教諭養成機関における実習の目的・目標

養護実習研究班 大谷尚子(茨城大学)
 - ② 養護教育実習 —学外養護教育実習との関係—

松浦昭子(瀬戸内短期大学)
 - 座 長 小笠原紀代子(筑波大学附属聾学校)
 - ③ 養護実習における保健指導体験と学生の反応

石原昌江(岡山大学), 他
 - ④ 養護教諭養成教育における人間機能学実習について

野崎とも子(千葉大学), 他
 - ⑤ 若年者にみられる外反母趾の発生要因について —養成教育における研究意義—

西田マリ(千葉大学卒), 他
4. 参加費：会員2000円, 非会員3000円
参加費の受付は当日に(会員, 非会員とも)
5. 研究大会についての問い合わせは大会実行委員長(下記)へ
〒263 千葉県稲毛区弥生町1-33 千葉大学教育学部 小林冽子 TEL (043) 290-2638
6. 入会手続きは入会申込書(事務局にあり)を送付し, 会費3000円(1995年度分)を郵便振替で納入する。
研究会の目的・事業等のお問い合わせは返信用封筒を添えて研究会事務局まで。
事務局：〒448 刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学養護教育教室 堀内研究室内
TEL (0566) 36-3111内線485, FAX (0566) 36-7795
郵便振替口座番号：00880-8-86414 加入者名：全国養護教諭教育研究会

お知らせ

「国際学校保健」研究の集い

世話人代表 詫間 晋平

学校保健研究のグローバル化と情報化をめざして、世界各国、特に東南アジア、東アジア地域を視野に含めて、有効な研究テーマや方略に関してその現状と課題をシンポジウム形式で討議します。多くの皆様の参加を歓迎致します。

日 時：平成7年11月25日(土) (学会第1日目)

午後3時10分より午後6時まで。

場 所：千葉大学教育学部 F教室

(〒263 千葉市稲毛区弥生町1-33 *事務局 TEL, FAX. 043-290-2623)

シンポジスト：J. マッコネル女史 (スタンフォード大学教授)

鈴木庄亮博士 (群馬大学医学部教授), (第3回日本・スウェーデン騒音シンポジウム・組織委員長【1996. 4. 7~10】)

注記：学会プログラムにあります11月26日(日)学会第2日目午後2時50分より午後5時 (於：大学けやき会館 2階第1会議室) の会合は次年度にむけた将来計画の小ラウンドテーブルとして開催致します。ご関心のある方はこちらにもご参集下さいませよう。

新刊!

大澤清一・森山剛一・上野純子・西岡光世共著

学校保健学概論

A5判二〇〇頁 価二二六六円

読者はこの本によって学校保健の全貌とその要点を簡明に知ることが出来るはずで。これから学校保健という大きな森に足を踏み入れようとする方には森の全容を知る案内マップになるでしょうし、教員採用試験を受験しようとしている人には受験用のテキストとして利用出来るでしょう。学校医や学校歯科医、学校薬剤師の方が学校保健の概略を知るよすがともなります。また、これから大学院を受験しようという方にはこれまでに習得した知識をまとめて復習するための参考書として使っていただけのように編集しています。

内山源・柴田一男・三井淳蔵編著

健康・ウェルネスと生活

A5判二六〇頁 価二二六九円

本書は「健康・ウェルネス」を維持増進するために、その障害となる要因を究明し、科学的検討を加え、すべての人々が科学的認識を深め、実践していくことの出来る手引書、教科書となることを願っている。

内山 源他著 健康概論 価二〇六〇円

内山 源他著 健康のための生活管理 価二〇六〇円

飯田澄美子著 養護活動の基礎 価二〇六〇円

大澤 清一著 生活科学のための多変量解析 価三九一四円

公開講演会「産業空洞化問題を考える」開催さる

平成7年9月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、7月に開催された日本学術会議主催公開講演会「産業空洞化問題を考える」の概要について紹介します。

日本学術会議は、学術の成果を市民に直接還元するための活動として、日本学術会議会員が講師となって、市民を対象に年2回、日本学術会議主催の公開講演会を開催しています。

日本学術会議のグローバル化と社会構造の変化特別委員会は、いわゆるグローバル化の進展によって我が国の経済・社会が受ける諸種の影響と、それに伴う様々な問題点を吟味し、今後、我が国がとるべきそれらへの対応策の在り方を検討することをその任務とし、特に、現在の我が国にとっての最も重大な危機的事態とも言うべき「産業空洞化」の問題の分析に最重点を置いて、審議を進めつつあります。

今回の公開講演会では、この特別委員会によるそのような分析・審議の成果を踏まえて、3人の講演者によって、まず、(1)我が国の経済を全体として見てマクロ的に考察するという経済学的な視点からは、現在の長期不況と異常な「円高」に伴って余儀なくされつつある我が国産業の「空洞化」という事態をどう捉え、また、それに対応するべき経済政策はどうあるべきか、そして、次に、(2)技術工学的な観点からすれば、このような現在の状況はどのように把握され、また、それについて、どのような問題点が指摘されるべきか、そして、さらに、(3)企業経営の面から見た場合、このようなグローバル化のインパクトはどのような意味を持ち、我が国の企業はどのようにそれに対応しつつあるのか、という3つの視点からの分析が行われました。

この講演会は、平成7年7月14日(金)の午後1時20分から、日本学術会議講堂において約200名の聴講者を集め開催されましたので、その概要をお知らせいたします。

◇次 第

- 司 会 吉田 民人(第1部会員)
- 1 開会の辞 利谷 信義(日本学術会議副会長)
- 2 挨拶 吉田 民人(第1部会員)
- 問題提起
- 3 講演

(1) 日本経済再生の方途

丹羽 春喜(第3部会員)

(2) 技術移転と空洞化

富浦 梓(第5部会員)

(3) グローバリゼーションと日本企業の多国籍化

岡本 康雄(第3部副部長)

4 質疑応答

5 閉会の辞 西島 安則(日本学術会議副会長)

◇問題提起

吉田 民人(第1部会員、中央大学文学部教授)

空洞化という言葉は、英語でフォローイングアウトと言われ、これが最初に問題になったのは1960年代のアメリカであり、当時ECにアメリカの自動車あるいは電機産業が出て、アメリカの労働組合が、ジョブ、つまり仕事の輸出であるということでもかなり反対したといったようなところから始まって、日本でも、1960年代の後半には東南アジアに直接投資が開始されていた。もちろんこの種の問題は、経済のグローバル化という、まさにグローバル化と社会構造の変化特別委員会が担当しているテーマの一つであるが、その空洞化が特に最近、円高の状況の中で国際競争力の著しい低下を招くということで、ますます加速されるというふうにもみられているわけで、この種のテーマをグローバル化と日本の社会構造の変化の中でも最も緊急のテーマの一つとして取り上げることになった。

空洞化といっても産業の空洞化、金融の空洞化、技術の空洞化、あるいは産業の空洞化も生産の空洞化、経営の空洞化あるいは雇用の空洞化といったさまざまな側面があるわけで、主としてその辺の問題を「産業の空洞化」という一言である意味でラフに総括させていただいた企画である。

中身は三つあり、(1)日本経済をマクロ的な角度から見ての空洞化の原因とその対策について、(2)技術の空洞化に関して、(3)ミクロ的な企業がグローバル化の中で国際化していく。まさにそういう意味で言えばミクロ的であると同時にグローバルな、その意味

でマクロ的な観点から、それぞれ講演が行われる。

ここで出る問題は多岐にわたるが、基本的には空洞化の原因の究明と、それに対する対応策という二つの側面からの講演となるが、例えば大蔵省の立場あるいは日銀の立場、あるいは地方公共団体の立場、あるいは企業の立場、それぞれの立場によって微妙に特殊利益が反映せざるを得ないような問題構造になっているが、研究者というのはそういう特定の、つまり職業的な集団の利益から比較的解放されて、非常に客観的な判断をすることができる職業集団に属しておることから、できるだけ客観的に、一般的に特殊な利害にとらわれない角度からの検討をさせていただくことになっているので、研究者としてはこういう見方をしているんだということをぜひお聞きいただきたい。

◇日本経済再生の方途

～円高と産業空洞化問題をどう考えるべきか～

丹羽 春喜

(第3部会員、グローバリゼーションと)
社会構造の変化特別委員会委員長)

- ・ ケインズ 対 反ケインズ
 - ・ 経済学の50～100年の退歩
——ベトナム後遺症的ニヒリズム——
 - ・ 政策の不合理性と長期経済停滞
 - ・ 三重の悪循環のジレンマによる不況の永続化
 - ・ 「信賞必罰」システムのフロート制と「円高」の責め苦、そして産業空洞化
 - ・ 「低成長→低税収→財政赤字→緊縮財政→不況永続化」の悪循環
 - ・ 「リストラ不況」の危険性
 - ・ 20年以上もの超長期不況
 - ・ 結果としての「近隣弱体化」政策（対外経済摩擦の根本的原因）
 - ・ 「正常な」国際分業と「異常な」空洞化とを混同するな
 - ・ ミスリーディングな「成熟経済」パラダイム
 - ・ 歴大なデフレ・ギャップ
——それを直視しようとしないう「経済白書」の危険性——
 - ・ 「規制緩和」、「リストラ」、「行革」、「市場開放」、等々の限界と欺瞞性
 - ・ 「合成の誤謬」の問題をまじめに直視しようとしないう風潮
 - ・ 朝野をあげての幼児化現象
 - ・ 必要な「最善のシステム」ビジョン（市場経済＋国民経済予算）への回帰
——むしろ、デフレ・ギャップこそ「真の財源」——
 - ・ 震災復興と被災者支援の政策はどうあるべきか
——国家の本質的な機能とは何か——
 - ・ 混迷からの脱却へ
- およそ、上記のような諸項目について、問題点を解

きあかし、日本経済再生の方途について、国民経済予算制度を現在の市場経済をベースにしている経済体制に組み込むべし等の提言を行いました。

◇技術移転と空洞化

富浦 梓（第5部会員、新日本製鐵㈱常任顧問）

製造業は全て技術の発明と、その移転によって、拡大、発展を成し遂げてきた。鉄鋼業における技術移転の歴史を振り返ってみると、一般的に技術の個人依存性が高いものほど移転が困難であり、技術の表象可能性の高いものほど移転が容易である事に気がつく。

技術の完全な表象には多くの困難が存在し、それ故に未だ経験に依存するところが多い。技術の表象可能性を高めるには、製造に伴って生ずる現象を分析して、基本過程を取り出し、それ等を統合して新たなシステムを発現するという行為の繰返しが必要とされる。

このような経験の科学化を継続的に行われないとすると、技術の空洞化が生じやすくなる。

このような点について着目し、技術移転と空洞化について、生産技術としての工学から社会技術としての工学へのシフト等の具体的提案としてまとめました。

◇グローバリゼーションと日本企業の多国籍化

岡本 康雄（第3部副部長、青山学院大学国際政治経済学部教授）

日本の製造企業は、1960年代後半東南アジアに生産拠点を軸とした海外直接投資を始めた。そして70年代に入ると、貿易摩擦回避がらみで米国向けの海外直接投資が、電機・電子、さらに乗用車といった分野において大規模に行われるにいたった。EUにも同じ様な分野での生産拠点の形成が進められた。この間、日本企業の競争優位資源の海外移転が果たしてどのように行われうるか、が重要な課題であった。

他方、世界規模では、各国、特に先進国間の所得水準の平準化と市場の同質化技術水準の均等化と革新の同期化が進み、情報通信技術の急速な進歩とそれによる伝達コストの低下、各国制度の自由化がこれに加わって、80年代国境なき経済——グローバリゼーションが急速に進展し、グローバル規模での競争が重要な課題であった。

そして80年代後半からは、アジアNIES、90年代にはアセアンが台頭し、東アジア全体がグローバルな注目を浴びるにいたっている。そして日本は、急速な円高によりアセアンへの生産移転を急テンポに進めざるをえなくなっている。それは、日本国内の空洞化を誘発している。

これら三つは、今現在、同時解決を求められている課題である。このトライアドについて考察しました。

※ なお、この講演会の模様については、前回の講演会と同様、日学双書No.24「産業空洞化問題を考える」として、(財)日本学術協力財団より刊行予定です。

編 集 後 記

前号の特集「震災時の危機管理—学校の役割—」に続いて、本号でも阪神・淡路大震災関連の現場からのレポートを特集することにした。

大都市を直撃した未曾有の阪神・淡路大震災は被災地の学校にかつて経験したことのない多くの貴重な教訓を残した。これらの教訓を風化させることのないよう特集記事として記録に留めたいという思いからである。

被災した子どもたちのPTSDの予防を含めた心のケアの問題はいうに及ばず、地域の人々の避難所として学校が直面した物心両面での多くの問題、教育機関としての機能回復への足どりなどの記録と、これらの経験を通して、地域住民の健康、安全への積極的ななかかわりが期待される学校として

の今後の在り方、とくに、柔軟に対応しうる危機管理体制や保健室の整備、さらには環境衛生面の配慮など、平時から心がけておかねばならない課題等について、学校教育、学校保健の立場からの生の声を被災した学校にかかわる学識経験者、校長、養護教諭その他の関係者から寄せてもらった。同じ被災地であっても、その災害の様相や住民の反応などは、それぞれのスポットによって大きく異なっていた。したがって、各著者の記述にニュアンスの差がみられるが、そのいずれもが当時の実態であり、そこから導かれた教訓である。

通読されて、読者の立場での1つのイメージにまとめ上げられることを期待する。

(武田眞太郎)

「学校保健研究」編集委員会

EDITORIAL BOARD

編集委員長 (編集担当常任理事)

武田眞太郎 (和歌山医大)

編集委員

荒島真一郎 (北海道教育大, 札幌校)

岡崎 康夫 (金沢大, 教育)

数見 隆生 (宮城教育大)

佐藤 祐造 (名大, 総合保健体育科学センター)

實成 文彦 (香川医大)

鈴木美智子 (九州女子短大)

寺田 光世 (京都教育大)

友定 保博 (山口大, 教育)

林 謙治 (国立公衆衛生院)

堀内久美子 (愛知教育大)

美坂 幸治 (鹿児島大, 教育)

宮下 和久 (和歌山医大)

山本 公弘 (奈良女子大, 保健管理センター)

横尾 能範 (神戸大, 国際文化)

編集事務担当

南出 京子 (和歌山医大)

Editor-in-Chief

Shintaro TAKEDA

Associate Editors

Shin-ichiro ARASHIMA

Yasuo OKAZAKI

Takao KAZUMI

Yuzo SATO

Fumihiko JITSUNARI

Michiko SUZUKI

Mitsuyo TERADA

Yasuhiro TOMOSADA

Kenji HAYASHI

Kumiko HORIUCHI

Koji MISAKA

Kazuhisa MIYASHITA

Kimihiko YAMAMOTO

Yoshinori YOKOO

Editorial Staff

Kyoko MINAMIDE

「学校保健研究」編集部【原稿投稿先】 〒640 和歌山市九番丁27

和歌山県立医科大学衛生学教室内
電話0734-26-8324

学校保健研究 第37巻 第4号

1995年10月20日発行

Japanese Journal of School Health Vol.37 No.4

(会員頒布 非売品)

編集兼発行人 江 口 篤 寿

発行所 日本学校保健学会

事務局 〒102 東京都千代田区三番町12

大妻女子大学 人間生活科学研究所内

電話 03-5275-9362

事務局長 大澤 清二

印刷所 株式会社 昇和印刷 〒640 和歌山市中之島1707

TAHO 大鵬薬品



1000でもない、
1500でもない、
タウリン2000mg配合。
味もすっきり、新登場。

滋養強壮・肉体疲労時の栄養補給に

チオビタ[®]
ドリンク2000

医薬品

JAPANESE JOURNAL OF SCHOOL HEALTH

CONTENTS

Preface:

What I Have Learned in Toronto. Makoto Higurashi 262

Special Issues: Schools at the Great Hanshin-Awaji Earthquake

- Reports from the Disaster Area -

On Mental Health Care for School Children after
the Hanshin-Awaji Great Earthquake Sadaaki Shirataki 263

Passing in Fear and with a Feeling of Helplessness Ikuyo Oohashi 268

What I Found by Personal Experience of the Great Earthquake Etsuko Imade 272

My Earthquake Disaster's Experience

- Elementary School Principal's Report - Susumu Yamaguchi 277

School as an Emergency Refuge from Jan. 17 to Jan. 26 Mitsuo Ichikita 283

Living in Shock with Disrupted Utilities Tetsuji Bando 289

Learning by Experience from the Hanshin-Awaji Great Earthquake Yoko Murata 298

Caring for Children's Psychological Stress of the Great Hanshin-Awaji Earthquake

- The Leading Role of School Nurses - Yoshiko Akase 305

Experiences of a Great Earthquake Mitsuyo Tateishi 312

Research Paper:

Ecological Correlations and Anthropometric Variations in Chinese Youths
..... Seiji Ohsawa *et al.* 318

Report:

A Report of a Survey on Assistant Language Teachers (ALTs) Staying in Japan
who Received Medical Treatment. - Shizuoka Prefecture -
..... Yuka Ohkouchi *et al.* 329

Program of the 42nd Annual Convention of
the Japanese Association of School Health 343

Japanese Association of School Health